

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第493集

おつさり

押切遺跡発掘調査報告書

一関遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査

2007

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

押切遺跡発掘調査報告書

一関遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県上づくりには公共事業や社会資本の整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一関遼水地事業衣川左岸築堤工事関連して平成16年に発掘調査された胆沢郡衣川村押切遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、現地表下4mの層位から12世紀のかわらけ片の出土が確認され、12世紀平泉周辺の遺跡の広がりと旧地形の復元研究に関して重要な資料を得ることができました。また近代の鍛冶造構も発見され、地域の歴史に新たなページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、旧衣川村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧雄

例　　言

1. 本報告書は、岩手県奥州市衣川区大字下衣川字大石ヶ沢1-4ほかに所在する押切遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下のとおりである。
遺跡番号：N E 65-2359　　遺跡略号：OK-04
3. 本遺跡の調査は一関遊水地事業衣川左岸築堤工事に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受諾事業として実施した。
4. 野外調査の面積及び調査期間、調査担当者は以下の通りである。
野外調査面積：3,920m²　　野外調査期間：平成16年8月19日～9月30日
調査担当者：文化財調査員 鈴木裕明　　文化財専門員 羽柴直人
5. 室内整理期間、担当者は以下のとおりである。
室内整理期間：平成16年11月12日～平成17年3月31日
整理担当者：文化財調査員 鈴木裕明、窓岩伸吾　　文化財専門員 羽柴直人
6. 各種鑑定・分析は以下の方にお願いした。
石材鑑定……………花崗岩研究会
鉄滓及び鍛造剥片の分析…………JFEテクノリサーチ株式会社
基準点測量……………測設計株式会社
7. 本報告書の執筆は「I. 発掘調査に至る経過」については国土交通省岩手河川国道事務所に原稿を依頼した。その他は鈴木、羽柴が分担して執筆した。
8. 野外調査及び、本報告書の執筆にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。(順不同、敬称略、所属平成16年度現在)
千葉啓一（前衣川村教育長）、及川真紀、鹿野里絵（奥州市世界遺産推進室）、本澤真輔（平泉町善阿弥）、及川司、菅原計二、鈴木江利子（平泉町教育委員会）、八重樋忠郎（平泉町世界遺産推進室）
9. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

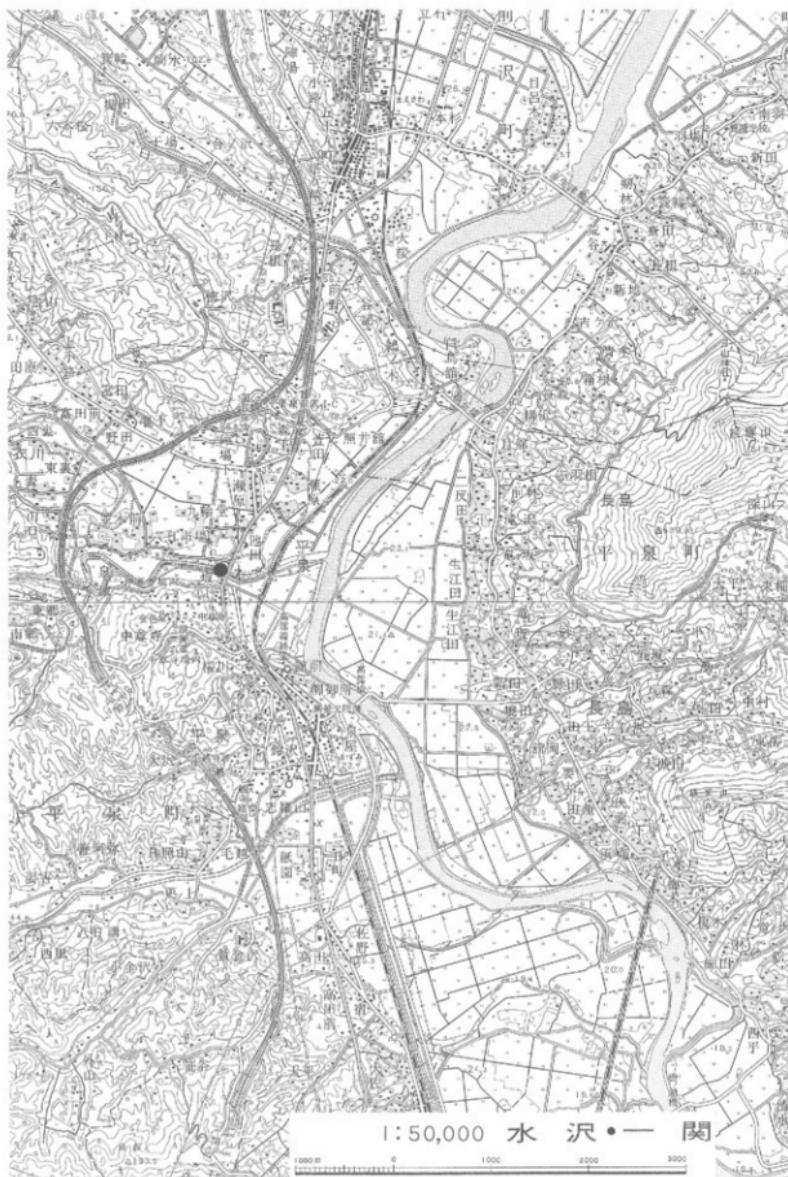
I 調査に至る経過.....	1	3 近代陶磁器	25
II 遺跡の位置と環境.....	1	4 ガラス瓶	40
1 遺跡の位置と立地	1	5 金属製品	46
2 周辺の遺跡	3	6 石製品	46
III 調査の概要と整理方法.....	7	7 その他の製品	52
1 調査の経過	7	8 銭貨	56
2 調査の概要	7	9 羽口	56
3 屋外調査の方法	7	10 鉄滓、鍛造剥片	56
4 室内整理の方法	8	VII 自然化学分析	59
5 基本土層	9	1 押切遺構出土鉄滓の分析調査	59
IV 検出遺構.....	11	VIII まとめ	64
1 検出遺構の概要	11	1 近代遺構の成立と廃絶年代	64
2 検出遺構	15	2 出土遺物について	64
V 出土遺物.....	22	3 「押切」に関する文献記録	65
1 かわらけ	22	報告書抄録	88
2 近世陶磁器	23		

図版目次

第1図 遺跡位置図	36		
第2図 地形分類図.....	2	第20図 近代陶磁器⑦ (87~99)	36
第3図 周辺の遺跡と地形.....	5	第21図 近代陶磁器⑧ (100~103)	37
第4図 基本土層.....	9	第22図 近代陶磁器⑨ (104~108)	38
第5図 押切遺構遺構配置図.....	10	第23図 近代陶磁器⑩ (109~110)	39
第6図 トレンチ設置平面図.....	12	第24図 ガラス製品① (111~130)	42
第7図 第I面遺構配置図.....	13	第25図 ガラス製品② (131~142)	43
第8図 第II面遺構配置図.....	14	第26図 ガラス製品③ (143~148)	44
第9図 1・2号排溝.....	15	第27図 ガラス製品④ (149~156)	45
第10図 1号溝・2号石組み遺構.....	18	第28図 金瓶製品① (157~161)	47
第11図 1号石組み遺構、1・2号鍛冶所、1号土坑.....	19	第29図 金瓶製品② (162~169)、石製品① (170~171)	48
第12図 12世紀のかわらけ (1~7)	22	第30図 石製品② (172)	49
第13図 近代陶磁器 (8~16)	24	第31図 石製品③ (173~174)	50
第14図 近代陶磁器 (16~30)	30	第32図 石製品④ (175~176)	51
第15図 近代陶磁器 (31~45)	31	第33図 石製品⑤ (177)	52
第16図 近代陶磁器 (46~62)	32	第34図 その他の製品 (178~185)	53
第17図 近代陶磁器 (63~67)	33	第35図 銭貨① (186~200)	54
第18図 近代陶磁器 (68~77)	34	第36図 銭貨② (201~213)	55
第19図 近代陶磁器 (78~86)	35	第37図 羽口① (214~218)	56

写真図版

写真図版1 調査箇所、遺構.....	68	写真図版11 近代陶磁器③ (36~52)	78
写真図版2 深掘トレンチ.....	69	写真図版12 近代陶磁器④ (53~66)	79
写真図版3 1号排水溝.....	70	写真図版13 近代陶磁器⑤ (67~76)	80
写真図版4 2号排水溝.....	71	写真図版14 近代陶磁器⑥ (77~86)	81
写真図版5 1・2号鍛冶所、1号土坑、1号溝.....	72	写真図版15 近代陶磁器⑦ (87~102)	82
写真図版6 1・2号石組み、第II面レンガ組み.....	73	写真図版16 近代陶磁器⑧ (102~109)	83
写真図版7 第I・II面、深掘トレンチ.....	74	写真図版17 近代陶磁器⑨ (110)、ガラス製品① (111~138)	84
写真図版8 かわらけ (1~7)、近世陶磁器 (8~15)	75	写真図版18 ガラス製品② (139~156)	85
写真図版9 近代陶磁器① (16~25)	76	写真図版19 羽口① (214~229)	86
写真図版10 近代陶磁器② (26~35)	77	写真図版20 鐵治所・鍛造剥片	87



第1図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

押切遺跡は、北上川上流改修・閑遊水地事業・衣川左岸上流地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行にともない、発掘調査を実施することとなったものである。

一閑遊水地事業・衣川左岸上流地区は、衣川村大字下衣川の延長約1.4kmの築堤工事等を行うこととし、平成15年度に用地取得を始めとし、事業着手しており、周辺地域を洪水から守るために堤防整備を進めいくこととしている。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、当該事業の施行主体である岩手県河川国道事務所の依頼を受け、平成15年度に岩手県教育委員会が試掘調査を実施しており、その結果を踏まえ岩手県教育委員会事務局との協議により平成16年度、財團法人岩手県文化振興事業団に調査を委託することとなつたものである。
(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

II 遺跡の位置と環境

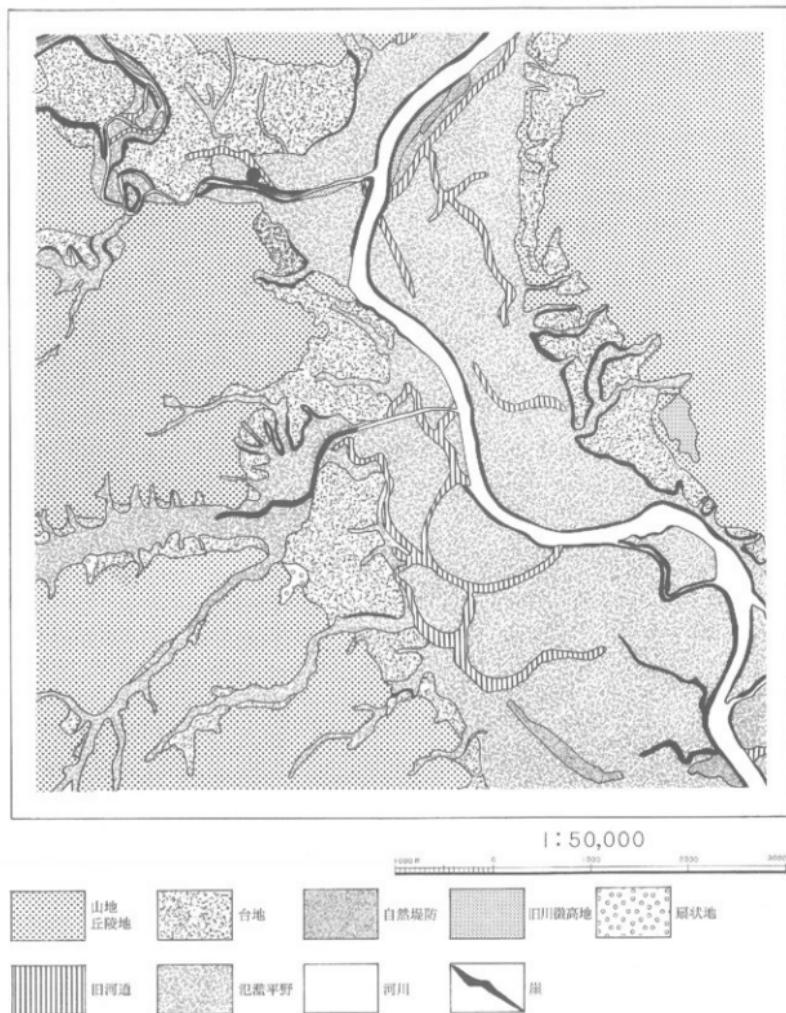
1 遺跡の位置と立地

本遺跡は岩手県奥州市衣川区大字下衣川字大石ヶ沢1-4ほかに所在する。野外調査時は胆沢郡衣川村に属していたが、平成18年2月に水沢市、江刺市、胆沢町、前沢町との市町村合併により、奥州市衣川区に区分されることとなつた。奥州市衣川区は奥州市の南端に位置し、北側と西側は奥州市胆沢区、東側は奥州市前沢区、南側は西磐井郡平泉町に接している。衣川区の東部には国道4号と東北自動車道が南北に縦貫し、交通の要衝をなす地域である。

衣川区は衣川上流部の上衣川地区と下流の下衣川地区に大きく分けられる。押切遺跡は下衣川地区に属する。旧衣川村役場から南東約6km、衣川区の最東端に近い位置である。調査区は衣川の北岸に位置し、東端は国道4号に接する。調査前、調査区の東側は国道4号と同じ高さ（標高約23.7m）まで盛土造成がなされ、ドライブインが建っていた。他の部分は水田、畑として利用され、標高は21.7m～22.0mであった。調査区南側は衣川の暫定堤防に接している。暫定堤防の頂部の標高は約23.8mである。調査区に接する衣川の水面は標高約17.8mである。基準点1 グリッド杭IVX0a (X=-110300.00m Y=23650.000m) の緯度は39° 00' 22"、経度は141° 06' 23"（世界測地系）である。基準点1 (IVX0a) の杭頭の標高は21.313mである。

遺跡は衣川北岸の氾濫平野に立地する。調査前の状況は概ね平坦な地形で、標高は約21.5mであった。平成14年7月の台風6号に伴う洪水では、衣川に架かる衣川橋、遺跡東側の国道4号が冠水し、通行が遮断されている。本遺跡の調査区内も冠水している。この洪水では、遺跡周辺の氾濫平野に地形区分される地域は、概ね冠水している。

1 造跡の位置と立地



第2図 地形分類図

2 周辺の遺跡

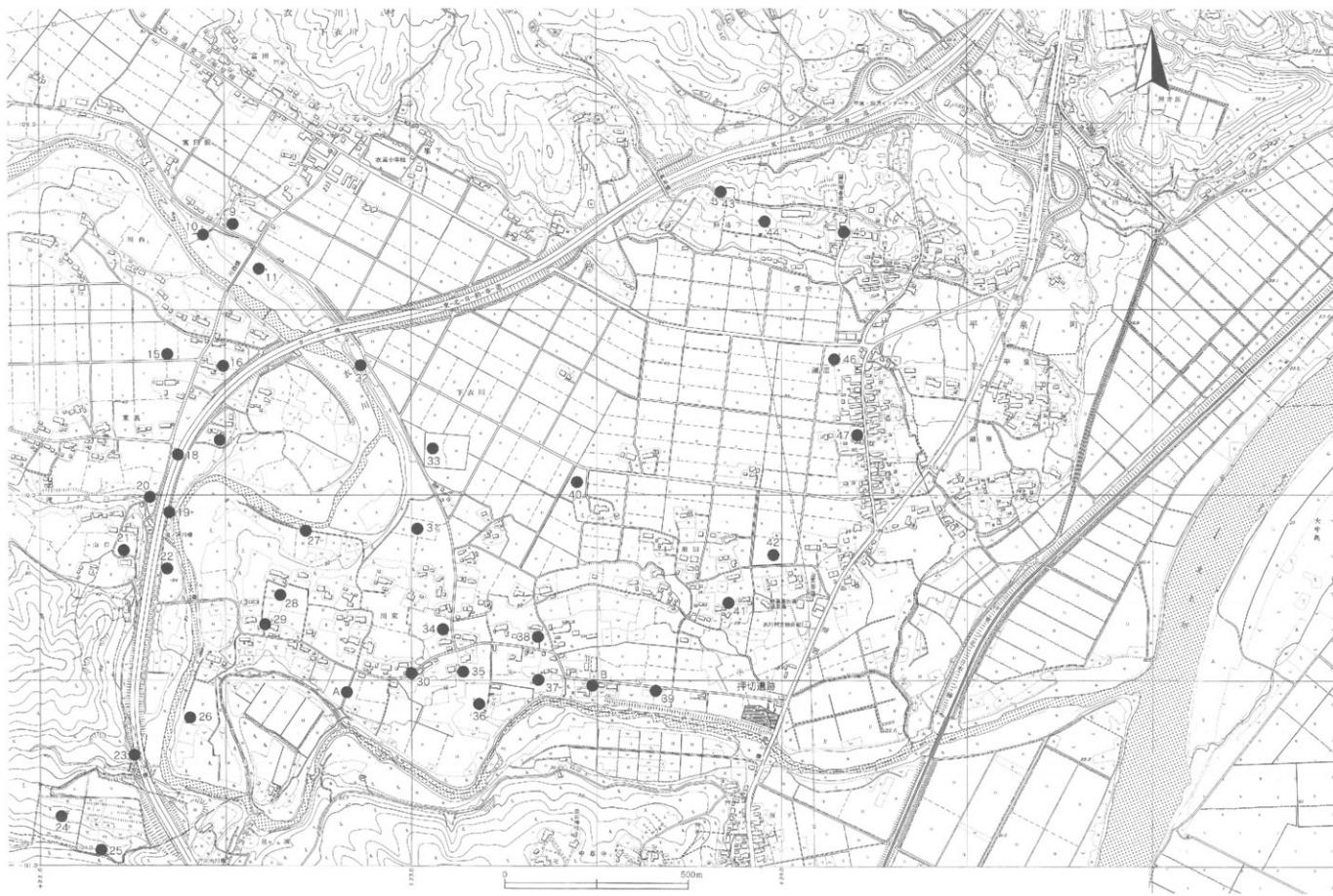
奥州市衣川区は11世紀の奥六郡の豪族安倍氏、12世紀の平泉文化を築いた奥州藤原氏に関する伝承が多数存在する地域である。本遺跡が位置する下衣川地区は、安倍氏、奥州藤原氏の伝承が衣川区の中でも特に濃密に分布する地域である。これらの伝承地のほとんどは、実際に当時期の遺跡であるか否か不明であるが、12世紀の居館と伝承される接待館遺跡では12世紀のかわらけが採集されており、伝承の信憑性の高さを示唆している。ここでは押切遺跡周辺の伝承地を含めた遺跡について記載する。掲載した遺跡地図は、昭和63年刊行の「下衣川地区 遺跡詳細分布調査報告書」(衣川村教育委員会1988 岩手県衣川村文化財報告書第3集)に掲載の地図に加筆したものである。また遺跡の内容もこの分布調査報告書を参照した部分が多い。この遺跡分布調査は、遺物、遺構が確認されていない伝承地についても取り上げており、下衣川地区における伝承を知る上で良好な資料である。本文中の遺跡番号はこの分布調査報告書の遺跡番号をそのまま用いている。またこの分布調査報告書に掲載されず、近年発掘調査された「利罐遺跡」、「細田遺跡」についてそれぞれA、Bの記号を付し地図上に示した。

番号	遺跡名	種別	時代	伝承など
9	阿鎌	館跡?	不明	安倍頼時の一族の居館
10	湯葉	湯場	近世～昭和初期	温泉の湯水場所 昭和初期まで営業
11	八日市場	市場跡?	不明	(奥州) 藤原氏全盛の頃の市場跡
15	上西谷坊 屋敷	屋敷跡	不明	中尊寺の属寺である上西谷坊が所在したとされる。
16	石倉・東裏	散布地	绳文時代晚期	绳文時代晚期の遺物を包含する遺跡。東北道自動車建設で発掘調査がおこなわれる。岩手県教育委員会1980 東北道自動車道関連遺跡発掘調査報告書VI
17	姥神	祠跡	不明	義経が平泉に下向の時、北の方出産した若君を育てた母乳(姥)を祭った汁と伝承。石祠、破損した石鳥居がある。
18	北郷	集落、 散布地	绳文時代・ 古代・近世	東北道自動車道建設で発掘調査がおこなわれる。岩手県教育委員会1980 東北道自動車道関連遺跡発掘調査報告書V
19	大手門	大手門?	不明	衣川橋に安倍頼時が居住した時の大手(門)と伝承
20	横道下	散布地	绳文時代	绳文土器、石器が採集される。
21	館 (山口館)	居館跡	不明	安倍頼時の居館と伝承される。昭和62年に衣川村教育委員会により発掘調査。柱穴、溝と绳文土器が出土。
22	小松館 (小松櫛)	居館跡	不明	安倍貢の叔父官窓の居館とされる。
23	衣川園	閑跡?	不明	東北道自動車道建設で発掘したが、構造、遺物は検出されず。報告書では「何故本遺跡の名称が多くの如きものになったか不明である。」としている。岩手県教育委員会1980 東北道自動車道関連遺跡発掘調査報告書V
24	松下	散布地	绳文時代	閑里の間に多量の绳文土器が出土したとされる。
25	経塚 (南暮塚)	経塚	不明	塚が所在し、「南暮塚」という行脚僧が納経した経塚とされる。五大株子が刻まれる碑が立っている。
26	琵琶池	柵跡?	不明	安倍貢の叔父成道の居城とされる。
27	桜源	伝承地	不明	安倍頼時が衣川岸に桜源を植樹した場所とされる。
28	衣川橋	居館跡	不明	並木屋敷遺跡とも称される。安倍氏累代の居城とされる。北東に上星が残存している。
29	大手	大手門?	不明	衣川橋に安倍頼時が居住した時の大手(門)と伝承

番号	遺跡名	種別	時代	伝承など
30	樟森	伝承地	不明	安倍貞が櫻を埋めた所、あるいは藤原秀衡が櫻を植いた所と伝承される。
31	御蔵場	御蔵場	近世	年貢米を集積、出荷する近川下衣川村の御蔵場。
32	渡船場	渡船場	不明	衣川岸～水中に柱脚を打ち込んだ残橋跡がある。時期は不詳。昭和49年に岩手大学により調査。衣川村教育委員会1974 衣川渡船場跡一岩手県 魁沢郡衣川村所在――
33	長者ヶ原 萬寺	寺院跡	古代	礎石跡が残存する。伝承では金堀り吉次の「吉次屋敷」とされる。昭和35年以来の発掘調査で寺院跡と確認されつつある。平成17年に国指定史跡 衣川村教育委員会2004 長者ヶ原萬寺跡発掘調査報告書―第6次調査― ほか
34	宿道跡 (上、下)	宿場跡	不明	安倍氏全盛の頃道路を挟んで宿場を設け、それぞれ上宿、下宿と称したとされる。
35	七日市場	市場跡	不明	安倍氏時代の上宿、下宿が（奥州）藤原氏の時代になって、六日市場、七日市場、八日市場と変化したとされる。
36	衣の関道	関道跡	12世紀	安倍氏、奥州藤原氏の時代の交通路と伝承される。平成17年度に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査。
37	接待館	居館跡	12世紀	藤原秀衡の母の居館と伝承。12世紀のかわらけが採集されている。平成16、17年に健吾手取文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査。
38	下宿	宿場跡	不明	安倍氏全盛の頃道路を挟んで宿場を設け、それぞれ上宿、下宿と称したとされる。
39	六日市場	市場跡	12世紀	安倍氏時代の上宿、下宿が（奥州）藤原氏の時代になって、六日市場、七日市場、八日市場と変化したとされる。平成17年度に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査。
40	室の樹	伝承地	不明	奥州藤原氏の時代、木を植栽し、庭園にしたと伝承される。
41	池の辺坊 屋敷	屋敷跡	不明	中尊寺の属寺「池の辺坊」が所在した場所とされる
42	九輪塔	墳墓	不明	藤原秀衡が建立した塔の跡、又は安倍頼時の墓所と伝承される
43	折形森	鐘楼跡か	不明	藤原秀衡の時代に設置された鐘楼跡とされる。平成14年度に大谷女子大学博物館による発掘調査がおこなわれたが、時期、性格を特定することはできなかった。大谷女子大学博物館 2003 衣川・折形森遺跡―発掘調査報告書―
44	陣場山	陣場跡？	不明	前九年合戦の際に源義義が陣所にした場所とされる。
45	鉄砲場	鉄砲場跡	近世	灘原足利の武術の練習場である。また前九年合戦の際に源義義の陣場との伝承もある。
46	木戸 請 擬定地	既合跡？	不明	平泉全盛の頃、乗馬数百頭を繋いだ競跡とされる。
47	足輕屋敷	屋敷跡	近世	明暦2年（1656）、奥州街道沿いに垣面状に屋敷剥された足軽組37人の屋敷跡。

※1～8、12～14は今回掲載の地図範囲外にあり、省略

A	浜端	集落	縄文中期	平成17年度に衣川村教育委員会で発掘調査
B	鶴山	集落	12世紀、近世	平成17年度に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査



第3図 周辺の遺跡と地形

III 調査の概要と整理方法

1 調査の経過

平成16年8月上旬に調査地の確認、プレハブ用地の選定をおこなっている。8月19日（水）に川崎村（現一関市川崎町）の河崎の柵擬定地発掘調査事務所から発掘調査機材を積み込みし、押切遺跡事務所に機材を搬入した。同日より調査区東側の国道4号に接する旧ドライブイン盛土造成面の除去を重機により開始した。8月25日（水）より調査区西側部分に試掘トレンチを設置し、人力により掘り下げをおこない、遺構面の検出をおこなった。その結果コンクリートのたたきを有する第Ⅰ面を検出した。その後第Ⅰ面の検出をおこない遺構精査をおこなった。第Ⅰ面の実測、写真撮影終了後、再びトレンチを設定し、第Ⅰ面より下の検出をおこなった。その結果、硬化した面、石組み等が検出され、第Ⅱ面として検出面の広がりを確認した。そして、検出した遺構の精査、実測写真撮影を9月中旬に終了した。

9月6日（月）より、第Ⅱ面の遺構精査と平行して、第Ⅱ面以下の遺構、遺物の有無を確認するため調査区中央にトレンチを設定して重機による深掘りを開始した。トレンチは地表から約5mの深さ（標高16.9m）まで掘り込み、土層観察、実測、写真撮影をおこなった。9月下旬には安全を配慮してトレンチの埋め戻しをおこなっている。

9月30日（木）には発掘機材を接待館遺跡へ移動し、押切遺跡の調査を終了した。

2 調査の概要

検出された遺構は鍛冶炉2基、排溝場2箇所、土坑1基、溝1条、石列2条である。いずれも近代以降の遺構である。昭和23年のカサリン台風まで遺跡地内には2軒の民家があり、その内1軒は鍛冶屋を営んでいたという。検出遺構の多くはこの鍛冶屋に関するものと判断される。

この近代遺構に伴う遺物は陶磁器、ガラス瓶が大コントナ（容積約36ℓ）7箱、石臼4個体分、他に錢貨、キセル、土人形など出土している。鍛冶に関連する遺物は羽口、鍛冶滓、鍛造剝片が多くある。近代遺物以外に近世の陶磁器も少量出土しているが、遺構との関連は不明である。

また、近世以前の遺構の有無を確認するため調査区中央部分で深掘をおこなった。その結果、基本土層の第Ⅲ層から12世紀後半の手づくねかわらけが6片出土した。第Ⅲ層は現地表面から約4mの深さで、洪水堆積層である。かわらけ片は洪水時に砂礫とともに上流から運ばれてきたものと推測される。このⅢ層を取り払ったⅢ層上面で遺構の有無を確認したが、遺構は検出されなかった。Ⅲ層上面で遺構検出をおこなった面積は約200m²である。このように第Ⅲ層に手づくねかわらけが包含されたことから、12世紀から現代までに4m以上の土砂が堆積した事実が判明した。

3 野外調査の方法

グリッドの設定

グリッドは平面直角座標のX系（世界測地系）に沿って設定した。大グリッドは一方50mとしている。東西ラインは西から東に向かってA、B、C、D、E、F……とアルファベットの大文字を

3 野外調査の方法

50m毎に付し、南北ラインは北から南へ向かってO、I、II、III、IV、V……とローマ数字を50m毎に付している。大グリッドの呼称は南北ラインのローマ数字と東西ラインのアルファベットの大文字との組み合わせで「II B」、「IV D」というように表す。大グリッドはさらに内部を一辺5mの小グリッドに細分している。小グリッドは西から東に向かってa、b、c、d、e、f、g、h、i、jとアルファベットの小文字で付し、南から北に0、1、2、3、4、5、6、7、8、9とアラビア数字を付す。グリッドの呼称は大グリッドと小グリッドの組み合わせで「IA 3 c」「IV D 7 a」というように示す。グリッドの南西隅がそのグリッドの名称を示す。本調査で設置した基準点は以下の通りである。

基準点1 IV X0 a X=-110300.00m Y=23650.000m (世界測地系)

基準点2 IV X0 e X=-110300.00m Y=23670.000m (世界測地系)

基点であるOA0aの座標値はX=-110500.00m Y=22500.000m (世界測地系)である。

このように広範囲を対象とするグリッドを設定したのは、長さ1200mに及ぶ衣川左岸築堤工事に関わる遺跡発掘調査区全体をカバーする目的からである。

遺構の名称

遺構の名称は略号を用いず、頭に1号、2号の番号を冠し、「1号鍛冶炉」、「2号石組み遺構」というように称している。また単独で「レンガ列」、「ゴミ穴」という名称も用いている。

相掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレーナーを設定し、遺物の包含状況、遺構の確認面を把握した。その後、遺構確認面まで重機を用いて表土を除去した。遺物を多く包含する層に関しては人力によって表土の除去をした。遺構の確認は表土を除去した面をジョレン、両刃鎌で、平滑にし、プランを確認するようにした。

遺構の精査

検出した遺構は、土層を観察するベルトを設定して掘り下げることを基本とした。

遺物の取り上げ

遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構内の遺物は必要と思われる場合、地点とレベルを記録した。またそれ以外では可能な限り埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

実測・写真撮影

平面実測は簡易遺り方測量で、5mグリッドを1mに細分したメッシュを用いておこなった。原則として1/20の縮尺を用い、必用に応じて任意の縮尺を用いた。

写真撮影は35mmモノクロームとカラースライドを主に使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行った。

4 室内整理の方法

出土遺物は水洗注記を行い、必用なものは接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物を選び出し、登録をおこなった。

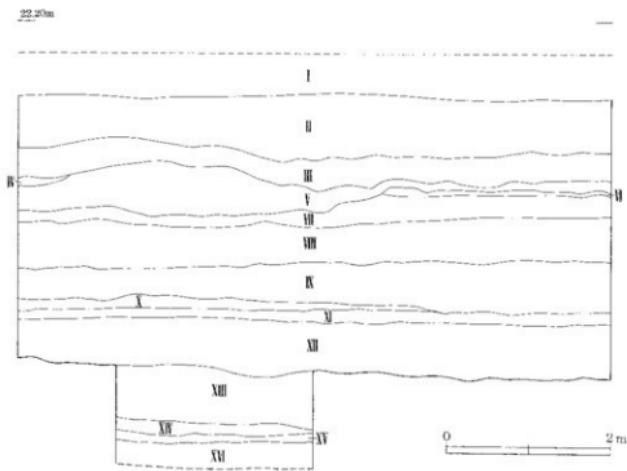
遺物実測は原則として実寸で行った。野外調査で作成した遺構実測図は、必要なものについては第2原図を作成した。その後、これらの遺構、遺物実測図のトレースを行い、種別ごとに観察表と図版を作成した。

撮影したフィルムはネガアルバムにペタ焼きの写真と一緒にして収納した。カラースライドはスラ

イドファイルに撮影順に収納した。また報告書掲載分の遺物の撮影を行い、写真図版を作成した。これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。

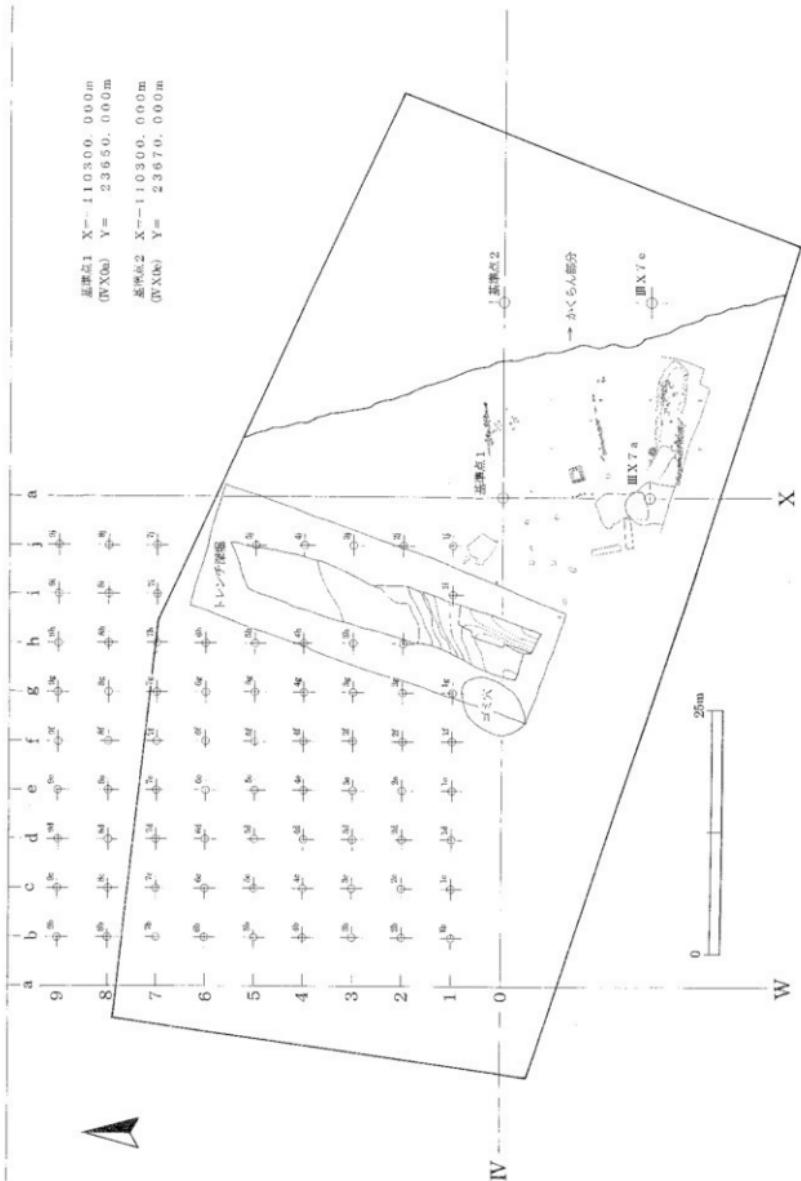
5 基本土層

調査区中央に、南北に横断する深堀トレンチ掘削した、その東壁を基本土層として示す。



- I層 10YR5/4 にふい黄褐色砂 層厚 50~70cm
- II層 10YR5/3 にふい黄褐色土 極化物粒、礫、酸化鉄分多量混入
近代のものが出土
- III層 10YR4/4 黄色土 10YR6/4 にふい黄褐色土 まだら多量混入
炭化物粒多量混入 近世磁器片出土
- IV層 10YR6/1 黄灰色土 炭化物粒多量混入
- V層 10YR4/4 黄色土 酸化鉄分少量混入 粘性あり
- VI層 10YR6/4 にふい黄褐色砂 石英が多く白っぽい部分もある
- VII層 10YR5/4 にふい黄褐色土 粘性あり 砂粒が少量混入する
- VIII層 10YR4/4 黄色土 砂粒少量混入 崩つても半滑にならない土
- IX層 10YR5/4 にふい黄褐色土 炭化物粒、酸化鉄分少量混入 粘性あり
- X層 10YR6/4 にふい黄褐色砂
- XI層 7.5YR6/6 黄色土 酸化鉄分少量混入 粘性あり
- XII層 10YR6/3 にふい黄褐色砂 磷（小豆大～こぼし大）多量混入
12世紀手づくねかわらけを埋入する
全体に縦状の溝すじが見える
流水による堆積層か しまりあり
- XIII層 10YR4/4 黄色土 炭化物粒少量混入 層中に部分的に砂の筋が見える
粘性あり
- XIV層 5YR7/1 灰色土 酸化鉄分多量混入
- XV層 5YR7/6 灰色砂 酸化鉄分の沈殿のため暗色を呈す
この層より水が湧く

第4図 基本土層



第5図 押切造跡遺構配置図

IV 検出遺構

1 検出遺構の概要

発掘調査は調査区東側のドライブインの盛土造成面、調査区中央～西側の水田造成面、畑耕作上の除去から開始した。それらの表土を除去したところ、3箇所のコンクリートのタタキ面が検出され、近似するレベルに礫の散布もみられた。この面を「第Ⅰ面」とした。畑の耕作上はにぶい黄褐色砂質土（基本土層Ⅰ層）で洪水起源の砂と推測される。第Ⅰ面出土の陶磁器、ガラス瓶の年代観、コンクリートの使用年代観から、基本土層のⅠ層は、昭和22年のアイオン台風、昭和23年のカサリン台風の洪水の所産による砂層と推測される。水害による砂の堆積で第Ⅰ面が被覆されたと解釈される。第Ⅰ検出面におけるコンクリート面の標高は約21.6mである。第Ⅰ面の広がりが認識できたのはW iラインよりも東側である。そして、国道に接するドライブイン部分は第Ⅰ面よりも低いレベルまで掘り下げられた後に盛土がなされており、第Ⅰ面に相当する面は失われていた。

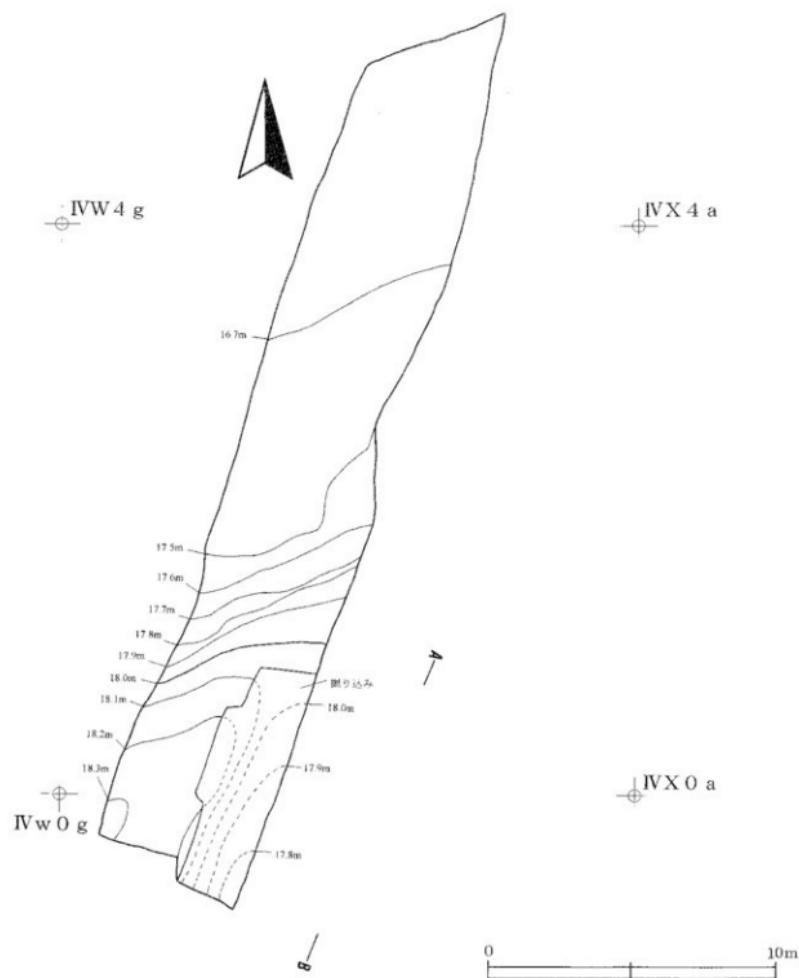
第Ⅰ面を除去したところ、やや硬化した面が検出された。これを「第Ⅱ面」としている。この面には北から、1号石組み遺構、レンガ列、1号・2号排溝場、1号・2号鍛冶炉、1号溝、2号石組み遺構が検出された。第Ⅰ面で、すでに頂部が現れていた方形のレンガ組も第Ⅱ面に伴う遺構と解釈される。試掘トレンチにより検出レベルが低い（20.95m）1号土坑も本来第Ⅱ面に伴う遺構と推測される。第Ⅱ面の広がりが認識できたのは、第Ⅰ面と同様W iラインよりも東側である。また国道に接する部分は第Ⅰ面と同様に掘り下げられており、第Ⅱ面相当部分は破壊されている。検出レベルは1号石組みの頂部が21.3m、レンガ列の頂部が21.55m、1号鍛冶炉の上面が21.25mである。Ⅱ面を被覆し、Ⅰ面を形成する土の生成原因は明確に断定できないが、人為的な盛土造成と推測される。第Ⅱ面の使用年代は出土遺物から19世紀後半～20世紀前半と推測される。

Ⅱ面以下の層を探るため、調査区中央に土層観察のための重機による深堀をおこなった。この地点は第Ⅰ面、第Ⅱ面が認識できない部分である。掘り下げ作業中、トレンチの南西隅で径約5m、深さ約1mのゴミ穴が検出された。出土遺物と検出レベルから19世紀後半～20世紀前半の所産と推測され、第Ⅱ面に伴うべき遺構と推測される。このゴミ穴については年代の新しさと、トレンチ掘り下げの工程の作業推進を考え、遺構として扱わなかった。よって平面プラン、断面観察等の作業をおこなっていない。しかし出土遺物は可能な限りその採集に努めた。今回掲載の近代の出土遺物の大半はこのゴミ穴出土のもので、その出土状況、層位を把握していない状況である。

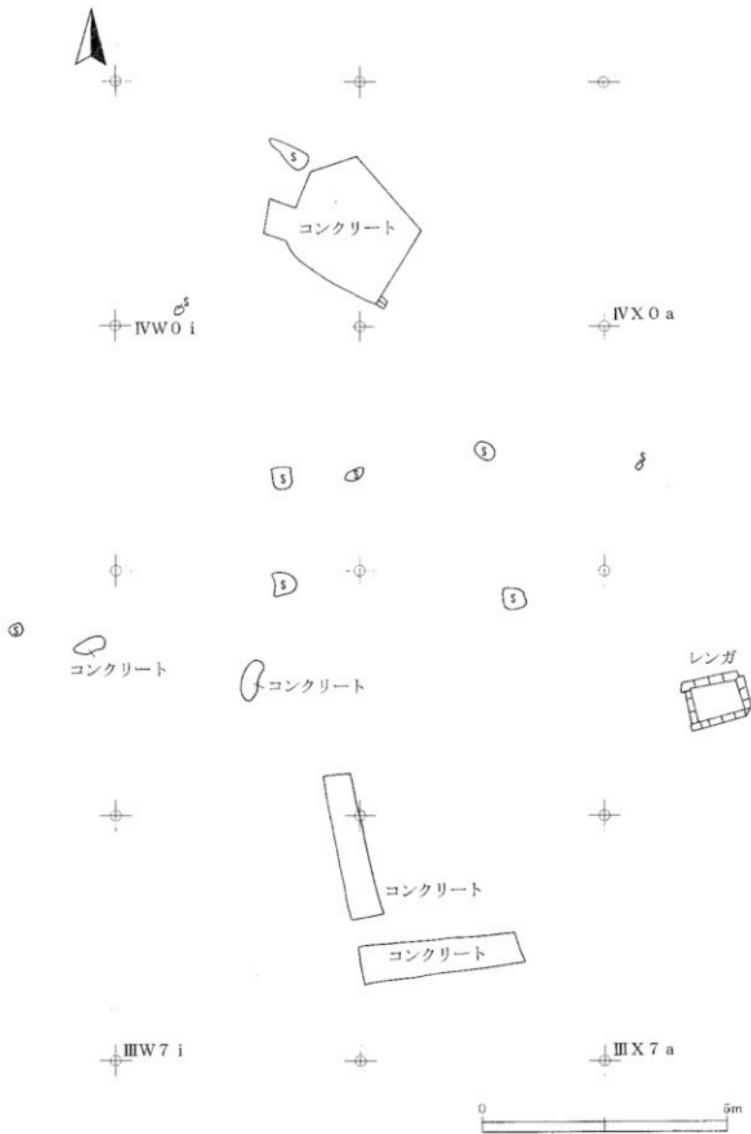
トレンチは地表から約5mの深さ（標高16.9m）まで掘り込んだ。層位は16層に分けられる。この中でⅢ層中からは近世の磁器片が出土し、ⅩⅢ層からは12世紀後半の手づくねかわらけ片が出土した。これはⅢ層が近世以降、ⅩⅢ層が12世紀後半以降の堆積であることを示している。ⅩⅢ層は砂質土からなる層で洪水堆積層と判断される。かわらけ片は土砂とともに上流部から運ばれてきたものと推測される。このⅩⅢ層のレベルは地表から約4m下で、その上面の標高は約18.4mである。12世紀後半の遺物を含むこの洪水層の堆積年代は12世紀後半以降であり、12世紀の地表面のレベルはこの層よりも低いことになる。この事象は、12世紀から現在までこの地点の上砂堆積が非常に著しいものであったことを物語っている。

そして、ⅩⅢ層を取り除いた面（ⅩⅢ層上面）で遺構検出を試みたが、この面では遺構は検出されなかつた。またさらにⅩⅥ層まで掘り下げたが湧水が著しく、これ以下の掘り下げは断念した。掘り下げた最下層のレベルは標高16.9mで、これは現在の衣川の水面よりも低い。

1 検出遺構の概要

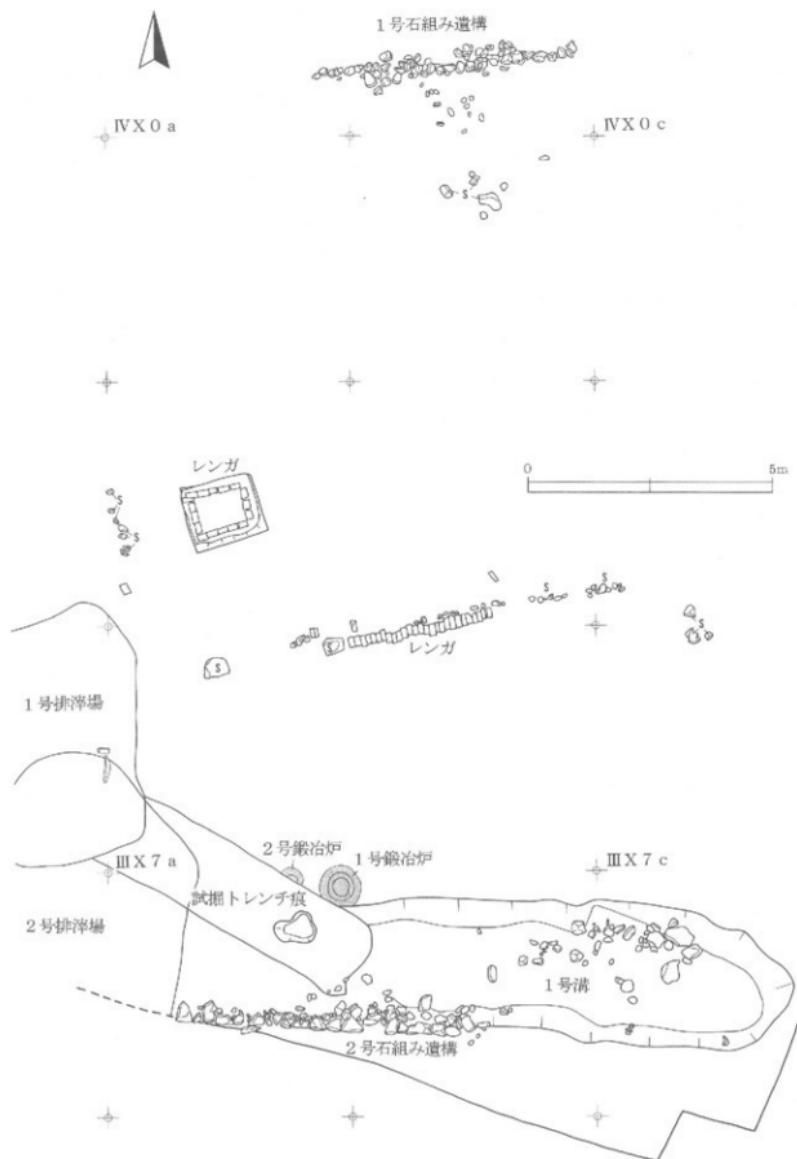


第6図 トレンチ深掘平面図



第7図 第I面造構配置図

1 檜山遺構の概要



第8図 第II面遺構配図

2 検出遺構

1号排滓場（第9図、写真図版3）

〔位置〕 IIIW7j・8j、IIIX7a・8aに位置する。

〔検出面〕 第Ⅱ面。

〔重複〕 2号排滓場と重複するが、本造構が新しい。

〔形態〕 東西約379cm、南北約516cmの不整形のプランである。鉄滓を廃棄したことによって形成されたマウンド状の盛り上がりである。盛り上がりの高さは約30cmである。

〔堆積土〕 堆積土は6層に分けられる。この中で、鉄滓で構成される層は4層である。鍛冶滓の他に鍛造剥片、羽口片、炭化物が多く混入している。人為的に鉄滓を廃棄することによって生じた層である。

〔出土遺物〕 鍛冶滓が137kg出土している。この他に羽口片が10.2kg出土している。図示した羽口片は214～218の5点である。また肥前産陶器皿（8）、寛永通寶銅一文銭（202、203）、明治10年の半銭銅貨（209）が出土している。

〔性格〕 鍛冶によって生じた鉄滓を捨てた排滓場である。

〔年代〕 明治10年（1877年）製造の半銭銅貨が出土しており、1877年以降に形成された排滓場である可能性が高い。

2号排滓場（第9図、写真図版4）

〔位置〕 IIIW6j・7j、IIIX6a・7aに位置する。

〔検出面〕 第Ⅱ面。

〔重複〕 1号排滓場と重複するが、本造構が古い。

〔形態〕 東西約400cm、南北約433cmの不整形のプランである。調査区外の南側にもプランは続いている。鉄滓を廃棄したことによって形成されたマウンド状の盛り上がりである。盛り上がりの高さは約30cmである。

〔堆積土〕 堆積土は9層に分けられる。この中で、鉄滓で構成される層は5層と7層である。鍛冶滓の他に鍛造剥片、羽口片、炭化物が多く混入している。人為的に鉄滓を廃棄することによって生じた層である。この5層と7層の間に鉄滓を含まない6層が帶状に入っている。これは廃棄に中断があるのでなく、鉄滓が盛り上がり過ぎるために、人為的に均した際に生じた層と考えられる。

〔出土遺物〕 鍛冶滓が323kg出土している。この他に羽口片が25.9kg出土している。図示した羽口片は219～230の12点である。また高温で被熱した陶器皿（87、89）、香炉（90～92）が出土している。また鉄製品のなた（157）、銅製品の灰ならし（160）、洪武通寶（186）、寛永通寶銅一文銭（199、204）、寛永通寶銅一文銭（207）、寛永通寶銅四文銭（208）、明治時代の一銭銅貨（210）が出土している。

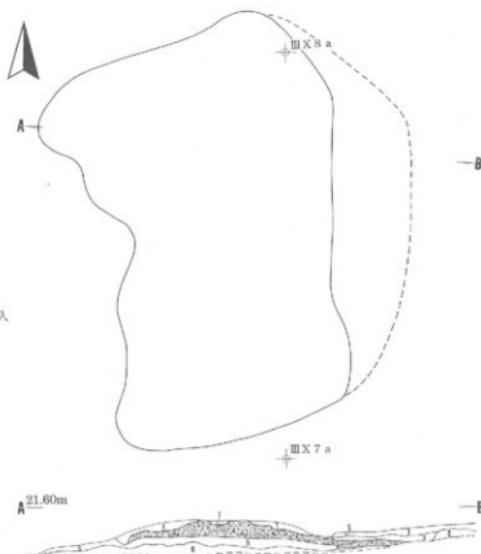
〔性格〕 鍛冶によって生じた鉄滓を捨てた排滓場である。

〔年代〕 明治時代製造の一銭銅貨が出土しており、明治時代以降に形成された排滓場である可能性が高い。

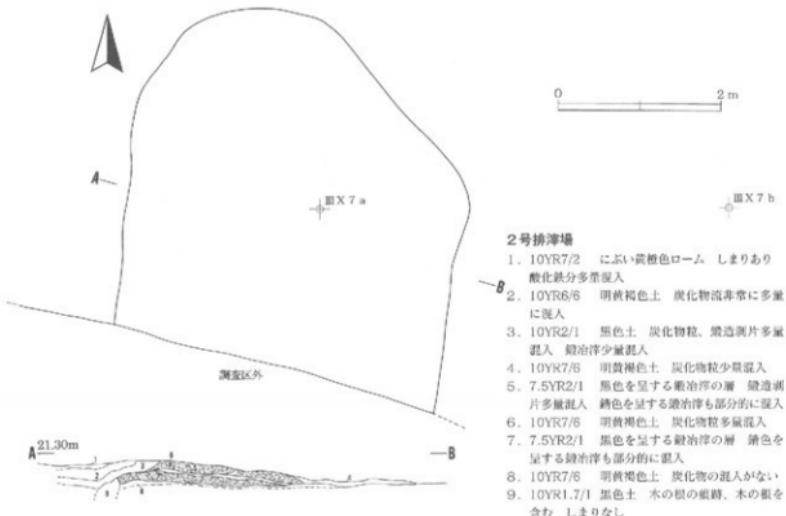
1号排滓場

1号排滓場

1. 7.5YR 橙色土 炭化物粒、炭化部分多量混入
近代之面の點上
2. 10YR4/4 褐色土 炭化物粒の混入少い
3. 10YR4/4 褐色土 炭化物粒非常に多量に混入
4. 10YR1.7/1 黒色を呈する鍛冶滓層 鍛冶滓片
炭化物粒、羽口片を多量に含む
5. 10YR4/4 褐色土 理を多量に混入
6. 10YR5/2 灰黄褐色土 炭化物粒多量に混入
2号排滓場の上にのる上か



2号排滓場



第9図 1・2号排滓場

1号溝 (第10図、写真図版5)

〔位置〕 III X 6 b・6 c に位置する。

〔検出面〕 第II面。

〔重複〕 1号鍛冶炉、2号鍛冶炉、2号石組み遺構と接するが同時存在と推測される。

〔形態〕 幅約290cm、長さ約993cm、深さ約24cmの溝である。南岸に2号石組みが並ぶが本溝と同時存在と推測される。

〔堆積上〕 堆積土は1層に分けられる。埋土と底面、壁面の土との区別がつき難く、掘り過ぎてしまった。自然堆積、人為堆積の判断は難しい。

〔出土遺物〕 溝の東側埋土に礫が多量に含まれているが、2号石組みの東側を構成する石が崩れたものと推測される。

〔性格〕 屋敷、作業場を区画する溝と推測されるが、明確な根拠はない。

〔年代〕 本溝と同時存在と推測される2号石組みにビール瓶(146)が含まれており、本溝も明治時代以降に造られたものと推測される。

1号石組み遺構 (第11図、写真図版6)

〔位置〕 IV X 0 a・0 b に位置する。

〔検出面〕 第II面。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 第II面の上に、幅約25cmの礫を、長さ約560cmにわたって並べたものである。

〔出土遺物〕 直接の出土遺物ではないが、数十cm離れた同一レベルから陶器植木鉢(108)が正位の状態で出土している。

〔性格〕 屋敷を区画する仕切りと推測されるが、明確な根拠はない。

〔年代〕 第II面の他の遺構の年代観から明治時代以降の年代が想定される。

2号石組み遺構 (第10図、写真図版6)

〔位置〕 III X 6 a・6 b に位置する。

〔検出面〕 第II面。

〔重複〕 1号溝の南縁に沿って構築されており、1号溝と同時存在と推測される。

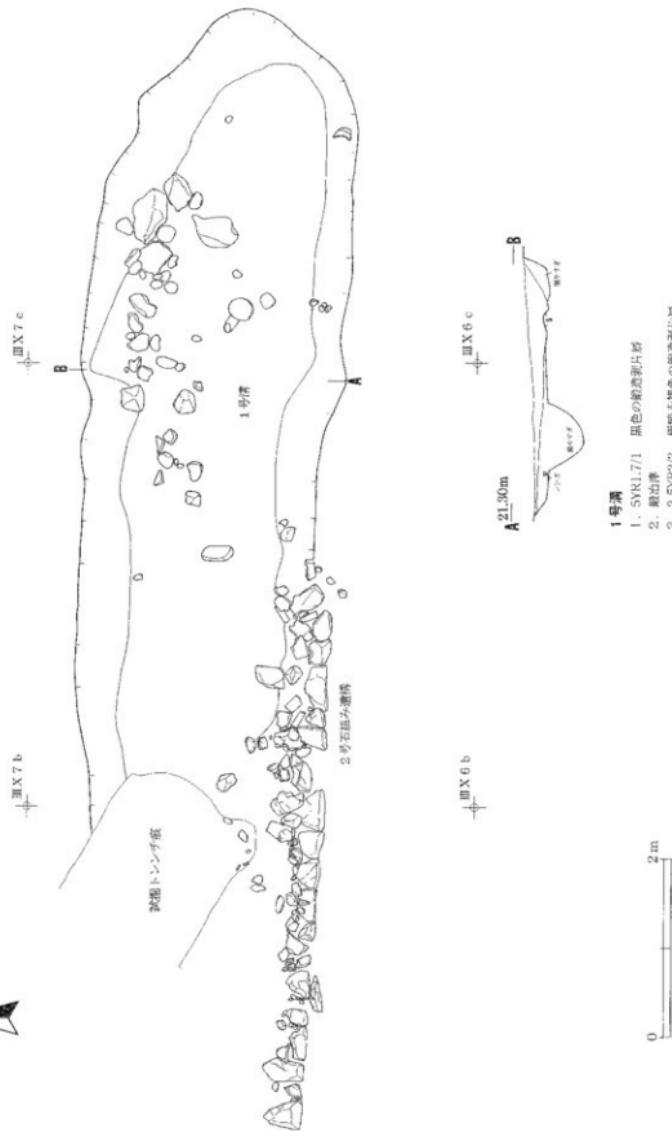
〔形態〕 1号溝の南縁に幅約30~40cmの礫を、長さ約590cmにわたって並べたものである。1号溝の東側には石組みが連続しないが、溝の東側埋土中に礫が多数含まれ、石組みが東側に連続していたことを示唆している。

〔出土遺物〕 石組み中にビール瓶(146)が含まれている。

〔性格〕 1号溝と共に、屋敷を区画する仕切りと推測されるが、明確な根拠はない。

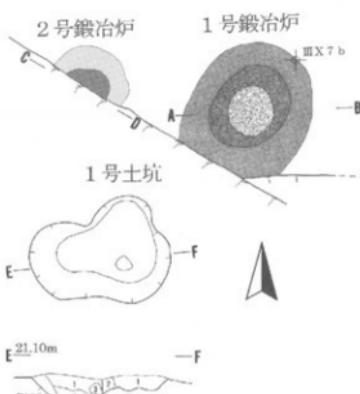
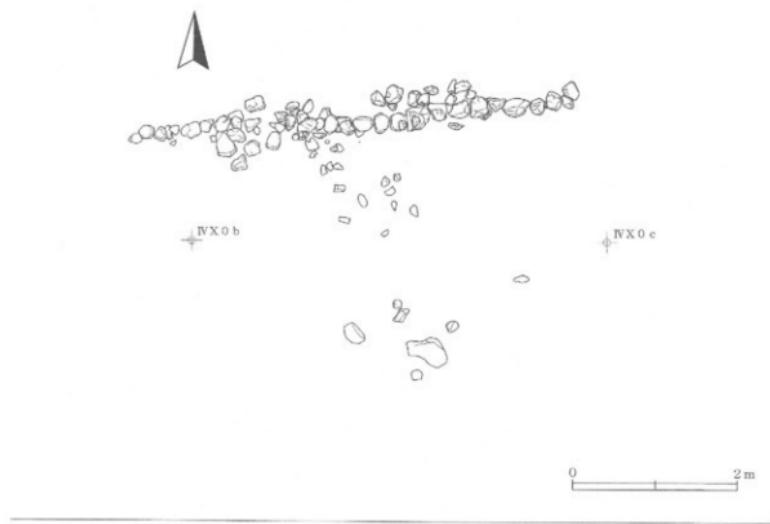
〔年代〕 石組み中に含まれるビール瓶の年代観から、明治時代以降の構築が想定される。

1号溝・2号石組み遺構



第10図 1号溝・2号石組み遺構

1号石組み遺構



- 1号土坑
 1. 5YR1.7/1 黒色の鍛造剝片層
 2. 鍛治滓
 3. 2.5YR2/2 壱略赤褐色の鍛造剝片層

- 1号鍛冶炉**
 1. 5YR6/3 にぶい褐色土上 鍛治滓、鍛造剝片を含む
 2. 2.5YR5/4 にぶい赤褐色土上 鍛治滓、鍛造剝片を多量に混入
 3. 2.5YR4/8 赤褐色焼土 地山が熱変化したもの
 4. 2.5YR1.7/1 赤黒色の鍛造剝片が堆積した層
 5. 10YR3/3 緬褐色土 炭化物粒少量混入 热変化が及んでいない層

- 2号鍛冶炉**
 1. 2.5YR5/4 にぶい赤褐色焼土 炭化物粒少量混入 热変化少量混入 上面に鍛造剝片が混入
 2. 2.5YR6/6 紺色焼土 地山が熱変化したもの
 3. 10YR3/3 緿褐色土 炭化物粒少量混入 热変化が及んでいない層

0 1 m

第11図 1号石組み遺構、1・2号鍛冶炉、1号土坑

レンガ列 (第8図、写真図版6)

〔位置〕 III X 7 a・7 bに位置する。

〔検出面〕 第II面。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 レンガを連続して約3mに渡って並べたものである。レンガは1枚で積み重ねられていない。

レンガ列の延長上に疊の並びもみられ、関係が考えられる。

〔出土遺物〕 レンガ以外には特ない。

〔性格〕 屋敷を区画する仕切りと推測されるが、明確な根拠はない。

〔年代〕 レンガの年代観から、明治時代以降の構築が想定される。

1号鍛冶炉 (第11図、写真図版5)

〔位置〕 III X 6 a、6 b、7 a、7 bに位置する。

〔検出面〕 第II面。

〔重複〕 1号溝と接するが、同時存在と推測される。

〔形態〕 短径約72cm、長径約78cmの熱変化した火焼面である。熱変化は深さ約18cmに及ぶ。同心円状に熱変化しており、中心部はにぶい橙色焼上で、還元した部分、そのまわりはにぶい赤褐色焼上、外側は赤褐色焼土である。中心部ほど高い被熱を受けていることが読み取れる。

〔堆積土〕 热変化した範囲の断面は4層に分けられる。

〔出土遺物〕 周辺に鍛造剥片を多量に含んでいる。

〔性格〕 鍛冶をおこなった鍛冶炉である。

〔年代〕 第II検出面の他の遺構の年代観から、明治時代以降のものと推測できる。

2号鍛冶炉 (第11図、写真図版5)

〔位置〕 III X 6 a、7 aに位置する。

〔検出面〕 第II面。

〔重複〕 1号溝と近接するが、同時存在と推測される。また南側が壊されているが、試掘トレンチによるものである。

〔形態〕 径約45cmの熱変化した火焼面である。熱変化は深さ約12cmに及ぶ。同心円状に熱変化しており、中心部はにぶい赤褐色焼上、外側は赤褐色焼土である。

〔堆積土〕 热変化した範囲の断面は2層に分けられる。

〔出土遺物〕 周辺に鍛造剥片を多量に含んでいる。

〔性格〕 鍛冶をおこなった鍛冶炉である。

〔年代〕 第II検出面の他の遺構の年代観から、明治時代以降のものと推測できる。1号鍛冶炉とは近接するが直接重複せず、前後関係があるのか、同時存在なのかは判断できない。

1号土坑（第11図、写真図版5）

〔位置〕 III X 6 a に位置する。

〔検出面〕 試掘トレンチ内にあり、検出したレベルは第II面より下であるが、本来は第II面に属する土坑と推測される。

〔重複〕 1号溝と接するが、試掘トレンチにより、その前後を判断できない。

〔形態〕 長径84cmの不整な形状を呈する。最深部の深さは18cmである。

〔堆積土〕 埋土は3層に分けられる。埋土のはほとんどは鍛冶滓と鍛造剥片で構成される。

〔出土遺物〕 鍛造剥片が多量に出上した。

〔性格〕 鍛造剥片が充満し、鍛冶炉の傍らにあることから、鍛冶に関連する何らかの施設と推測される。

〔年代〕 第II検出面の他の遺構と近接する鍛冶炉の年代観から、明治時代以降のものと推測できる。

ゴミ穴（第5図）

〔位置〕 III W 9 f、9 g、IV W 0 f、0 g 付近に位置する。

〔検出面〕 土壌断面観察のトレンチを重機で掘削中に検出した。掘り込み面を明瞭に把握できなかつたが、第II面に相当すると推測される。

〔重複〕 なし。

〔形態〕 本ゴミ穴については、年代の新しさと、トレンチ掘り下げの工程の作業推進を考え、調査時は遺構として扱っていなかった。よって平面プラン、断面の観察、実測の作業をおこなっていない。規模は概ね径約5m、深さ約1mと記憶する。

〔堆積土〕 埋土については断面作っての観察はおこなっていない。泥状の臭気の強い土で、多数の陶磁器片を含む埋土であった。

〔出土遺物〕 多数の陶磁器、ガラス製品を包含している。図示したものでは磁器碗(18、20~41)、磁器子供茶碗(42~44)、磁器碗蓋(45)、磁器杯(46~55)、磁器湯呑(56~62)、磁器皿(63、65、67~77)、磁器鉢(78~80)、磁器花生(81)、磁器德利(82、83)、磁器仏飯器(86)、陶器灯明皿(93)、陶器急須(94)、陶器土瓶(95)、磁器汽車茶瓶(96~98)、陶器蓋(99)、陶器鉢(102)、陶器湯たんぽ(103)、陶器植木鉢(105~107)、ガラス製クリーム瓶(111~114、116~118)、ガラス製のり?瓶(119)、ガラス製インク瓶(120、121)、ガラス製薬瓶(122~130)、ガラス製椿油瓶(131)、ガラス製不明瓶(132~135)、ガラス製味の素瓶(136)、ガラス製わかもと瓶(137)、ガラス製汽車茶瓶(138)、ガラス製菓子?瓶(139)、ガラス製牛乳瓶(140)、ガラス製不明瓶(141、142)、ガラス製サイダー瓶(144)、ガラス製ウイスキー瓶(145)、ガラス製ビール瓶(147、148)、ガラス製清酒一合瓶(149)、ガラス製二合瓶(150)、ガラス製一升瓶(151)、機械栓(152、153)、コップ(154~156)、鎌(159)、銅製品くつわ?(161)、煙管(162、164~166)、ほうろう葉缶(167)、アルミ製蓋(168、169)、砥石(170)、歯ブラシ(178、179)、桶(180、181)、自転車のライト(182)、磁器人形(183)、土製猪形(184)、磁器犬形(185)がある。また図示していないものでは、地下足袋のゴム製の底、襠子、窓ガラス片、自然木などが出土している。

〔性格〕 多数の遺物を包含しており、ゴミを廃棄した廃棄坑と判断できる。

〔年代〕 出土遺物から近代以降の形成と判断できる。出土した磁器碗蓋(45)には統制陶器のマークが入っており、昭和16~20年の製造品と判断できる。これはゴミ穴が機能していた年代の一端を示す。

V 出土遺物

1 かわらけ (第12図、写真図版8)

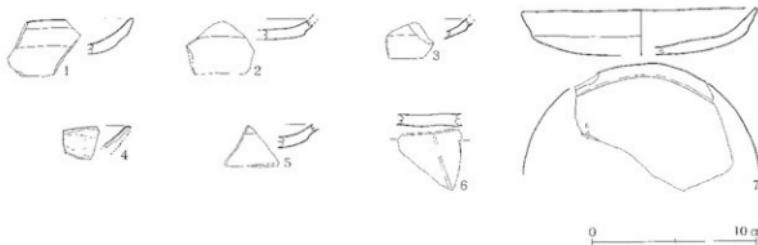
今回の調査では、12世紀の手づくねかわらけが7片、総重量88.8gが出土した。出土した全点を図示している。細片もあるため、確定は難しいが、いずれも大型手づくねかわらけと判断している。

観察表中の「遺存度」は完形かわらけ（手づくね大）の重量を180gと仮定し、出土品の重量比較から百分率で示した。「色調」は器表面の面積の大きい色調を、土色顔を用いて観察した。

1~6は深堀トレチのXII層中から出土した。XII層は洪水堆積層と推測される砂層で、出土したかわらけ片も上流部から洪水砂とともに運ばれてきたと推測される。本遺跡の西方約600mには、12世紀のかわらけを多量に包含する接待館遺跡が所在し、この方面から運ばれてきたかわらけと思われる。1の口縁部は2段なで、口唇部両取りなしである。3~6は口縁部が欠損し、なでの形態は不明である。2は器表面の磨耗が著しい。6は底面の破片で外底面にすのこ痕がある。

7はII面検出時に出土した手づくね大型かわらけである。今回出土のかわらけの中では最も遺存度が高い。口縁部は1段なで面取りなしで、底面にはすのこ痕がある。この個体は全体が消耗し、酸化鉄分が付着している。また、出土したII面という層位から考えて、埋没した原位置を離れ、二次的に出土地点に移動した遺物と推測される。

これらの手づくねかわらけは細片も多く、詳細な年代を詰ることはできない。大きく12世紀後半のものと示しておく。



番号	出土位置	種類	法規 (cm)			II縁のナテ	外底 すのこ痕 (%)	遺存度 (%)	色調	その他	重さ (g)
			口径	高さ	底径						
1	トレチ深堀窓	手づくね大	—	(2.1)	—	2段ナテ面取なし	欠損	0.06	黄褐色		10.9
2	#	#	—	(1.2)	—	不明	摩耗	0.05	#	摩耗している	9.5
3	#	#	—	(1.1)	—	不明	欠損	0.02	#		3.2
4	#	#	—	(1.1)	—	#	欠損	0.01	#		1.4
5	#	#	—	(1.2)	—	#	不明	0.02	#		4.0
6	#	#	—	(0.9)	—	すのこ痕	すのこ痕	0.06	#	摩耗している	10.7
7	II面検出時	#	14.1	3.0	—	1段ナテ面取なし	すのこ痕	26	褐色	摩耗している 酸化鉄分付着	49.1

第12図 12世紀のかわらけ

2 近世陶磁器 (第13・14図、写真図版8・9)

近世の陶磁器は8点を図示した。観察表中の「胎土」は破断面の色調を観察している。「製作年代」は産地で製作年代を念頭に入れたものである。

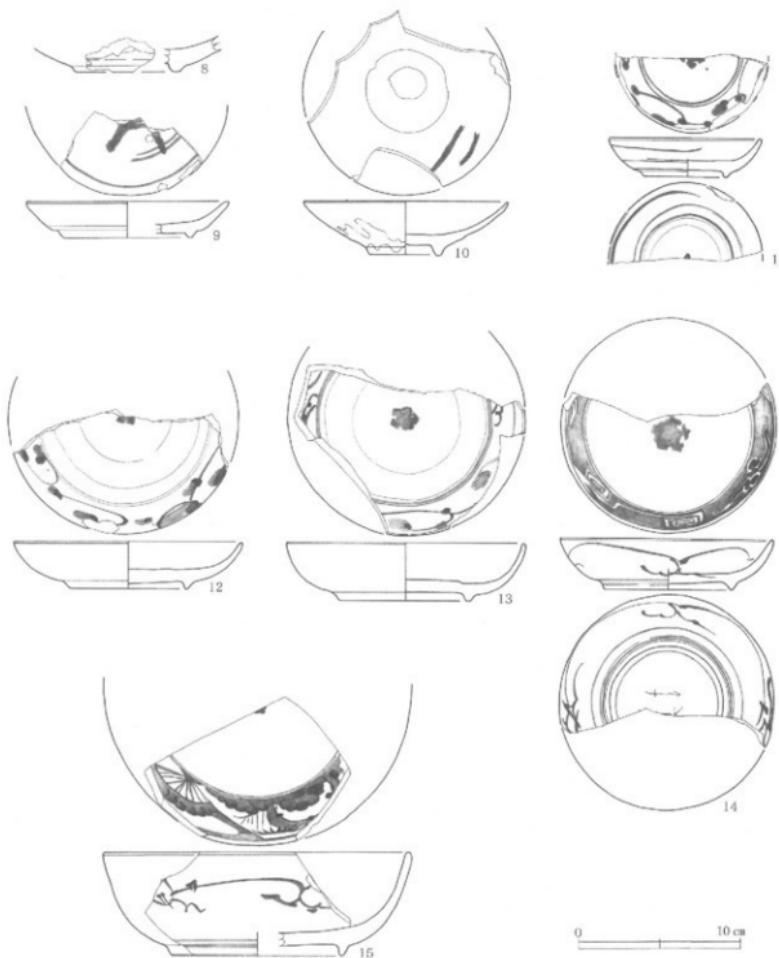
陶器

8は肥前(唐津)産の陶器皿である。胎土は唐津特有の赤褐色で、灰色の失透性の釉がかけられる。外面の体部下部と高台部は露胎である。見込みに目痕はみられない。時期は16世紀末～17世紀初頭で、本遺跡出土陶磁器の中では最も古い。9は美濃産の鉄絵志野皿である。見込みに鉄絵が描かれて、その上に長石釉がかけられる。また見込みと外底面に目痕がある。胎土は黄褐色である。調査区内での表探品で所属層位等は不明である。17世紀初頭の皿である。

磁器

10～15は深堀トレンチの重機掘削時に出土した肥前産磁器皿である。重機の掘削時に出土したため詳しい出土層位を把握できなかったが、概ね同じグリッドからの出土である。10は肥前産の蛇の目釉剥ぎ皿である。見込みの蛇の目周辺には砂が付着する。高台部は露胎である。染付の呉須の色は空色を呈する。11は小型の皿である。器内面には唐草文の染付と、見込には五弁花、高台内には銘が施される。また高台内側面には砂が付着する。12は見込み蛇の目釉剥ぎの皿である。内面には唐草文、見込にはコンニャク印判の五弁花が施される。高台内には銘が無い。13も見込み蛇の目釉剥ぎの皿である。12と同様に唐草文とコンニャク印判の五弁花が施される。呉須の色は青灰色を呈する。14の皿は口縁部内面に墨剥きによる染付、見込みにコンニャク印判の五弁花が施されている。五弁花は形が崩れ滲んでいる。また高台内には銘がある。非常に崩れているが「大明年製」と思われる。呉須の色は暗青灰色を呈する。15は身の深い染付皿である。見込には五弁花が施されていると思われる。高台内には染付の圖線が施されている。器表面の透明釉には買入が入る。また高台には砂粒が付着している。10～15は出土位置が近接し、年代はいずれも1690～1780年代で、同一時期のものといえる。そして、いずれも器種が皿という点も共通する。よってこれらは括性の高い遺物と推測できる。

16は瀬戸産の磁器染付丸碗である。呉須の色は青色で、外面に笠文、内面口縁に横位の木賊文、見込みに圖線と「成化年製」の銘が施される。時期は19世紀前半である。2個体分が出土している。17は瀬戸産の磁器染付端反碗である。外面には丸文、口縁内面には輪の広い圖線、見込みには花?文が施されている。呉須の色は青色で染付が盛り上がっており。時期は1850年代のものと推測される。この個体は焼継がなされており、高台内にはえんじ色で2文字が書かれている。欠損部分があり、明確ではないが「苔原」と読み取れる。昭和20年代まで調査区内には鍛冶屋を営む「苔原」姓の家があった。焼継品に名字が記されているのであれば、焼継は明治以降におこなわれたと判断できる。



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
8	斎藤皿	1号拂押場	—	(2.0)	6.2	赤褐色	灰色の釉	16C末～17C初	肥前(唐津)皿
9	斎藤皿	表塀	12.2	2.2	7.6	黄褐色	長石釉、鉄絵	17C初	祇園 志野皿 美濃窯
10	磁器皿	W N 4h付近 深鉢中	12.3	3.3	4.3	灰白色	染付、絞り空色	1690～1780	肥前窯 見込蛇目釉剥ぎ
11	磁器皿	W N 4h付近 深鉢中	9.3	2.3	5.1	白色	染付、真須青色	1690～1780	肥前窯
12	磁器皿	W N 4h付近 深鉢中	13.8	2.8	6.9	白色	染付、真須青色	1690～1780	肥前窯 見込蛇目釉剥ぎ
13	磁器皿	W N 4h付近 深鉢中	14.5	3.3	7.9	白色	染付、真須青色	1690～1780	肥前窯 見込蛇目釉剥ぎ
14	磁器皿	W N 4h付近 深鉢中	12.6	3.0	7.8	白色	染付、真須青色	1690～1780	肥前窯 塗はじき
15	磁器皿	W N 4h付近 深鉢中	18.9	2.1	13.2	白色	染付、真須青色	1690～1780	肥前窯 見込 五ッ花

第13図 近世陶磁器

3 近代陶磁器 (第13~23図、写真図版9~17)

近代の陶磁器は94点を図示した。観察表中の「胎土」は破断面の色調、質感を観察している。磁器で「ガラス質」と記しているのは、質感を表した言葉である。また、近代の陶磁器はその産地を同定できないものが多く、項目に「産地」は設定していない。また、近代の陶磁器は同じ絵柄、形態のものが複数個体以上存在する場合が多いが、その場合は図示するのは1個体のみとし、「その他」の欄に出土した個体数を記してある。

飯茶碗

18~41は磁器の「飯碗」である。18、19は東北地方産と推測される染付の端反碗である。呉須の色は工業精製された群青色を呈する。窯は特定できないか山形県平清水窯産の可能性がある。胎土はガラスのような質感で白色である。いずれも19世紀後半と推測される。20、21は型紙摺りの染付端反碗である。20は白色で黒い紋が混じり、ガラスのような光沢がない胎土である。22、23は型紙摺りの染付丸碗である。どちらも白色でガラス質の胎土である。24は銅版転写の染付丸碗である。同一のものが6個体出土している。25は六歌仙の絵柄の銅版転写の染付碗である。内外面に文様があり、ある程度の高級品と思われる。内面には「小野小町」、「在原業平」、「喜撰法師」の絵が配され、それぞれの和歌が提灯内に記される。記された和歌には省略、当て字もみられ、読み取れないほど変形した文字もある。小野小町の歌は「色見えて うつろふものは 世の中の 人の心の 花にぞありける (古今和歌集797)」、在原業平の歌は「おほかたの 月をもめでし 是ぞこの 積もれば人の 老いとなる物 (古今集879)」、喜撰法師の歌は「我が庵は 郡のたつみ しかぞ住む 世をうじ山と 人はいふなり (古今集983)」である。外面には「大伴黒主」、「遍昭」、「文屋康秀」の絵が記され、それぞれの和歌が提灯内に記される。しかし、人物の絵と、それに添えられた和歌が書かれる提灯は、ずれがみられ、黒主の絵には康秀の歌が、遍昭の絵には黒主の歌が、康秀の絵には遍昭の歌が添えられている。文屋康秀の歌は「吹くからに 秋の草木の しほるれば むべ山風を あらしといふらん (古今集249)」、遍昭の歌は「はちす草葉の 潤りにしまぬ 心もて なにかは露を 玉とあざむく (古今集165)」、大伴黒主の歌は「鏡山 いざ立ちよりて 見てゆかむ 年へぬる身を おいやしぬると (古今集899)」である。

26は花の文様の銅版転写染付碗である。2個体出土している。27は鶴文の銅版転写染付碗である。これも2個体出土している。28は山水文の銅版転写染端反碗である。口縁部内面には雷文が施されている。高台が高い器形である。2個体出土している。29は花の文様をプリント?した磁器碗である。花は桃色、花の周囲は黄土色、他は紺色で施されている。高台内面は無釉で凹蛇の目高台になっている。30は富士山をプリント?した磁器碗である。プリントの色は紺色1色である。31は木の葉の模様のプリントが施された磁器碗である。6個体が出土している。32は菱、植物文のプリントが施された磁器碗である。プリント方法は型紙摺りと推測されるがはっきりしない。33はゴム印判によるプリントと推測される磁器碗である。文様は五分割でプリントされている。2個体の出土である。34もゴム印判かと推測されるがはっきりしない。35、36は銅版転写の磁器碗である。プリントには青色と緑色(クロム)が使用されている。37はあやめ文の染付磁器碗である。文様はあやめの花と水を表現する渦巻きが吹き付けで青色に、あやめの葉が手描きで施されている。2個体の出土である。28は魚介類の文様の、銅版転写の磁器碗である。色は青一色である。39、40、41は手描き?による染付の磁器碗である。40と41はそれぞれ2個体ずつ出土している。

それぞれの飯碗の製造年代は、器形、プリント技法から18、19が概ね19世紀後半、20~28が20

世紀初頭頃から1920年代頃、29~41が1920年代から1940年代頃までと想定される。

子供茶碗

42~44はいわゆる「子供茶碗」である。42はゴム印判で「旭日旗」、「提灯」が交互にそれぞれ3個ずつプリントされている。旭日旗の朝日は赤色、旗の房は青色で施されている。提灯の輪郭は茶色、提灯のひだは緑色で表し、提灯の中央には茶色で「奉祝」の文字、その両脇に日の丸と思われる赤い丸が表現される。また文様帶を区画する圓線と高台付根の圓線は赤色でプリントされている。43は五輪マークと徒競走をする子供が2つずつ交互にゴム印判でプリントされている。五輪マークは赤色で、輪内に「大日本」の文字が配される。競争する子供は輪郭を茶色で表し、ユニホームはそれぞれ赤、青に塗られている。高台境の圓線は赤色である。44はゴム印判で旭日旗、通学する子供、「オテツナイデ」の文字が2つずつ配される。旭日旗は赤色、子供の輪郭とかばんは銀色、男の子の服は青色、女の子の服は赤色、「オテツナイデ」の文字は青色でプリントされている。高台境の圓線は赤色である。42~44の子供茶碗は器形が類似し、絵柄はそれぞれ異なるが、使用している色合い、絵柄の雰囲気は類似し、近似する年代の製品と推測される。43に描かれた五輪マークは1936年（昭和11年）のベルリンオリンピックから、昭和15年開催予定の東京オリンピック誘致決定の年の製品と推測される。東京オリンピックは1938年（昭和13年）7月に開催を返上しているので、それ以後には下らない製品と推測される。概ね1930年代後半の年代が想定できる。42、44も同じ頃の年代が想定できる。

碗蓋

45は染付磁器碗蓋である。花菱等を銅版転写で施し、その上から手書きで文様を描いている。高台内面には内制胸器の記号が染付で施され、陶磁器の生産統制がおこなわれた1941~1945年の製造と判断できる。内面見込みには線描きの簡略化された松竹梅文が施される。

盃

46~48は軍隊の除隊記念の磁器盃である。46は金色で旭日旗、桜花が描かれ、「歩兵□□□聯隊 □隊紀念」の文字が書かれる。欠損のため連隊号が不明であるが、3文字分の入る空間が欠損しており、軍管区から推測して、弘前歩兵第三十一連隊の「三十一」が記されていた可能性がある。「□隊紀念」は「除隊紀念」と読み取れる。47は交差した旭日旗と日章旗が描かれている。全体の輪郭を赤で描き、旗の日輪と旭日を赤く塗り潰している。日章旗の白地部分には青色が淡く塗られている。文字が書かれているであろう口縁部が欠損しており、部隊号や趣意は不明である。48は交差した旭日旗と日章旗が描かれ、その中央に金鷲勲章が描かれている。旗と勲章の輪郭は赤で描かれ、旗の日輪と旭日は赤で塗り潰される。日章旗の白地部分は青で縁取られ、金鷲勲章は金と緑と青で彩色されている。金鷲勲章の上には金色で2文字が確認できるが、欠損部分が大きく読み取りが困難である。残った部分からは「征露 訓旋」の「露」と「旋」の下端部が残っていると推定される。46~48の除隊記念盃はその形状から20世紀初頭から1930年代頃のものである可能性が高い。また48は日露戦争（1904~1905年）時の可能性がある。

49は天狗の面が赤と茶色で上絵付けされ、その下に金色で「古峯山」、その両脇に赤で「下集闇」、「長命」の文字が書かれる。下野国（栃木県鹿沼市）の古峰神社参拝の土産品と推測される。高台側面には波状の染付が施されている。50は中央に空色で「崇徳 履物商」と書かれ、その両脇に赤色で「山ノ日」「かち町 阿部房次郎」と書かれている。「山ノ日」は現一関市山目町と推測される。履物店の宣伝、サービス品と思われる。51は中央に金色で「金華山」と書かれる。金華山神社参拝の土産品と推測される。

52は上絵付けで蝶と樹木？が描かれている。蝶は金と橙色で、樹木？は青と金と緑と橙色で描か

れている。4個体出土している。53は青色の吹き付けで桜花を描いている。花心のみは桃色で染め付けられている。5個体出土している。54は青色の吹き付けの桜花である。53と同じ図柄であるが、53よりも小振りである。7個体出土しているが花心は桃色のものと茶色のものがある。55は端反りの実の深い杯である。口縁部と底辺部に一条ずつ染付が施されている。

湯呑

56は型紙摺りの湯呑みである。香炉の文様が摺り出されている。2個体出土している。57は相馬産の陶器湯呑である。外面下半は駒肌軸、外面上半、内面は青ひび釉か施される。高台内は無釉で「相馬」の刻印がある。2個体出土している。58は磁器の湯呑である。高台部を除く全面に緑色の失透性の釉か施されている。外面には「高田町 □□雜貨店」と金色で書かれ、その背面には金、赤で文様が描かれている。絵柄は欠損部が多く判別できない。商店のサービス品と推測される。59は磁器の染付である。外面下半部、高台内部には鉄釉が施され、「腰錆」風になっている。上半部は竹文が染め付けられている。2個体出土している。60は梅に鷺文様の銅版転写の湯呑である。梅の木と鷺は青色、梅の花は桃色で転写されている。3個体（61も含んで）の出土である。61は60と同じ図柄のものである。法量もほとんど同じである。62は植物文の染付湯呑である。見込みに龜甲に「亀壽」と染め付けられている。

磁器皿

63、64は型紙摺りの小型皿である。63は中央に山水家文が描かれ、放射状に文字が配される。文字は形が崩れ、染付が渋み判読が難しい。「詩巻斗吟百平」、「浅眠侠陽三斗」などと書かれている。2個体の出土である。64の型紙は桜花のモチーフである。65、66は型紙摺りのなます皿である。どちらも型おこし皿で口縁部は輪花で、高台は凹蛇の目高台である。そして、見込みは松竹梅文である。67は型紙摺りの皿である。高台は蛇の目高台になっている。見込みには鰐文が施される。他は小紋柄で埋められる。

68、69は銅版転写の小型皿である。どちらも口唇部に「口紅」が施されている。68は花？のモチーフ、69は樓閣山水文と見込みに「壽」の文様が転写されている。70は手描きの染付皿である。流水と花が描かれる。花心にのみ黄色が施されている。71は型おこしの皿である。亀、鶴が型で表され、その部分に臙須で染付をおこなっている。3個体出土している。72は型おこし皿で篆文と漢詩が型で表され、その線刻内に染付が施される。透明釉の発色が悪く白濁した色調になっている。2個体の出土である。漢詩は贊字や読み取れない文字もあるが、題名は「炫春竹」と推測される。詩は「経臣風米 松草花不 種々亭送 是知」と記されると思われる。文意は文法、用法的に解釈できない面がある。73は草花文の銅版転写皿である。染付はクロムを使用し緑色を呈する。口唇部は「口紅」が施される。74は銅版転写の中型皿である。見込み中央に「福」、周囲に「福」、「禄」、「壽」の字が円内に配される。口縁部は「口紅」である。75は銅版転写の皿で「銘酒 好の桜」、「岩手」、「□鳥谷」、「～酒店」「吟醸」の文字と桜の花が配される。「□鳥谷」は「石鳥谷」と推測される。石鳥谷（岩手県脾貫郡、現花巻市）の酒店の宣伝、サービス品と推測される。3個体出土している。76は型おこしの皿である。口縁部は輪花になっている。内面に海老が描かれるが、海老の体は赤色の染付であるが、ひげは赤色の上絵付けで表される。海老の脇の海草？は緑色で上絵付けされている。77は型おこしの皿である。口縁部は青色の染付が施され、内面には植物、月を緑色、桃色の銅版転写で施される。高台は円形である。

磁器鉢

78は型おこしの小鉢である。見込みに山水文の染付が手描きで施されている。口唇部には「口紅」

が施される。2個体の出土である。79は口縁部に捻りが入る磁器鉢である。手描きの染付け文が青色、黄土色で施されている。80は型おこしの皿である。凹凸は少ないが口縁部は輪花になっている。見込みには手描きで山水文が染付けされ、体部には15単位の櫛描状の線が緑色で施される。口唇部は「口紅」である。2個体出土している。

その他の器種

81は磁器の花生である。型おこしで口縁部は上からみると圓丸方形を呈する。銅版転写で鶴と松が黒色で描かれる。太陽は赤色である。82、63は磁器の鋼徳利である。82は山水樓閣文の染付で山形県平清水産と推測される。83は体部上半と底辺部に染付の線が施される。84は磁器の薬味入れである。型おこしの白磁で内部は三区画に仕切りされている。外底面は無釉で菊花型になっている。85は磁器の卸皿である。白磁であるが全体に灰色がかった色調を呈する。86は磁器仏飯器である。外面は前面に紺色の輪が施される。外底面は無釉である。

陶器皿

87～89は陶器の皿である。87、89は2号排溝場からの出土で、高熱を帶びており、釉の種類も判別できないほど熱変化している。87の高台部は露胎である。88は在地産の皿で、白濁する空色がかつた釉が施されている。口唇部がわずかに外反する。

陶器香炉、灯明皿

90～92は陶器の香炉である。いずれも2号排溝場からの出土で高熱を帶びている。90は高台部と内面が無釉であるが、熱変化のため釉の種類を判別できない。91は擬似的な三足が付いている。また口縁部に飾りの突起が付く。外面は高台内も含め施釉されているが、熱変化のため釉の種類がはつきりしない。おそらくは緑色の釉と推測される。内面は無釉である。91も熱変化しているが、緑色の釉を確認できる。高台内にも施釉されている。内面は無釉である。

93は陶器灯明皿である。体部下半と高台は露胎で他は褐釉が施される。内面には芯支えが貼り付けられている。

急須、土瓶

94は陶器の急須である。黒色で格子目と「一ノ関大町 尾張屋セトモノ店 電話二番」の文字が下絵付で描かれ、透明釉が施されている。底部は露胎である。内面は口唇部が無釉で他は施釉されている。95は陶器の上瓶である。型おこしで立方体形の体部である。釉は透明性のある緑色の釉で、釉の下に「銘酒 末廣 特約店 へ大岩泰酒店」の文字が青色で書かれる。内面には透明の釉が施される。外底面は無釉で火に掛けられた痕跡がある。酒店のサービス品と推測される。

汽車茶瓶、駅弁の容器

96～98は鉄道で販売される汽車茶瓶である。いずれも磁器製品である。96は型おこしで、外面には透明釉が施される。「鉄道局指定」、「御茶」、「金五錢」「會津～」の文字がある。「會津～」から福島県会津本郷窯と判別できる。また茶瓶の形態から1921～1943年頃と推測される（窯業史博物館編1995「汽車土瓶」）。97は型おこしで「お茶」の文字が陽刻されている。釉は施されておらず外面は茶色がかった色調になる。1921～1943年頃の会津本郷窯と推測される。98は型おこしで把手が付いた器形である。内外面無釉で、外面は自然釉の噴出で茶色を呈する。「御□」、「空瓶ハオ持カヘリカ又ハ腰掛ノ下ヘ」の文字がある。1921～1943年頃の会津本郷窯と推測される。99は駅弁容器の陶器蓋である。2破片に分かれしており、青色で「□なぎ丼」、「～田駅 □牛田ホテル」が書かれ、上に透明釉が施されている。文字は「うなぎ丼」、「小牛田駅 小牛田ホテル」と解される。東北本線小牛田駅で発売された駅弁の「うなぎ丼」の容器の蓋と推測される。

化粧水瓶

100は磁器の化粧水の瓶である。白磁で口縁部はねじりが施されている。豈付は無釉で高台内は透明釉が施釉されている。完存品のため観察できないが、内面はおそらく無釉である。底面には「セ 653」と刻印されている。1941~1945年の統制陶器である。「セ」は瀬戸を表しており、瀬戸産と理解できる。

陶器鉢

101は陶器の在地産陶器の片口鉢である。高台部以外前面に褐釉が施される。見込みには五単位の目跡があるが、桔梗台の痕跡と推測される。102は陶器の鉢である。陶器に白化粧を施し透明釉が掛けられており、「陶胎白磁」と称するのが妥当であろうか。高台部は露胎である。胎上、白化粧の質感が平清水産の陶胎染付に類似しており、平清水産の可能性が考えられる。

陶器湯たんぽ

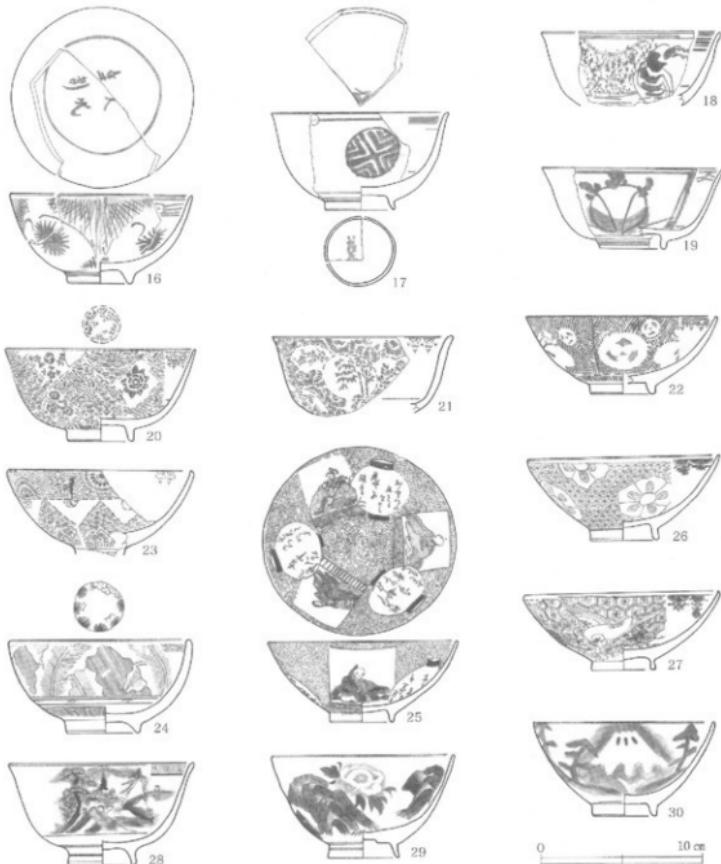
103は陶器の湯たんぽである。円筒形にロクロ引きした容器の上端の口を広げ、横にして下部を座りが良いように平らにし、上部に湯を注ぐ口を開けた形態である。外面には褐色がかかった鉄釉がロクロ引き時の底面以外に施されている。内面は茶色の鉄釉が施されている。内外面の釉薬は本米同じものであるが焼成の結果、発色が異なったと思われる。在地産の陶器と推測される。

陶器植木鉢

104は素焼きの植木鉢である。底面は回転糸切で、焼成前に穿孔をおこなっている。胎土には海綿状骨針が多量に混入する。在地産のものと思われる。105~107は陶器植木鉢である。105は外面と内面口縁部に空色の釉が施される。高台部は露胎である。底面には焼成前に穿孔が施されている。106、107は外面と内面口縁部に銅錫釉が施される。高台部は露胎で、底部には穿孔が施される。107は106と同様の銅錫釉が施されるが、106よりも大型の器形である。底部を欠損するが、高台は露胎と推測される。胎上は106、107とともに共通で同一の窯産と判断できる。108は盆型の陶器植木鉢である。上から見ると橢円形の器形を呈している。底面には4分割された高台が付き、穿孔が2つなされている。釉は銅錫釉が外面と口唇部に施され、外底面と内面は無釉である。在地産と推測される。

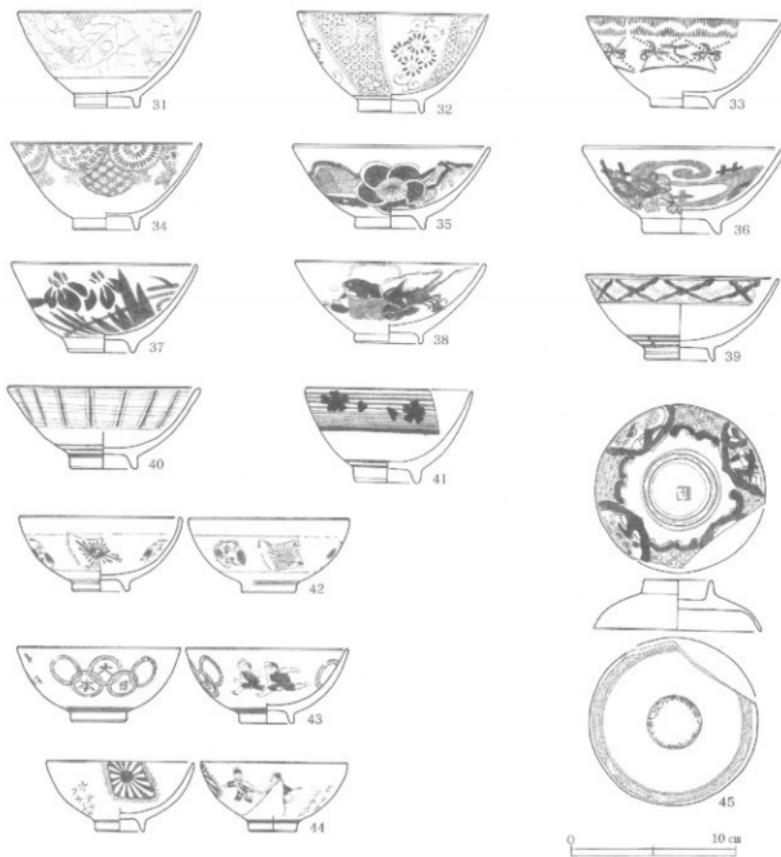
陶器瓶

109、110は陶器瓶である。いわゆる「焼酎瓶」といわれるものである。この器種は遺跡内で10個体分以上出土したが、いずれも同一の形態で、図示したのはこの2点のみである。109は口縁部を欠損するが、口縁部形態は110と同一と思われる。底辺部には穿孔があり、液体の取り出し口と解せる。外面には鉄釉が施されている。110は口縁部破片である。肩部に把手が一つ付いている。外面には鉄釉が施される。遺跡内でこの器種が多量に出土したのは、鍛冶の際に使用する酸などの薬品類の容器であったためと推測される。



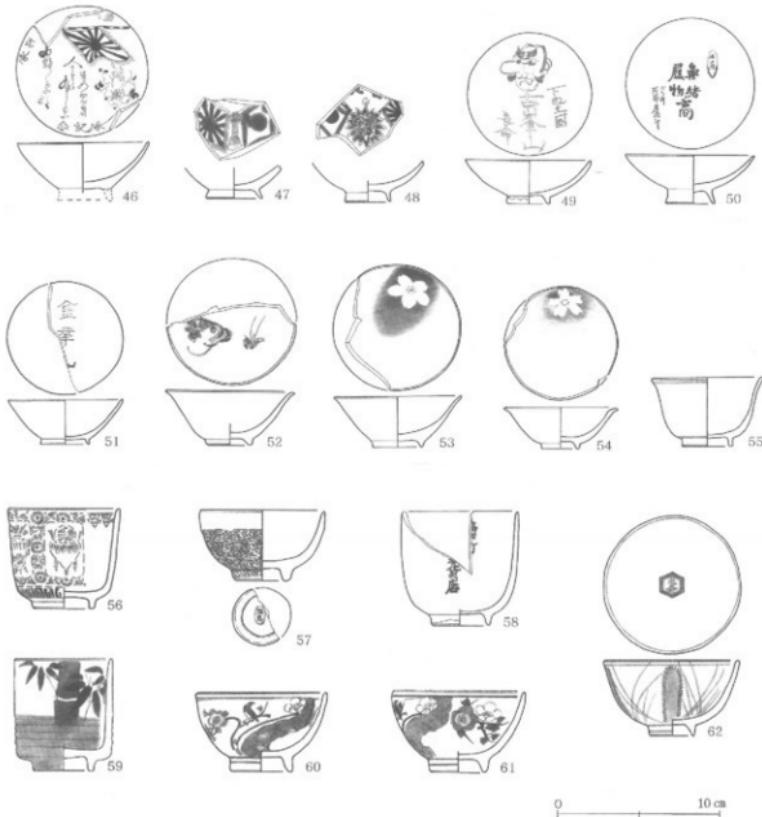
番号	副機	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
16	磁器碗	日輪檢出中	10.8	5.7	3.6	白色ガラス質 染付、呉須青色		19C前半	網戸産 2個体あり
17	"	日輪檢出中	10.5	5.9	4.0	白色ガラス質 染付、呉須青色		19C前半	網戸産 焼き墨き模
18	"	ゴミ穴中	10.8	(4.5)		白色ガラス質 染付、呉須コバルト		19C前～中	東北地方産
19	"	日輪檢出中	11.1	5.0	3.9	白色ガラス質 染付、呉須コバルト		19C後半	平清水産か
20	"	ゴミ穴中	11.1	5.7	3.9	白色 染付、呉須コバルト		19C後半	墨紙刷り
21	"	日輪檢出中	11.1	(4.8)	—	白色ガラス質 染付、呉須コバルト		19C後半	墨紙刷り
22	"	ゴミ穴中	11.7	4.6	3.9	白色ガラス質 染付、呉須コバルト		19C後半	墨紙刷り
23	"	ゴミ穴中	11.2	(5.1)	—	白色ガラス質 染付、呉須コバルト		19C後半	墨紙刷り
24	"	ゴミ穴中	11.1	5.7	4.2	白色ガラス質 染付、呉須コバルト		19C後半以降	網版刷り 6個体あり
25	"	ゴミ穴中	11.4	4.8	3.8	白色ガラス質 染付、呉須コバルト		19C後半以降	網版刷り
26	"	ゴミ穴中	11.7	4.9	4.2	"	"	"	2個体あり
27	"	ゴミ穴中	12.0	4.7	3.9	白色ガラス質 染付	"	"	3個体あり
28	"	ゴミ穴中	11.1	6.3	4.0	"	"	"	2個体あり
29	"	ゴミ穴中	11.0	6.3	4.4	白色ガラス質 絵、墨、黄土色のプリント	"	"	外観面凹鏡口両面
30	"	ゴミ穴中	11.1	5.7	4.0	白色ガラス質 青色のプリント	"	"	

第14図 近代陶磁器①



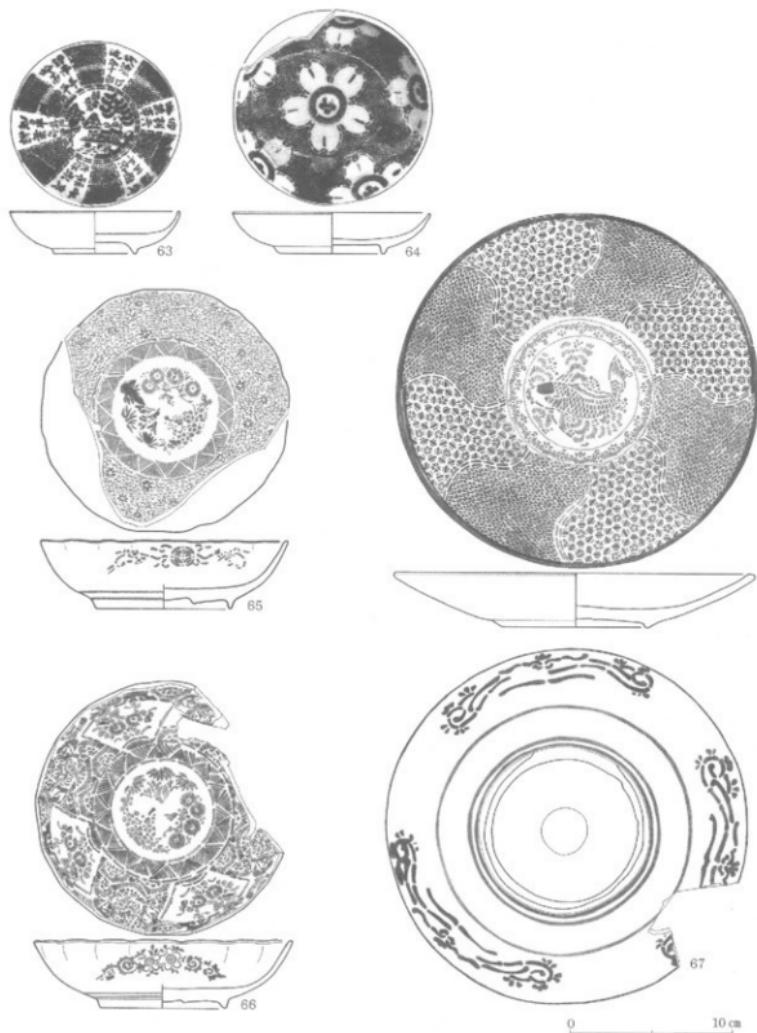
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
31	磁器碗	ゴミ穴中	11.1	5.9	3.7	白色ガラス質	青色のプリント	19C後半以降	ゴム印版? 右側体あり
32	"	"	11.4	6.0	3.8	"	染付、呉須コバルト	"	型紙刷り
33	"	"	11.7	5.4	3.9	"	青色のプリント	"	ゴム印版? 2個体あり
34	"	"	11.4	5.4	3.8	"	"	"	ゴム印版?
35	"	"	11.7	5.4	4.2	"	青、褐色のプリント	"	調版刷り
36	"	"	12.0	5.4	4.7	"	"	"	"
37	"	"	11.1	5.4	3.8	"	あやめの花染付(青)	"	あやめの葉 手描き(赤)
38	"	"	11.3	4.9	3.8	"	施付、呉須コバルト	"	網版刷り
39	"	"	11.4	5.1	4.2	"	染付、呉須コバルト	"	手描き
40	磁器碗	ゴミ六	11.6	5.1	3.9	白色ガラス質	染付、呉須コバルト	19C後半以降	染付手描き 2個体あり 樂付手描き
41	"	"	10.0	6.0	3.6	"	"	"	"
42	磁器碗(子供用碗)	"	9.6	4.5	3.5	"	赤、青、緑色のプリント	1930年代頃	ゴム印判 加日唐と擬灯
43	"	"	9.6	4.5	3.3	"	"	1930年代頃	ゴム印版 五輪マークに大日輪
44	"	"	8.9	4.4	2.8	"	赤、青、褐色のプリント	1930年代頃	ゴム印版 加日唐と道楽する子供
45	磁器碗蓋	"	10.2(下)	3.0	4.2(上)	"	染付、呉須コバルト	1941~1945	絵剥遮避

第15図 近代陶磁器②



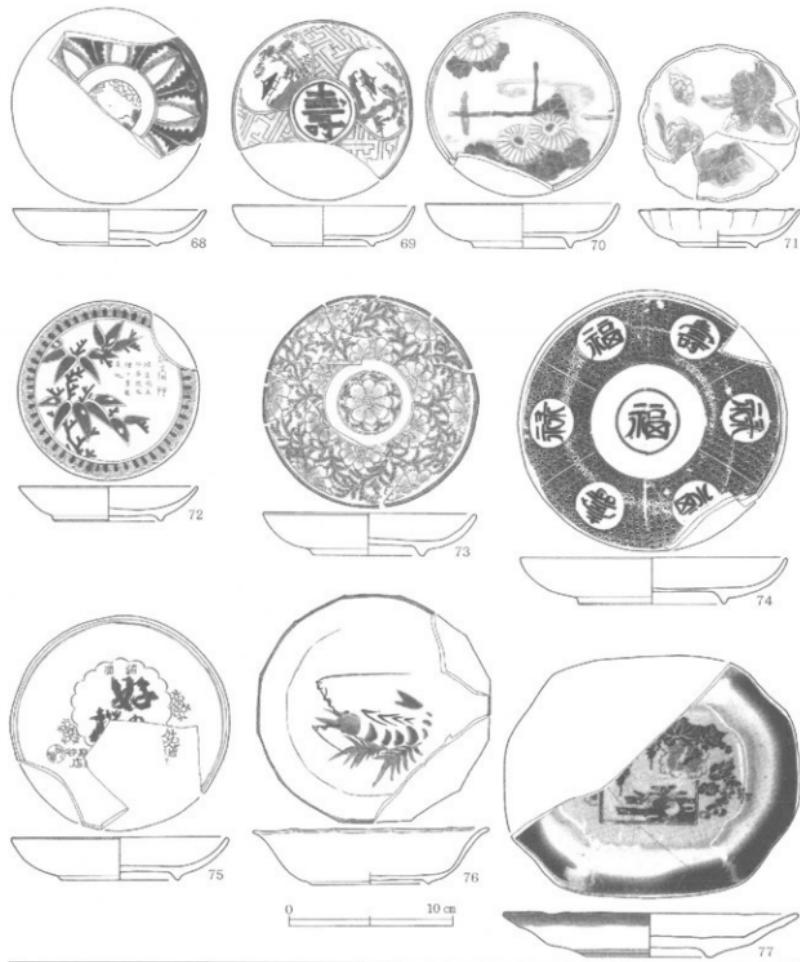
番号	器種	出土箇所	法量(cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
46	磁器皿	ゴミ穴	7.7	(3.0)		白色ガラス質	金色の上絵付	19C後半以降	「少貢口■廢跡 □隊記念」
47	"	"	—	(1.8)	3.2	"	赤、空色の上絵付	"	日章旗と旭日旗
48	"	"	—	(2.4)	2.7	"	赤、青、緑の上絵付	"	国旗と金鳥紋章
49	"	"	7.2	2.7	2.7	"	赤、茶色の上絵付	"	天河の面と「古董山」
50	"	"	7.8	2.9	2.9	"	赤、空色の上絵付	"	浦ノ月 横須賀市美術館蔵
51	"	"	6.6	2.7	2.6	"	金色の上絵付	"	「金豪山」
52	"	"	7.8	3.3	2.5	"	青、緑、白、金色の上絵付	"	鶴と樹木？ 4個体あり
53	"	"	7.6	3.0	2.8	"	翠色、青色と桃色	"	桜の花 5個体あり
54	"	"	6.6	2.4	2.4	"	"	"	7個体あり 53より小版
55	磁器皿	"	6.6	4.2	3.0	"	染付、工業コバルト	"	
56	磁器湯呑	"	6.6	6.3	3.6	白色	染付、工業コバルト	19C後半	2個体あり
57	磁器湯呑	"	7.5	4.2	3.3	黄褐色	青ひび縮、銅乳鉢	19C後半以降	裏面に「相馬」の印 2個体あり
58	角型湯呑	"	6.9	6.9	3.3	白色ガラス質	緑色の糊、上絵付	"	高田町 □口洋貨店
59	磁器湯呑	"	6.0	6.9	3.4	"	上半染付、下半銀繪	"	2個体あり
60	"	"	7.9	4.8	3.6	"	染付、青、桃色	"	銅瓶刷り 2個体あり
61	"	"	7.9	4.9	3.6	"	"	"	60と同じ國柄
62	"	"	8.4	4.8	2.7	"	染付、工業コバルト	"	見込みに「無寿」

第16図 近代陶磁器③



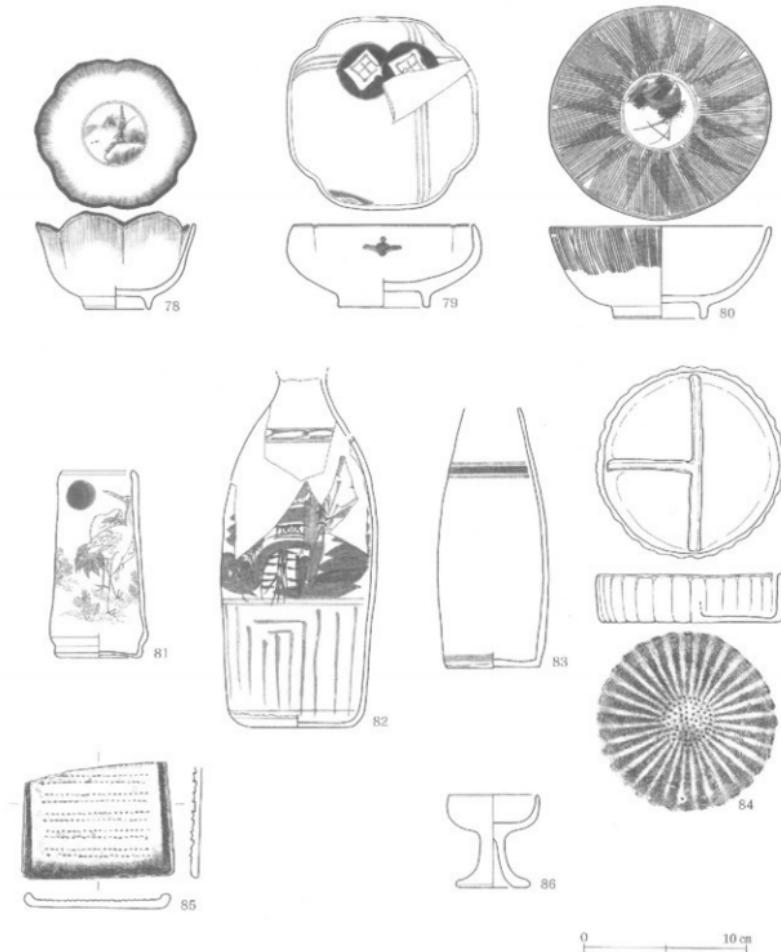
番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
63	磁盤皿	ゴミ穴	10.2	2.7	4.8	白色ガラス質	染付、工第コバルト	19C後半	墨紙刷り 2面体あり
64	#	II面横出時	11.7	2.6	6.3	"	"	"	墨紙刷り
65	#	ゴミ穴	14.7	4.2	8.1	"	"	"	墨紙刷り、墨おこし、田園山石
66	#	II面横出時	15.5	4.2	7.4	"	"	"	"
67	#	ゴミ穴	21.6	3.3	8.4	"	"	"	墨紙刷り、四蛇目高台

第17図 近代陶磁器④



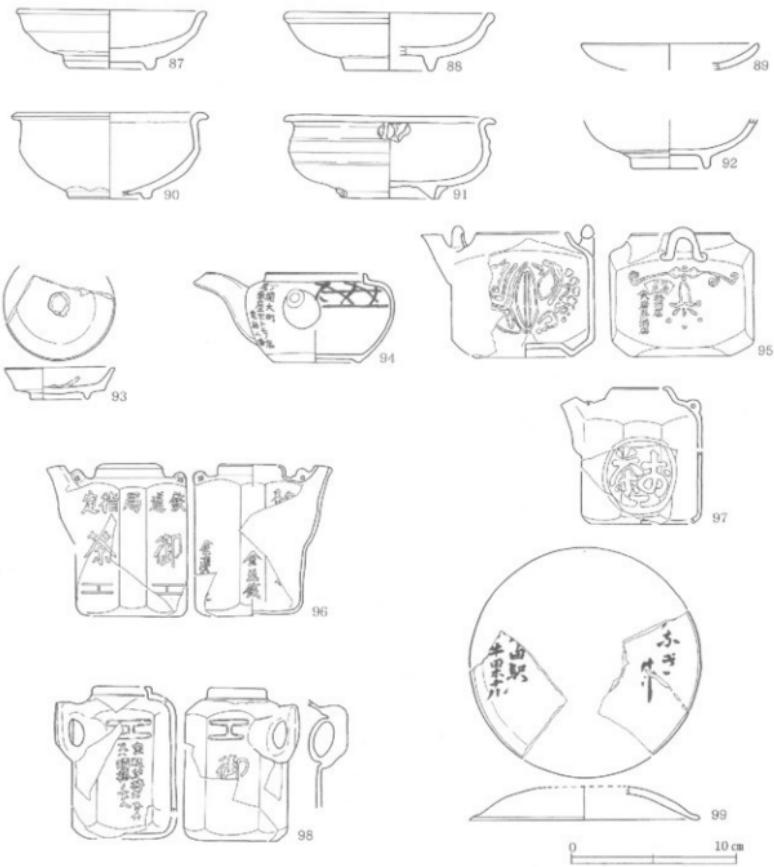
番号	形態	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬	焼付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径					
68	鉢	ゴミ穴	11.6	2.3	5.7	白色ガラス質	塗付、工業コバルト	19C後半以降	網版刷り、白紅	
69	"	"	10.8	2.4	6.0	"	"	"	網版刷り、白紅	
70	"	"	11.7	2.7	5.7	"	"	"	手描き?	
71	"	"	9.6	2.4	4.5	"	"	"	型むこし 3個体あり	
72	鉢	ゴミ穴	10.5	2.4	6.3	白色、ガラス質	塗付、工業コバルト	19C後半以降	網版刷り 2個体あり	
73	"	"	12.6	2.3	6.6	"	緑色、工業クロム	"	網版刷り、白紅	
74	"	"	15.9	2.8	8.8	"	塗付、工業コバルト	"	網版刷り、白紅	
75	"	"	13.1	2.6	6.9	"	"	"	網版刷り 3個体あり	
76	"	"	14.1	3.3	7.1	"	赤色の塗付	"	型むこし、赤、濃、緑色の上塗	
77	"	"	18.0	2.7	7.6	白色	塗付、青、緑、桃色	"	網版刷り 高台は円形	

第18図 近代陶磁器⑤



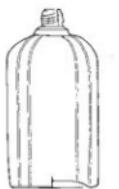
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	物類 納付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
78	磁器鉢	ゴミ穴	9.3	6.0	5.4	白色ガラス質	塗付、工業コバルト	19C後半以降	
79	"	"	11.1	5.1	5.4	"	塗付、青、茶色	"	塗付手描き
80	"	"	13.5	5.5	5.7	"	塗付、青、緑色	"	望おこし 口紅 2側面あり
81	磁器花生	ゴミ穴	4.8	11.7	5.4	"	塗付、黒色	"	銅版刷り 口縁四角形
82	磁器便利	"	—	(21.3)	7.2	"	塗付、青色	19C中葉	平滑水縫?
83	"	"	—	(15.9)	5.4	"	"	"	内面、底面無釉
84	磁器薬味入	日向検出時	11.6	2.8	11.1	白磁	19C中葉以降	望おこし	
85	磁器おろし金	"	—	(6.6)	9.1	"	"	"	上半欠損
86	磁器仏壇	ゴミ穴	5.4	5.7	4.2	"	塗付、工業コバルト	"	外画面全面青色

第19図 近代陶磁器⑤

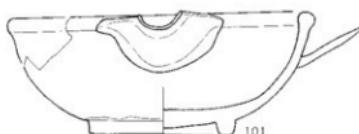


番号	器種	出土位置	法面 (cm)			胎土	施薬 絵付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
87	陶器皿	2号排溝塗	11.4	3.9	3.6	灰色	高溫のため釉不明	19C以降か	高溫の被熱を受けている
88	"	II面検出塗	12.3	3.6	5.1	黃褐色	空色の胎	19C以降	在塙窯
89	"	2号排溝塗	13.5	(1.5)	—	灰白色	高熱のため釉不明	19C以降か	高溫の被熱を受けている
90	陶器香炉	"	11.9	5.3	5.1	墨灰色	"	"	"
91	"	"	12.6	5.1	5.4	"	"	"	"
92	"	"	—	(3.0)	4.8	灰色	緑色の胎	"	高溫の被熱、内面無釉
93	陶器灯明皿	ゴミ穴	6.6	1.9	3.3	赤褐色~灰色	褐胎	"	灯芯支え欠損
94	陶器急須	"	6.1	5.4	5.1	灰白色	黒胎の上に造明釉	19C後半以降	[一燈火屋製造セトノヨ 電通二年]
95	陶器土瓶	"	5.4	7.5	5.9	灰白色	緑色の胎	"	[大骨董酒店]
96	磁器汽車茶瓶	"	3.4	9.2	6.0	白色	透明釉 (外面)	1921~1945	会津本郷産
97	"	"	—	(4.5)	—	白色	無釉	"	"
98	"	"	—	(8.4)	5.2	灰色	"	"	"
99	陶器 茶	"	13.5(F)	(2.1)	—	灰白色	文字緋色の上透明釉	20C前半	[小牛田製 小牛玉ホタル うなぎ用]

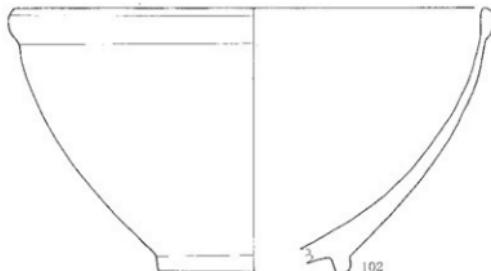
第20図 近代陶磁器(7)



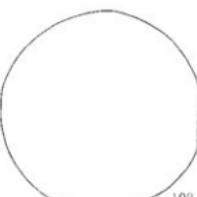
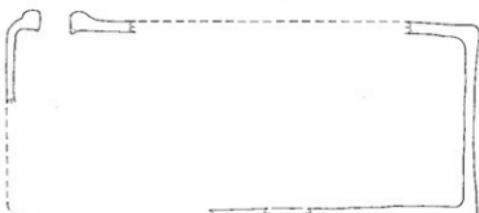
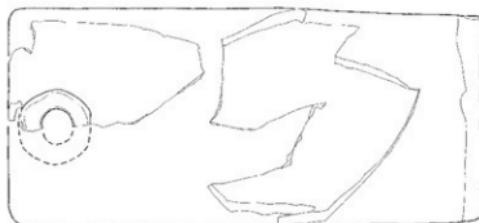
100



101



102

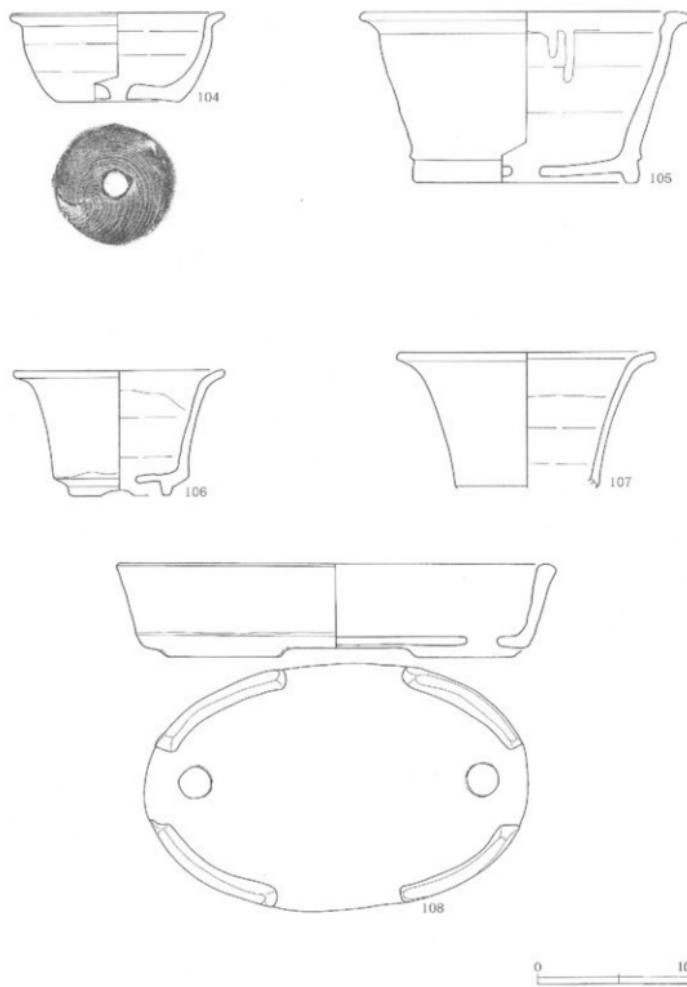


103

0 10 cm

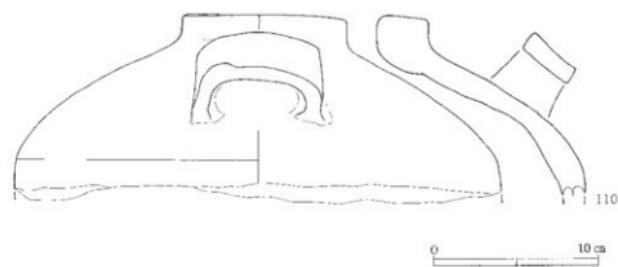
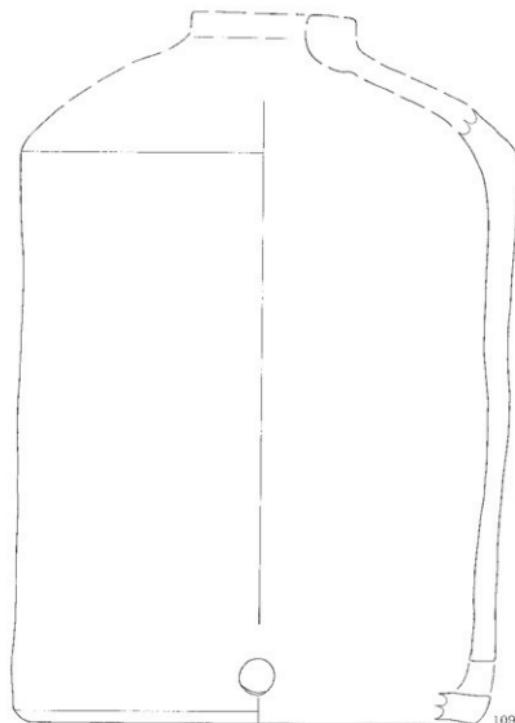
番号	图様	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬 結付	製作年代	その他
			II位	高さ	底径				
100	磁器 化粧水瓶	I 面鏡出時	1.0	10.8	5.2	白色、ガラス質	透明釉	1941~1945	瀬戸産「セ 653」
101	陶器 片口鉢	II 面鏡出時	18.3	7.2	8.4	赤褐色	滑剤	19C以前	見込みに燒合の痕跡
102	陶器 鉢	ゴミ穴	29.4	15.9	11.8	にふい橙色	自化釉の上透明釉	19C後半以降	平滑水底?
103	陶器 潜たんぼ	ゴミ穴	27.6(長)	11.7(高)	12.0(幅)	灰色	鉄物	19C以降	内面茶色、外側黒色

第21図 近代陶磁器⑧



番号	器種	出土位置	法規 (cm)			胎土	釉薬 繪付	製作年代	その他
			口径	高さ	底径				
104	土器植木鉢	日向横出時	12.9	5.3	7.2	橙色	無釉	19C以前	胎上に骨針混入
105	陶器植木鉢	ゴミ穴	20.1	10.5	13.5	灰黄色	空色の鶴	"	外底面粗面
106	"	"	12.6	7.7	6.0	橙色	網目状	"	
107	"	"	15.6	(8.1)	—	"	"	"	106と胎土、釉共通
108	"	山曾 1号石組み近く	26.7	5.7	21.0	灰黄色	"	"	外底面粗面

第22図 近代陶磁器⑨



番号	器種	出土位置	法寸(cm)		船土	釉薬 着付	製作年代	その他
			11径	高さ				
109	陶瓶	1面被出時	—	(37.8)	27.0	暗灰色 鉄釉	19C後半以降	薬品の痕か
110	#	#	14.7 (11.4)	—	#	#	#	#

第23図 近代陶磁器⑩

4 ガラス瓶 (第24~27図、写真図版17・18)

ガラス製品は中コンテナ1箱分 (9.8kg) 出土したが、主に、形状を保っているものを選択し掲載した。46点を掲載している。

クリーム瓶

111~118は白色のガラス製のクリーム瓶である。いずれもねじり蓋である。蓋は1点のみアルミ製で「今美人クレーム」と刻印されるもの（掲載番号168）が出土している。115は他に比較すると透明性が高い色調を呈する。117は上からみると体部が六角形になっている。

文房具

119は緑色でねじり蓋の瓶である。形状と瓶の色から、墨の瓶と推測されるが確証はない。120、121はインク瓶である。どちらも透明の色である。120は体部が四角形である。121は底面に「S L M」の陽刻がある。

薬瓶

122~130は薬瓶である。122~124は透明の瓶で口盛があり、液体の薬瓶である。124は「三神醫院」の文字がある。現在も一関市に「三神病院」がある。125は透明の瓶で「ヨーチム」幾、「齊井製」の文字がある。ヨードチンキの瓶と判別できる。126は緑色の丸底の瓶で、「寶丹」の陽刻がある。粒薬の瓶である。127、128は青色の瓶である。127は「邑田 資生堂」、「日華 一方水」の文字がある。128は「日華 清涼水」、デザイン化された「KATO」の文字がある。どちらも目薬瓶と判別できる。129は茶色の瓶で、「廣田神薬」、「深生堂藥房」の文字がある。130は透明の瓶で「製精液」、「濟生製藥社」、「第壹號」の文字がある。液体の薬瓶と推測される。

その他小型瓶

131は透明の瓶で、形状から椿油の瓶と推測される。132は透明の瓶で体部にストライプの装飾が入っている。中央にはラベルを貼る平坦な面がある。瓶の用途は不明であるが、化粧水等の容器と推測される。133は茶色のねじり蓋の瓶で側面に「TK」の文字がある。用途は不明である。134は透明の瓶で、体部が8角形で、被せ蓋である。用途は不明である。135は緑色の瓶である。用途は不明であるが、食品類の瓶と推測される。136は透明の瓶で、底面に「AJINOMOTO」の陽刻があり、「味の素」の瓶と判別できる。ねじり蓋である。137は茶色の瓶で口頭部に「わかもと」、体部にデザインされた「Wakamoto」の文字がある。わかもと薬品株式会社の整腸飲料「わかもと」の瓶である。

汽車茶瓶

138は鉄道内で販売される「汽車茶瓶」である。緑色の瓶で「御茶」、「實用新案」、「東京 橋場屋製」の文字がある。蓋もガラス製で、湯呑みとして使用されるが、出土しなかった。ガラス製の汽車茶瓶は1921年（大正10年）に登場したが、質感、安全面から不評で、ほどなく陶製の茶瓶に復し、その使用期間は短かったという（窯業史博物館 1995 「汽車茶瓶」）。よって、本品は1921年頃のものとすることができる。

その他中型瓶

139は透明の瓶で丸底である。体部に「バット」の文字があり、器形も野球のバットの形状である。金平糖などの菓子の容器であろうか。

140は牛乳瓶である。透明な瓶で体部に「全乳」、「正一合」の文字がある。141、142は用途不明の瓶である。どちらも緑色の瓶である。141は広口で、142の口は狭い。142は消毒液などの薬瓶の可能性が高い。

サイダー瓶

143、144は緑色の瓶で、サイダー等の清涼飲料水の瓶と推測される。143は「B N K」、「大日本麦酒株式会社製造」の文字が陽刻される。口唇部が欠損するが王冠栓と推測される。大日本麦酒株式会社の清涼飲料水には「リボンシトロン」、「三ツ矢サイダー」等があり、それらの瓶と推測される。144は文字、マークの陽刻がない瓶である。瓶の容量、色からサイダー等の瓶と推測される。王冠栓である。

酒瓶

145は透明の瓶で「WHISKY」の陽刻から、ウイスキー瓶と判断できる。ポケットサイズの瓶である。「WHISKY」以外陽刻がなく、メーカー、商品名などは不明である。ガラスには気泡が混じり、瓶は全体に歪んでいる。

146～148はビール瓶である。146は撫で肩の瓶で底面にキック（上底）に入る。茶褐色の瓶で刻印等はない。口縁部は欠損するがコルク栓の瓶と推測される。147も撫で肩の瓶で底面にキックが入る。ガラスは黒色に近い色を呈している。刻印等は存在しない。口縁部分を欠損するが上端部に、コルク栓の口を包む用紙の痕跡がありコルク栓であったと判断できる。148は肩張り瓶で「DAINIPPON BREWERY CO. LTD」、「TRAD EMARK」の陽刻がある。大日本麦酒株式会社のビール瓶である。王冠栓のビール瓶である。大日本麦酒株式会社は1906年（明治39年）に合併により成立しており、この瓶も1906以降の瓶と理解できる。

149～150は緑色のガラス製の瓶である。清酒瓶と推測される。149は底部が欠損するが清酒一合瓶と推測される。ガラスには気泡がわずかに混入し、器形にはやや歪みがある。151は清酒二合瓶と推測される。実測したところ2、3合の容量がある。完存品で、底面は上底になっている。栓は機械栓である。ガラスにはわずかに気泡が混入する。151は清酒一升瓶と推測される。栓は機械栓である。一升瓶の破片は多量に出土したが、完形に復元できた個体はなかった。

機械栓

152、153は磁器製の機械栓である。磁器製品であるが、ガラス瓶とセットになるものであり、ここに掲載した。どちらも栓部分は磁器製で上部には透明釉が施され、瓶の口に挿入される分は無釉である。金具は鉄製の針金である。

コップ

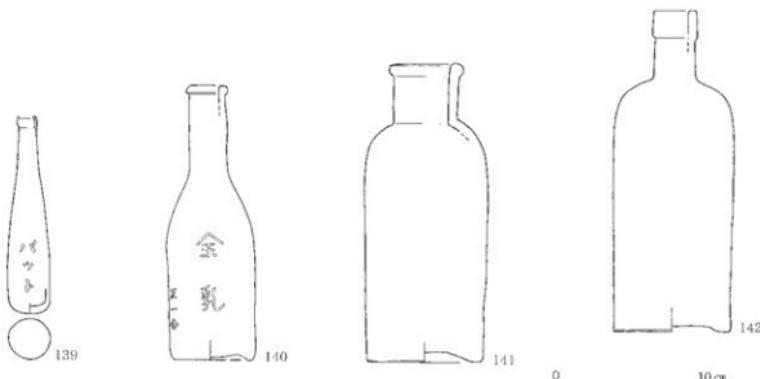
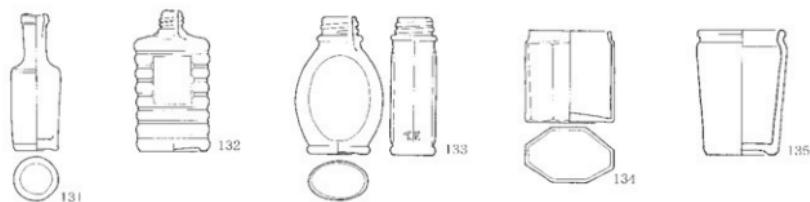
154～156は透明のガラス製のコップである。154は上底で、体部に10単位のカットが入る。ガラスにはわずかに気泡が入る。155と156は容量、プロポーションが似るが、156は素文であるのに対して、156はカットと格子目状の文様が施されている。

4 ガラス瓶



番号	器種	出土位置	法量(cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
111	クリーム瓶	ゴミ穴	2.7	2.4	3.2	白色	底面に「16」
112	"	"	3.8	4.2	3.7	"	
113	"	"	4.2	4.2	3.4	"	
114	"	"	4.6	5.1	4.2	"	
115	"	1回検出時	4.8	3.6	4.2	"	やや透明性のある白色
116	"	ゴミ穴	3.6	4.3	5.1	"	
117	"	"	3.8	3.9	6.2	"	体部六角形
118	"	"	3.8	4.2	6.9	"	
119	のり瓶	"	6.4	6.5	2.9	緑色	
120	インク瓶	"	2.0	3.7	4.7	透明	体部、底面四角形
121	"	"	2.6	4.2	5.0	"	底面に「SLN」
122	"	"	1.2	2.3	5.6	"	口盛あり
123	"	"	1.3	2.6	6.0	"	
124	"	"	1.8	4.5	10.0	"	口盛あり「三井醫院」
125	"	"	1.4	2.4	6.9	"	「豊井製」「日ホーム丁瓶」
126	"	"	1.2	-	5.1	緑色	「寶丹」
127	片葉瓶	"	1.0	2.3	3.9	青色	「日束 育生堂」「日束一方水」
128	"	"	1.6	3.3	7.4	"	「日束 清涼水〔KATO〕」
129	葉瓶	"	1.7	3.6	7.8	茶色	「廣田神楽」「探生堂樂度」
130	"	"	1.6	3.4	6.6	透明	「鶴乳」「清涼製造」「草薙院」

第24図 ガラス製品①



番号	形種	出土位置	寸法(cm)			色調	その他
			直径	底径	高さ		
131	棒油瓶	ゴミ穴	1.5	2.6	8.4	透明	
132	不明瓶	#	1.2	4.1	8.4	#	
133	#	#	2.0	4.0	8.4	茶色	側面に「TK」
134	#	#	5.0	5.4	5.6	透明	体部、底面 八角形
135	#	#	5.1	4.2	7.7	緑色	食品の瓶か
136	味噌瓶	#	2.0	4.2	8.4	透明	底面に「AIHNOMOTO」
137	わかもと瓶	1曲挽出跡	2.9	4.6	11.4	茶色	頭部に「わかもと」 体部に「Wakanmoto」
138	汽水茶瓶	ゴミ穴	3.2	6.3	14.1	緑色	1920年代 御茶 尖川新宿「東京櫻井屋製」
139	第子?瓶	#	1.0	-	12.0	#	較小の第子瓶か「バット」
140	牛乳瓶	#	2.2	4.8	16.8	透明	「全乳 正一合」
141	不明瓶	#	4.5	7.1	18.0	緑色	
142	不明瓶	#	2.6	7.1	19.8	#	

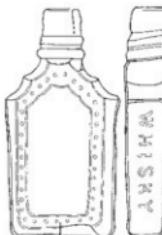
第25図 ガラス製品②



143



144



145

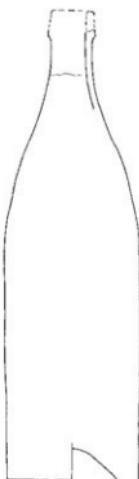
大日本酒



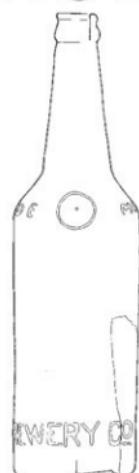
株式会社



146



147

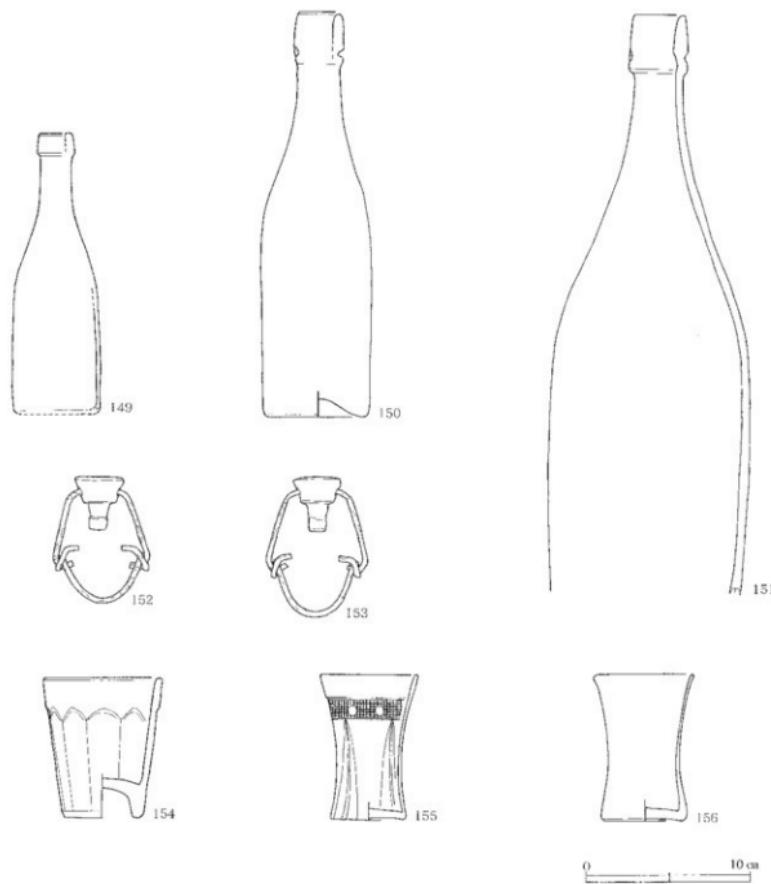


148

DAI NIPPON BREWERY CO. LTD

番号	器種	出土位置	法量(cm)			色調	その他
			口径	底径	高さ		
143	サイダー瓶	日向焼出時	—	6.2	(22.8)	緑色	「BNK」 大日本酒株式会社製造
144	〃	ゴミ穴	—	6.1	(23.7)	〃	銘なし
145	ウイスキー瓶	〃	1.8	5.4	14.0	透明	側面に「WHISKY」
146	ビール瓶	2号石棺中	—	6.9	(22.2)	茶色	底面キック
147	〃	ゴミ穴	—	7.6	(27.9)	〃	口縁部に黒色の口封締の痕跡がある
148	〃	〃	2.3	6.8	28.3	〃	「DAI NIPPON BREWERY CO LTD」

第26図 ガラス製品③



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			色調	その他
			口徑	底径	高さ		
149	清酒一合瓶	ゴミ穴	2.0	—	(17.1)	緑色	底面欠損
150	清酒二合瓶	#	2.6	6.0	24.8	#	機械栓 瓶身は約2.3合ある
151	清酒一升瓶	#	3.2	—	(35.1)	#	機械栓
152	機械栓	#	2.9	—	3.3	白色	磁器製
153	#	#	2.7	—	3.2	#	#
154	コップ	#	7.2	4.5	8.6	透明	上げ底
155	#	#	5.9	4.7	8.9	#	
156	#	#	6.0	5.0	8.9	#	

第27図 ガラス製品④

5 金 属 製 品 (第28・29図)

鉄製品を3点、銅製品7点、ほうろう製品(鉄地にほうろうびき)1点、アルミニウム製品2点を図示している。

鉄製品

157～159は鉄製品である。157は鉈である。完存品で2号排洋場から出土した。刃部側先端に突起がついている。158は不明製品である。逆V字型の形状で、3ヶ所に鍛が打ち込まれている。この鍛が何と固定する為のものか判別できない。鋸先などの可能性が考えられるかはつきりしない。159は鎌である。柄の木質が一部分残っており、柄を固定する釘も残存する。

銅製品

160～166は銅製品である。160は火鉢や開炉裏の灰を平坦にする灰ならしである。柄部が欠損している。161は不明銅製品である。籠状の銅が反りを持って曲がっており、上端には輪が付いている。中ほどには2条の凸帯が巡っている。くつわの引手に形状が似るが、他のくつわの部位との組み合わせ方法が不明で、くつわの引手という確証を示すことができない。162は吸口、らう、雁首が一体になった煙管である。火皿は欠損している。らう部分には輪状の刻みが施されている。背の部分は灰落としに敵いたため凹んでいる。163～166は煙管の吸口である。164、166は内部にらうの竹が残存している。これらに伴う雁首は出土しなかった。

ほうろう製品

167は、ほうろう製の葉缶である。鉄地の上にほうろうを引いている。内面は白色、外面は黒色を呈している。本体と把手は割り釘で連結している。蓋は出土しなかった。

アルミニウム製品

168アルミニウム製の蓋である。168は化粧クリームの蓋で「今美人クレーム」の陽刻がある。捻り蓋である。化粧クリームの瓶は多数(111～118)出土しているが蓋はこの1点のみの出土である。169はインク瓶の蓋である。釣鐘型の形状で捻り蓋である。「BOHN INK」の陽刻がある。

6 石 製 品 (第29～33図)

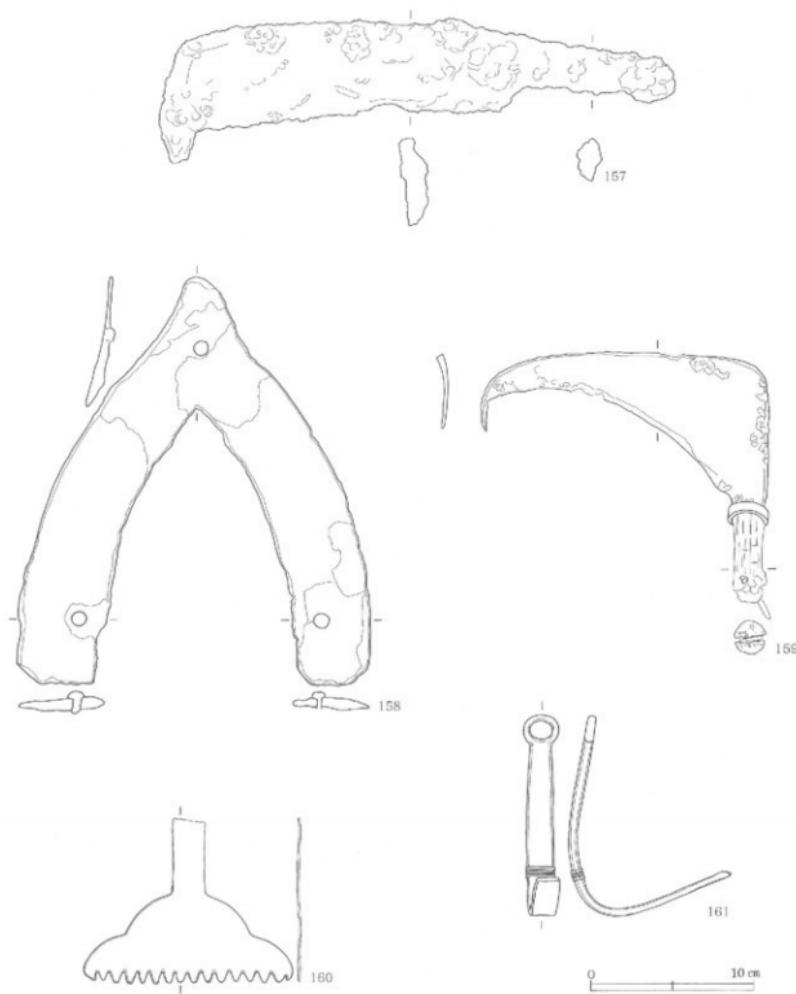
砥石を2点と、挽臼を6点図示している。

砥石

170、171は砥石である。石質はどちらも凝灰岩で、170は3面、171は2面を使用している。色調は明青灰色を呈する。170は縦、横方向とともに欠損している。171は完存品で、全面に酸化鉄分が多量に付着している。

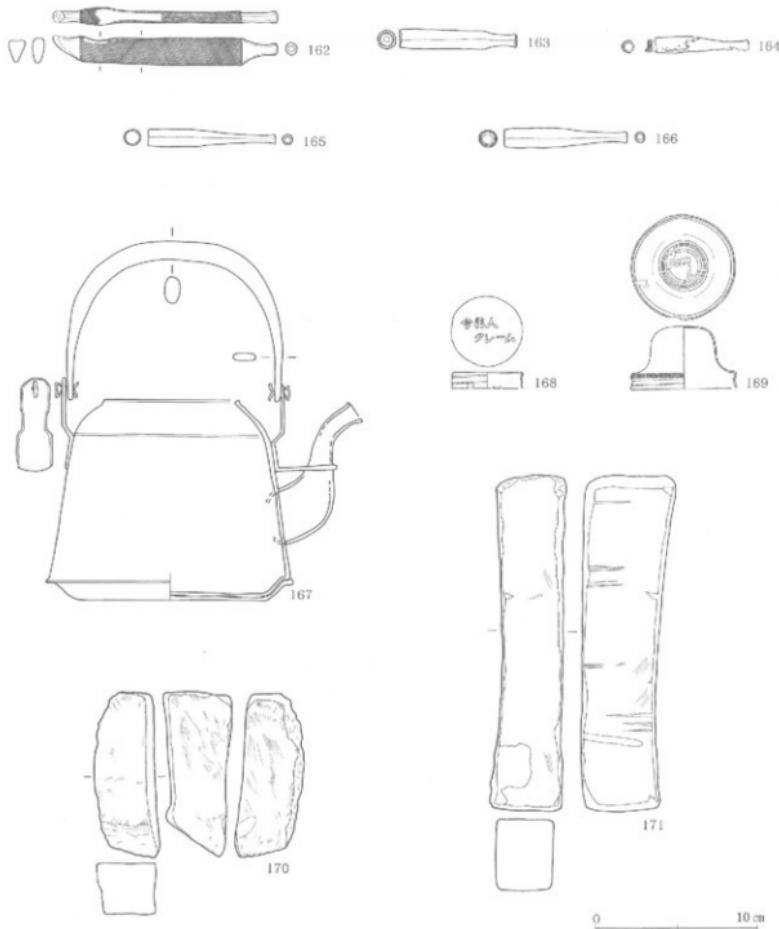
挽臼

上臼が4点(172～175)、下臼が2点(176、177)出土している。石質はいずれも溶結凝灰岩である。172は上臼である。約半分に欠損している。使用により卸目が著しく磨耗しているが、卸目は6単位と読み取れる。側面には引き木を差し込む穴がある。穴の平面形は四角形である。また心棒の穴が上面まで貫通している点が特徴的である。173は上臼である。約半分に欠損している。卸目の単位は6単位と読み取れる。心棒の穴は上面には貫通していない。側面に引き木を差し込む四角形の穴があり、その反対側には浅い長方形の穴がある。174は上臼である。約2／5の残存である。使用により卸目が非常に磨耗しているが、卸日のパターンは放射状と読み取れる。側面には引き木を差し込む



番号	器種	出土位置	金屬の種類	その他の	重さ (g)
157	なた	2号排溝場	鉄	銷着し、先端に突起あり	568.0
158	不明	日面検出時	鉄	頭で3箇所を留めている 製品名不明	335.0
159	鍼	ゴミ穴	鉄	柄一部現存	121.0
160	灰ならし	2号排溝場	銅	納部欠損	68.0
161	くつわ?	ゴミ穴	銅	くつわの引手か?	111.0

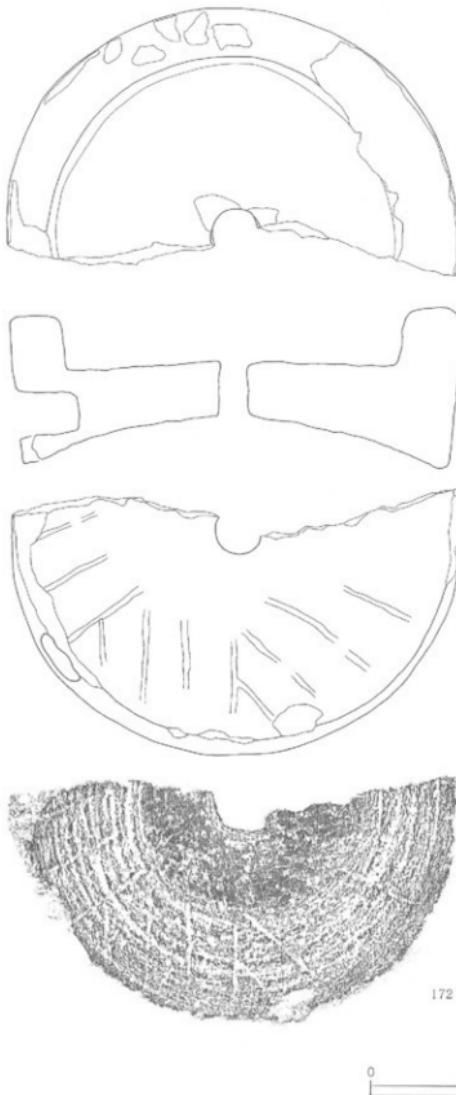
第28図 金属製品①



番号	器種	出土位置	金属の種類	その他	重さ (g)
162	短剣	ゴミ穴	銅	火薬欠損 体部にやすり状の剥み	31.0
163	#	日面検出時	銅	吸口	11.0
164	#	ゴミ穴	銅	吸口 らうが一部残存	5.0
165	#	"	"	吸口	9.0
166	#	"	"	吸口 らうが一部残存	10.0
167	薬缶	"	ほうろう (鉄地)	内面白、外黒	385.0
168	クリーム瓶の蓋	"	アルミニウム	ねじ蓋「今美入クレーム」	1.0
169	インク瓶の蓋	ゴミ穴	アルミニウム	ねじ蓋「BOHN INK」	3.0

番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
170	研石	ゴミ穴	凝灰岩	3面使用	192.0
171	"	第日面検出時	"	2面使用 全体に酸化鉄分沈着	721.0

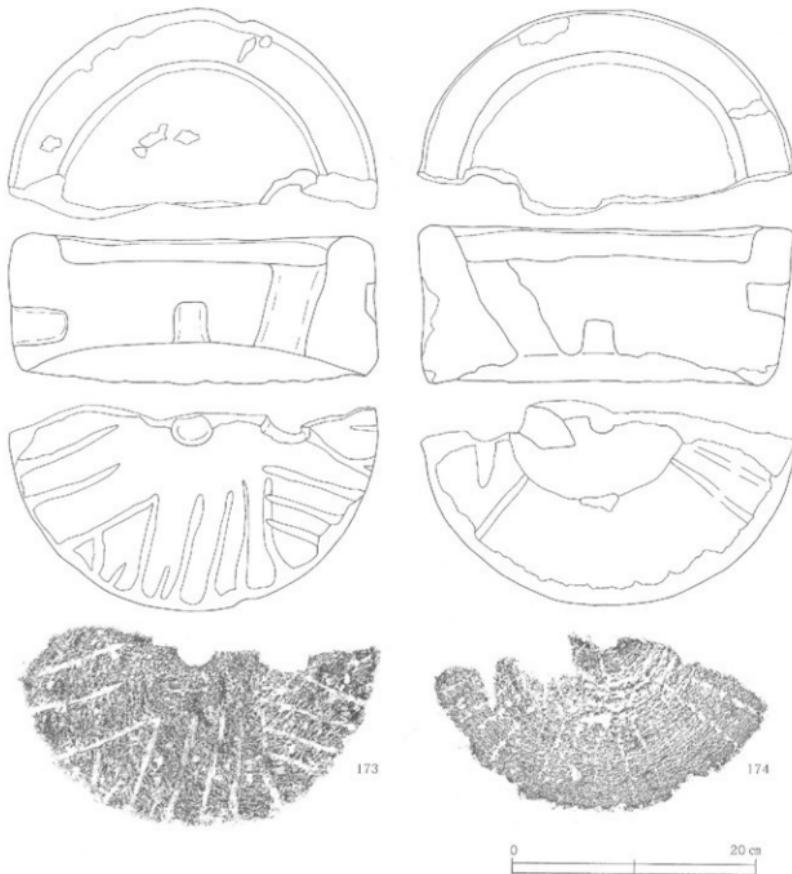
第29図 金属製品②、石製品①



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ(g)
172	挽き臼	日面検出時	溶結凝灰岩	上臼 おろし臼6分割	7,050

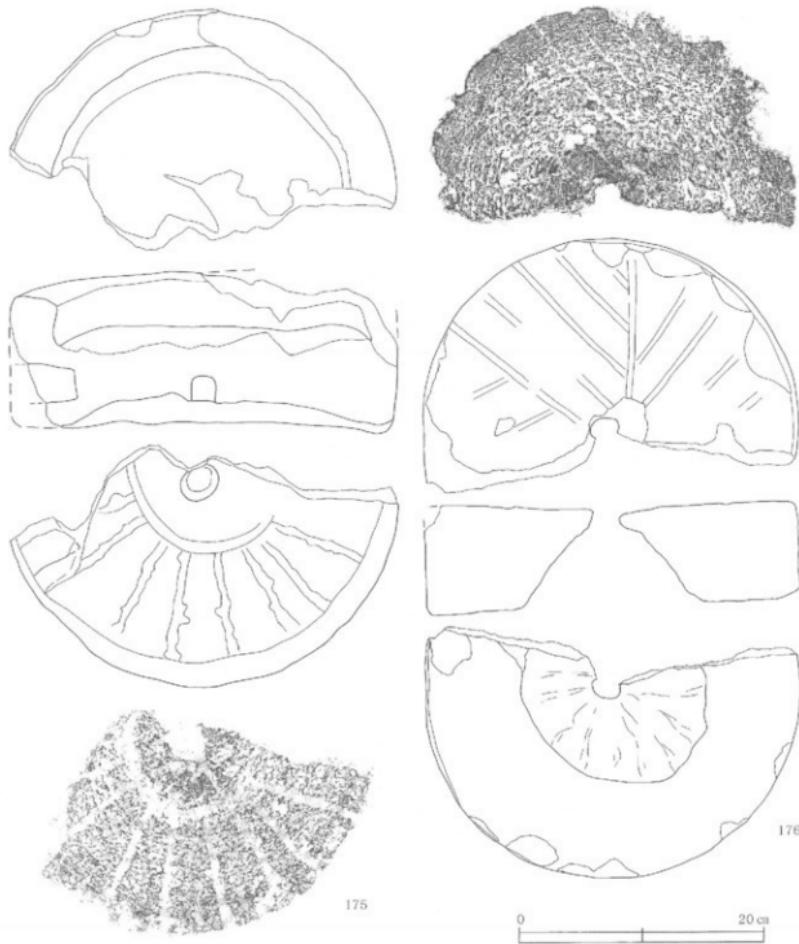
第30図 石製品②

穴があり、心棒の穴は上面に貫通していない。175は上臼である。約2／5の残存である。卸目のパターンは放射状である。側面に引き木を差し込む穴がある。全体に被熱しており、石が脆弱になっている。176は下臼である。約半分の残存である。上面は「ふくみ」がほとんど無く、平坦になっている。卸目はかなり磨耗しており、読み取りが困難であるが、6単位と推測される。心棒の穴は貫通しており、下側で漏斗状に広がっている。177は下臼である。完形品である。176と異なり「ふくみ」が頭著にある。卸目は6単位である。



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
173	挽き臼	日面候出時	溶結凝灰岩	上臼 おろし目六分割 上面焼けている	6,800
174	挽き臼	日面候出時	溶結凝灰岩	上臼 おろし目放射状 磨耗著しい	8,900

第31図 石製品③



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ (g)
175	塊き臼	Ⅱ面検出時	溶結凝灰岩	上白 おろし目放射状 焼けている	6,100
176	塊き臼	Ⅰ面検出時	溶結凝灰岩	上白 おろし目6分割か	7,100

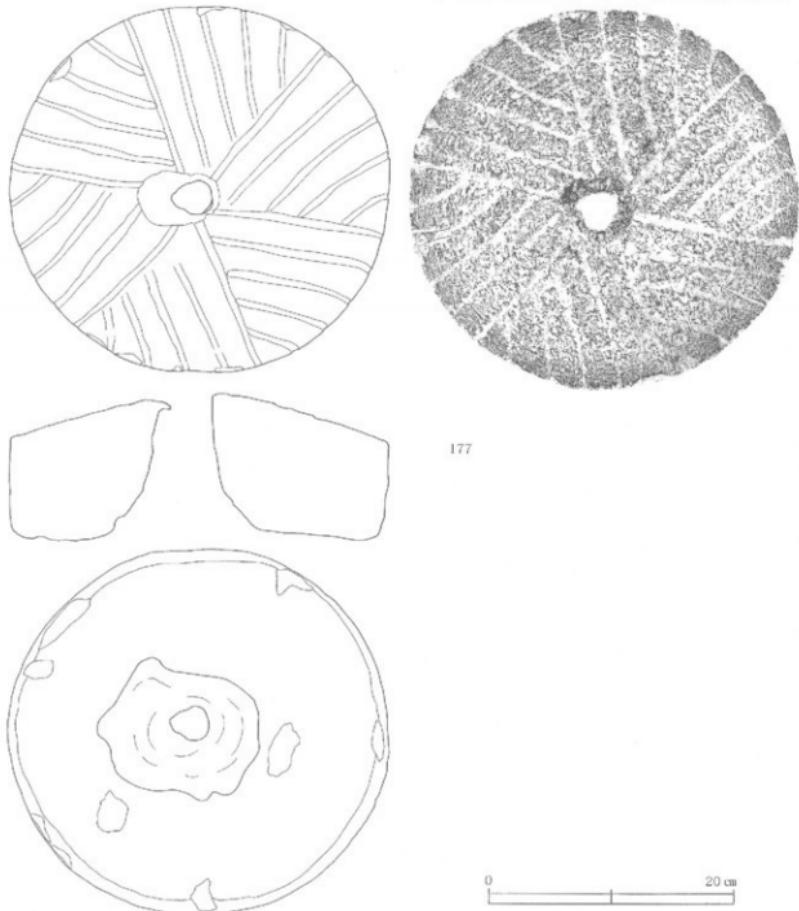
第32図 石製品④

7 その他の製品 (第34図)

合成樹脂の製品 (178~182) と土器、磁器製の人形 (183~185) をここで示す。

合成樹脂製品

178、179は歯ブラシである。178は柄に「ライオン」の文字があり、下端には金属製のリングがついている。色調は赤褐色を呈する。179は柄に反りが入っており、柄には「実用歯ブラシ」の文字がある。下端部には穴があるが、金具等は残存していない。色調は飴色を呈する。180、181は櫛である。



番号	種類	出土位置	石質	その他	重さ (g)
177	梳き臼	日面検出時	滑結凝灰岩	下臼 おろし目6分割	14,900

第33図 石製品⑤

180は合成樹脂製であるが、木目調の文様が施されている。色調は薄茶色を呈する。181は約半分が欠損している。色調は船底色を呈している。182は自転車のライトである。黒色の合成樹脂で、ライト本体、後蓋は欠失している。外面には金属製のスイッチ、内面には乾電池と接触する金具が残存している。下端には自転車に装着した際の傷が多数ついている。

人形

183は磁器製の型おこしの人形である。後から見ると寝そべる裸婦で、正面から見ると乳飲み子に授乳している構図である。温泉場などの土産品であろうか。底面は無釉で、他は透明釉が掛けられている。また上絵付けで髪は黒色で、顔、口、髪飾りは赤で彩色されている。脚部が欠損するが、接着剤を塗布した痕跡が存在する。中空品である。184は素焼き形おこしの猫形である。顔面部分が欠損するが他は完形である。中実品で、彩色した痕跡はみえない。185は磁器製の形おこしの犬形である。中空品で頭部が欠損している。底面は無釉で他の外面は透明釉が施されている。犬の口は茶色で上絵付けされている。



178



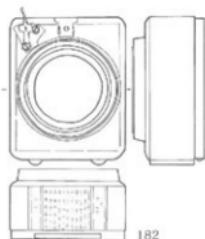
179



180



181



182



183



184

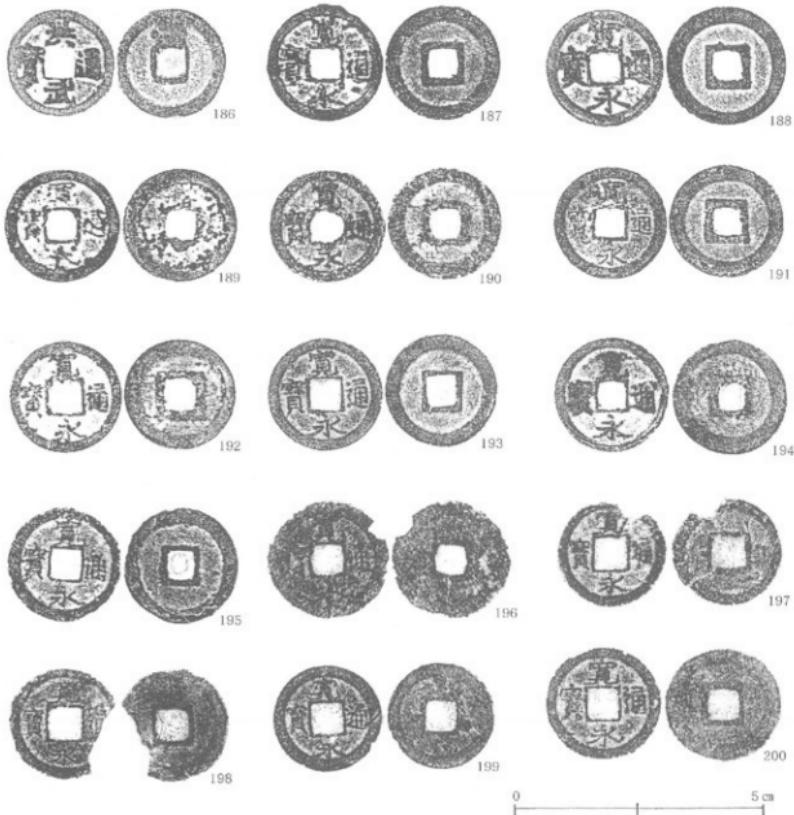


185

0 10 cm

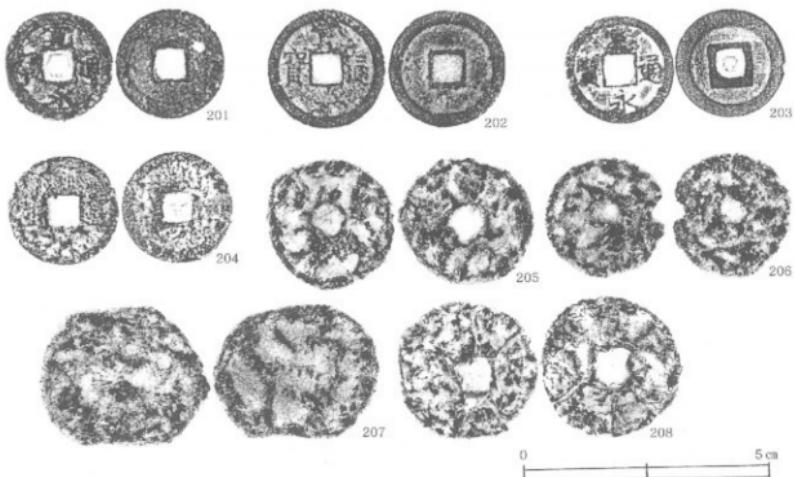
番号	图版	出土位置	材質	その他
178	歯ぶらし	ゴミ穴	合成樹脂	「ライオン」の文字 リングは金属製
179	#	#	#	「実用歯ブラシ」
180	帽	#	#	うす茶色を呈する
181	帽	#	#	あめ色を呈する
182	自転車のライト	#	#	黒色 スイッチの金具が残る
183	人形	#	磁器	型おこし 彩色の痕跡あり
184	猫形	#	土製品	型おこし 頭面部欠損
185	犬形	#	磁器	型おこし 口は上絵付で表現

第34図 その他の製品

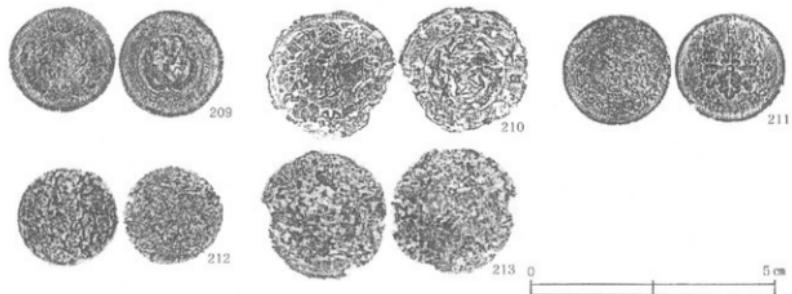


番号	種類	出土位置	直径 (cm)	重さ (g)	金屬の種類	鋳造年代	備考
186	洪武通寶	2号検津場	2.25	2.7	銅	1368年	横筋残る
187	寛永通寶	日面検出時	2.30	3.3	#		新寛永 187~189 ゆきして出土
188	"	"	2.39	3.4	#	1636年	古寛永
189	"	"	2.25	2.6	#		新寛永
190	"	"	2.35	2.6	#	1636年	古寛永
191	"	"	2.30	2.8	#		新寛永
192	"	"	2.25	2.7	#		新寛永
193	"	"	2.30	2.8	#		新寛永
194	"	"	2.30	3.3	#		新寛永
195	"	"	2.25	2.1	#		新寛永
196	"	"	2.35	1.4	#		新寛永
197	"	"	2.20	1.4	#		新寛永
198	"	"	2.20	1.7	#		新寛永
199	"	2号検津場	2.25	2.5	#		新寛永
200	"	日面検出時	2.25	1.9	#		新寛永

第35図 銭貨①



番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鋳造年代	備考
201	寛永通寶	日面検出時	2.15	1.8	銅		新寛永
202	"	1号排津場	2.40	3.0	"		新寛永
203	"	"	2.15	2.8	"		新寛永
204	"	2号排津場	2.25	2.0	"		新寛永
205	寛永通寶か	日面検出時	2.5(総合)	3.8	銖		寛永通寶 銖一文残か
206	"	"	2.4(総合)	4.2	"		"
207	"	2号排津場	3.2(総合)	6.0	"		銖一文残が2枚ゆびか
208	"	"	2.6(総合)	2.9	"		寛永通寶 銖一文残か



番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鋳造年代	備考
209	半銖銅貨	1号排津場	2.15	3.3	銅	1877年(明治10)	
210	一銖銅貨	2号排津場	(2.65)	4.9	"	不明	年号部分欠損 明治時代
211	一銖銅貨	日面検出時	2.20	3.3	"	1920年(大正9)	
212	不明	日面検出時	1.95	2.0	"	不明	寶幣か否か不明
213	一銖銅貨	日面検出時	(2.60)	4.2	"	不明	謹一銖銅貨 摩耗著しい

第36図 錢貨②

8 錢 貨 (第35・36図)

銭は28点を図示した。出土した全品である。中世の洪武通寶が1点、寛永通寶22点、近代以降の貨幣が5点である。

渡来銭

186は洪武通寶である。明銭で初鋤年代は1368年である。出土したものは銭径が小さく摸銅錢と推測される。渡来銭はこの1点のみの出土である。

寛永通寶

187～204は寛永通寶の第一文銭である。188、190は初鋤年代が1636年の古寛永通寶である。他は新寛永通寶である。背に文字があるものはない。205～208は鉄錢である。205、206は鋸のために明瞭ではないが、寛永通寶の鉄一文銭と判断できる。また、207は寛永通寶鉄一文銭が2枚付着したものと思われる。208は大きさから寛永通寶鉄四文銭と推測される。

近代の貨幣

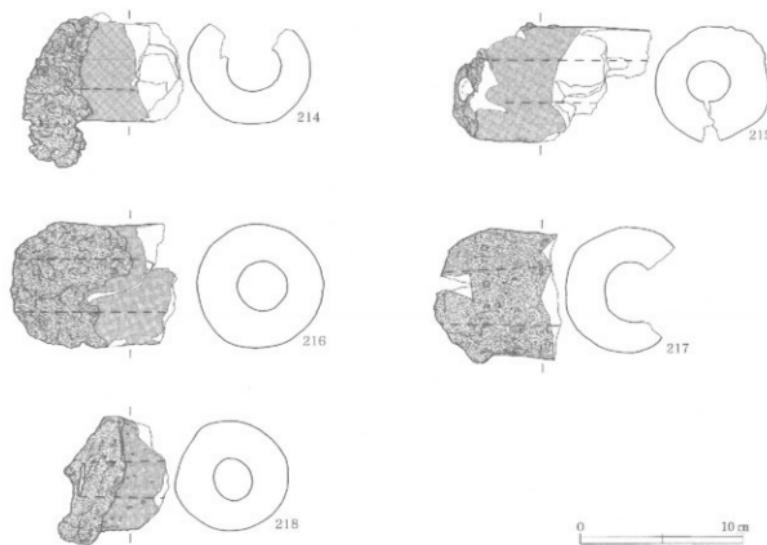
209～213は近代以降の貨幣である。209は1877年（明治10年）の半銭銅貨である。210は明治時代の一銭銅貨であるが、腐食のために年号を読み取れない。211は1920年（大正9年）の一銭銅貨である。212は鋏製であるが、刻印を読み取れず、貨幣か否か判断できない。213は明治時代の一銭銅貨であるが、腐食のために年号を読み取れない。

9 羽 口 (第37・38図、写真図版19)

17点を図示した。214～218は1号排滓場からの出土である。1号排滓場からは全部で10.2kgの羽口が出土した。この中で図示した羽口の合計重量は1.9kgである。219～230は2号排滓場からの出土である。2号排滓場からは総量で25.9kgが出土した。この中で図示した羽口の重量は7.3kgである。羽口の中でも完存品は一個体も得られなかった。最長は229の15.3cmである。径は6.6cmから8.6cmまでばらつきがある。孔の径は2.3cmから3.5cmまである。いずれも先端は融解したガラス状になり、その次は灰白色の還元色部分、そして橙色の素焼き土製品の色調になっている。先端は斜めになり、下部には鍛冶滓が流出した状態で付着するものがある。いずれも鍛冶の際の、箱ふいごに装着した羽口と推測される。

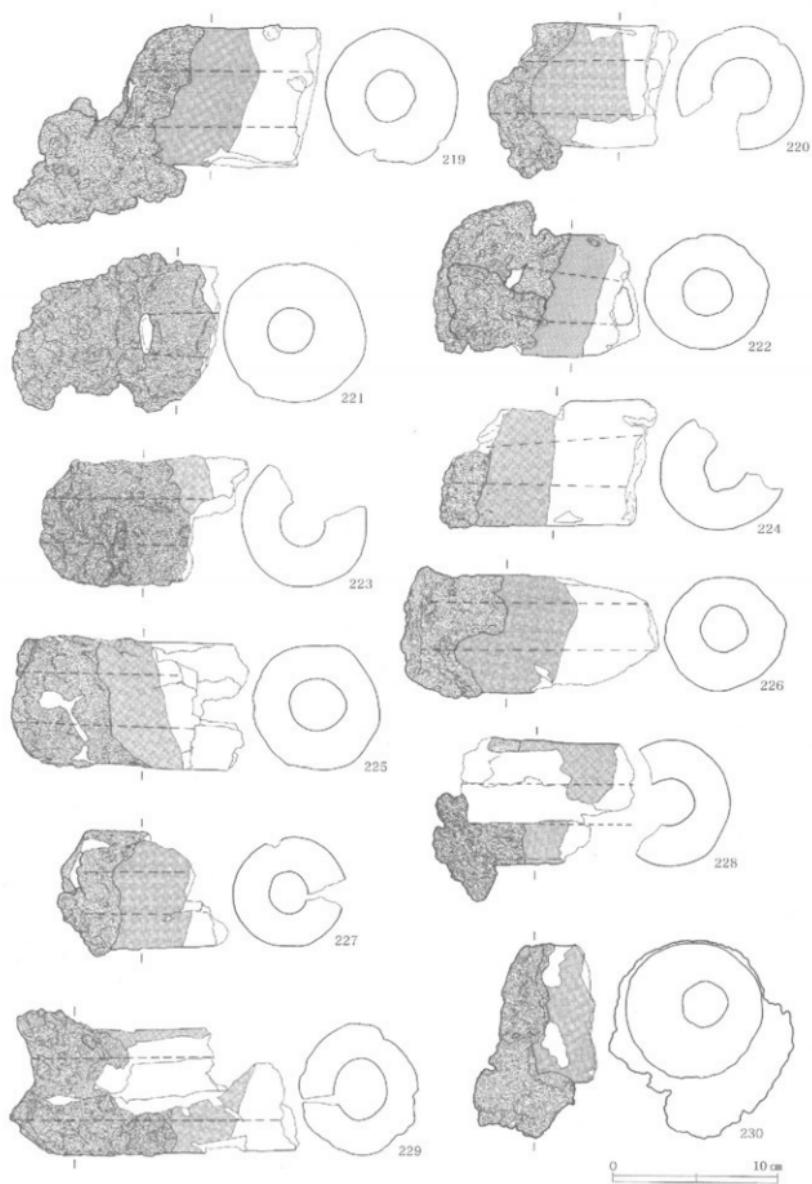
10 鉄滓、鍛造剥片 (写真図版20)

鉄滓は1号排滓場から137kg、2号排滓場から323kgが、合計460kgが出土した。いずれも鍛冶の作業によって生じた鍛冶滓である。写真図版26には碗形滓と塊状の滓を示している。また鍛造剥片が排滓場、1号土坑埋土、鍛冶炉周辺に包含されていた。磁石によって探集し、持ち帰った鍛造剥片は合計19.5kgである。その一部を写真図版26に示している。鍛冶滓2点と鍛造剥片1点について自然化学分析をおこなっている（VI 自然化学分析参照）。



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			重さ (g)	その他
			直径	孔径	長さ		
214	羽口	1号排水場	7.4	3.2	9.1	370	スクリーン部分墨色（以下同じ）
215	"	"	6.9	2.8	11.1	365	
216	"	"	7.8	3.0	9.6	420	
217	"	"	7.7	3.2	6.9	250	
218	"	"	6.6	2.3	5.7	205	
219	"	2号排水場	7.8	2.9	11.4	1,175	焼治済多量付着
220	"	"	7.7	3.5	8.1	365	
221	"	"	8.6	2.7	6.1	561	
222	"	"	7.5	2.9	10.8	590	
223	"	"	7.5	2.7	11.4	420	
224	"	"	7.4	2.6	11.9	560	
225	"	"	7.5	3.4	14.1	725	
226	"	"	7.2	2.9	15.0	505	
227	"	"	6.7	2.7	9.9	355	
228	"	"	7.5	2.7	10.8	400	
229	"	"	7.3	3.0	15.3	631	外観に瘤状の調整痕跡有
230	"	"	8.4	2.7	5.7	580	

第37図 羽口①



第38図 羽口②

VI 自然科学分析

I 押切遺跡出土鉄滓の分析調査

JFEテクノリサーチ株式会社

調査資料と調査項目

資料No.1～No.3の3点について分析調査をおこなった。

表1 調査資料と調査項目（押切遺跡出土資料）

資料 No.	資料種別 出土地点 出土遺構	重量 g	着磁力	M C 反応	外観写真	化学成分	組織写真	X線回折
1	鉄滓（1号排洋場）	387.5	無	無	○	○	○	○
2	鉄滓（1号排洋場）	512.4	弱	無	○	○	○	○
3	鉄滓 線造剥片	4.6	稍強	無	○	○	○	○

注(1) 資料番号、出土遺構、資料種別は提供の記載資料による。 (2) ○は、観察・測定調査の実施項目を示す。

(3) M C 反応とは、メタルチェック（金属探知機）による残存金属の有無を示す。

調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて示す。表2は鉄滓資料の化学成分分析結果および表3は鉄滓資料のX線回折結果をそれぞれ示す。

全資料の外観写真を62頁、鉄滓のミクロ組織写真を63頁にそれぞれ示す。

各資料の調査結果をまとめ、最も確からしい推定結果を最後にまとめる。資料の番号順に述べる。

資料番号1 鉄滓（精鍛鐵冶治）、着磁力：無、M C：無

外観：長さ110mm×幅85mm×厚さ61mm、重量387.5g。鉄塊系と見られる重量感がある資料である。鉄滓、木炭、耐火材（土）が混在している。写真No.1-1の上面は耐火材で、右側に鉄滓、下面に木炭と鉄滓がそれぞれ混在している。写真No.1-2左に凸凹形状の鉄滓と木炭が混在（黒褐色）している。右は黄土色で耐火材と混在している。

顕微鏡組織：写真No.1-1、写真No.1-2とも同様の組織を呈している。写真前面には歯玉状のウスタイト、写真の背面にはやや太い短柱状のファイヤライトが観察される。鍛冶滓にみられる組織である。

X線回折：回折鉱物には、ウスタイト（Wustite: FeO）、ファイヤライト（Fayalite: Fe₂SiO₄）、マグネタイト（Magnetite: Fe₃O₄）、リューサイト（Leucite: KAlSi₂O₆）およびゲーサイト（Goethite: α-FeOOH）が同定された。胎上成分も検出されたが、顕微鏡組織の観察結果と一致している。マグネタイトはウスタイト中に混在していると見られる。ゲーサイト（錆化鉄）は、金属鉄が製造過程で生成していたが、金属鉄は既に錆化していることを示す。

化学分析：鉄滓の化学成分分析の結果を表2に示す。全鉄56.0%に対して、ウスタイトは58.7%、ヘマタイトは14.6%で、Fe₂O₃とFeOの比率は20:80で、シリカ17.3%では、平衡状態図のウスタイトの領域に近いと見られる。化合物0.92%を含んでいるので、錆化鉄（ゲーサイト）を含んでいると推察される。

滓中成分の指標となる造滓成分は23.5%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタンは0.28%と低い。したがって、始発原料を砂鉄と判断できないし、酸化マンガンが0.05%と低いので、

始発原料を鉱石系とも判断できない。鍛冶滓の特徴である。

本資料は、鍛錬鍛治滓のグループに属していると見られる。二酸化チタン成分が0.28%と低く、造滓成分が23.5%とやや低く、顕微鏡組織を考慮すると、鍛治工程（左下場）で生成した鉄滓と推察される。すなわち、精鍊鍛治工程の後期から鍛錬鍛治工程の初期段階と推察される。

したがって、本資料は、①製鉄工程の鍛治工程で生成した鉄滓で、②精鍊鍛治滓と推定される。

資料番号2 鉄滓（精鍊鍛治滓）、着磁力：弱、MC：無

外観：長さ116mm×幅91mm×厚さ56mm、重量512.4g。No.1資料と同様に重量感がある資料。鉄滓、木炭、耐火材（上）が混在している。写真No.2-1の上面は黄土色の鉄化鉄と、中心部に酸化鉄が多く黒色の鉄滓が混在している。写真No.2-2は、全体に黒褐色で、左側に凸凹形状に木炭と鉄滓が混在している。中間部に四角形状の鍛造剥片が付着している。

顕微鏡組織：写真No.2-1、写真No.2-2とも同様の組織を呈している。写真の前面には珊瑚状のウスタイト、写真の背面には太い短筒状のファイヤライトが観察される。精鍊鍛治滓から鍛錬鍛治滓にみられる組織である。

X線回折：回折試料には、ウスタイト（Wustite : FeO）、ファイヤライト（Fayalite : Fe₂SiO₄）、マグネタイト（Magnetite : Fe₃O₄）、リューサイト（Leucite : KAlSi₃O₈）およびゲーサイト（Goethite : α-FeOOH）が同定された。胎土成分も検出されたが、顕微鏡組織の観察結果と一致している。

化学分析：鉄滓の化学成分分析の結果を表2に示す。全鉄55.3%に対して、ウスタイトは60.0%、ヘマタイトは12.2%で、Fe₂O₃とFeOの比率は17:83で、シリカ18.6%では、平衡状態図のウスタイトの領域に近いと見られる。化合水0.89%を含んでいるので、鉄化鉄を含んでいると推察される。

洋中成分の指標となる造滓成分は26.4%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタンは0.20%と低い。したがって、始発原料を砂鉄と判断できないし、酸化マンガンが0.10%と低いので、始発原料を鉱石系とも判断できない。鍛冶滓の特徴である。

本資料は、砂鉄系鍛錬鍛治滓のグループに属していると見られる。二酸化チタン成分が0.20%で、造滓成分が26.4%含まれるので、顕微鏡組織を考慮すると、鍛治工程（左下場）で生成した鉄滓と推察される。すなわち、精鍊鍛治工程の後期から鍛錬鍛治工程の初期段階と推察される。

したがって、本資料は、①製鉄工程の鍛治工程で生成した鉄滓で、②精鍊鍛治滓と推定される。

資料番号3 鍛造剥片（鍛錬鍛治滓）、着磁力：稍強、MC：無

外観：全資料510.4gから鍛造剥片資料4.6gを抽出し、①8×6×1.5、②5×5×1、③7×4×1mmの資料0.46gを測定対象とした。

典型的な鍛造剥片である。厚さがやや厚いので、大型の鉄製品であったかもしれない。

顕微鏡組織：写真の前面には珊瑚状と半円のウスタイト・マグネタイトが観察され、その隙間にガラス質滓が観察される。急速に冷却された組織で、粒状滓や鍛造剥片の特徴的な組織である。

X線回折：回折試料には、ウスタイト（Wustite : FeO）、マグネタイト（Magnetite : Fe₃O₄）、ヘマタイト（Hematite : Fe₂O₃）およびシリカ（Quartz : SiO₂）が同定された。ウスタイトには、マグネタイトやヘマタイトが混晶を形成している。

化学分析：鉄滓の化学成分分析の結果を表2に示す。全鉄70.1%に対して、ウスタイトは58.3%、ヘマタイトは35.2%で、Fe₂O₃とFeOの比率は38:62で、シリカ2.3%では、平衡状態図のウスタイトとマグネタイトの境界領域に近いと見られる。化合水0.39%を含んでいるので、僅かに鉄化鉄（ゲー

サイト) を含んでいると推察される。

津中成分の指標となる造済成分は3.5%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタンは0.03%と低い。したがって、始発原料を砂鉄と判断できないし、酸化マンガンが0.24%と低いので、始発原料を鉱石系とも判断できない。鍛冶津の特徴である。

本資料は、鍛錬鍛冶津のグループに属していると見られる。二酸化チタン成分が0.03%と低く、造済成分が3.5%と低いので、図1と図3から外れている。図2に示すNo.3データ(右下)の延長(外挿)は、T.Fe(全鉄)=74%で交差している。これは、参考図3の酸化鉄の平衡状態図のW点(O=26%)に相当する。鍛造温度575°C以上で加工処理され、表面に形成した酸化鉄薄膜(鍛造剥片)が急速に冷却されたとすれば、ウスタイトとマグнетタイトが共存する結晶領域を示す。すなわち、鍛造剥片はやや強い磁性を示す。

したがって、本資料は、①製鉄工程の鍛冶工程(本場)で生成した鉄津で、②鍛錬鍛冶津(鍛造剥片)と推定される。

まとめ

本調査は鉄津3資料である。化学成分分析、顕微鏡ミクロ組織およびX線回折の結果からまとめる。

- (1) 資料No.1～No.3は、鉄津中の二酸化チタンおよび酸化マンガンの含有量が低く、始発原料を推定することはできなかった。
- (2) 資料No.1とNo.2は、鍛冶工程(左下場)で生成した精錬鍛冶津と推定された。すなわち、精錬鍛冶工程の後期から鍛錬鍛冶工程の初期段階で生成したと推察される。No.2資料には、鍛造剥片が付着していた。
- (3) 資料No.3は、鍛冶工程(本場)で生成した鍛錬鍛冶津(鍛造剥片)と推定される。

表2 鉄津の化学成分分析結果(%)

資料 No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	比率(%)	
											Fe ₂ O ₃	FeO
1	56.0	0.16	58.7	14.6	17.3	3.36	1.11	0.35	0.18	1.15	19.9	80.1
2	55.3	0.16	60.0	12.2	18.6	4.05	1.56	0.53	0.25	1.40	16.8	83.2
3	70.1	0.13	58.3	35.2	2.31	0.66	0.24	0.08	0.04	0.13	37.7	62.3

資料 No.	TiO ₂	MnO	PsOs	Co	C.W.	C	V	Cu	TiO ₂ /T.Fe	MnO/TiO ₂	造済 成分%
1	0.28	0.05	0.151	<0.001	0.92	1.02	0.009	0.003	0.0050	0.179	23.5
2	0.20	0.10	0.164	<0.001	0.89	0.04	0.002	0.018	0.0036	0.500	26.4
3	0.03	0.24	0.093	0.007	0.39	0.20	0.001	0.043	0.0004	8.000	3.5

C.W.=化合物、造済成分= SiO₂+ Al₂O₃+ CaO+ MgO+ Na₂O+ K₂O

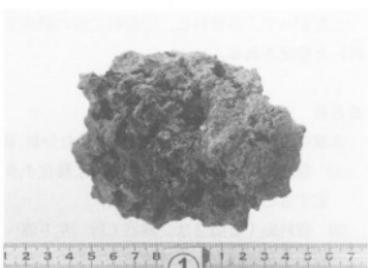
表3 鉄滓のX線回折鉱物と製造工程の分類

資料No.	資料の種別	X線回折鉱物	製造工程の分類
1	鉄滓	W, F, M, Le, Go	精錬鍛冶滓
2	鉄滓	W, F, M, Le, Go	精錬鍛冶滓
3	鍛造剝片	W, M, H, Q	鍛造剝片

鉱物記号: W (ウスタイト : Wustite-FeO), M (マグネタイト : Magnetite-Fe₃O₄),
F (ファイヤライト : Fayalite-Fe₂SiO₄), Go (ゲーサイト : Goethite- α FeOOH),
Le (リューサイト : Leucite-KAlSi₃O₈), Q (シリカ : Quartz-SiO₂)



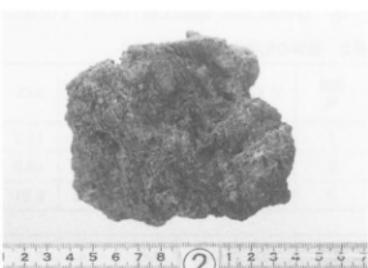
資料No.1 外観



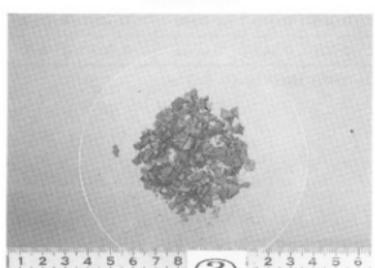
資料No.1 外観



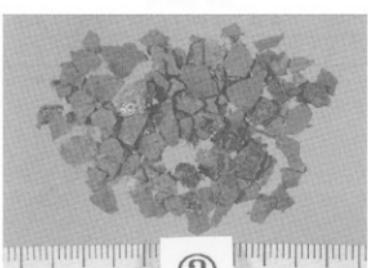
資料No.2 外観



資料No.2 外観

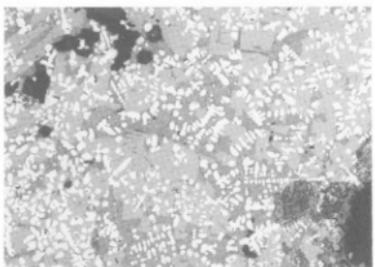


資料No.3 外観

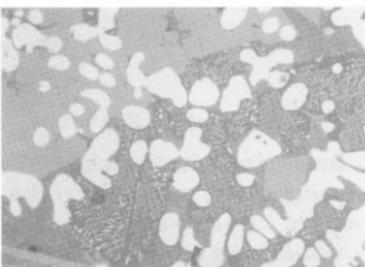


資料No.3 外観

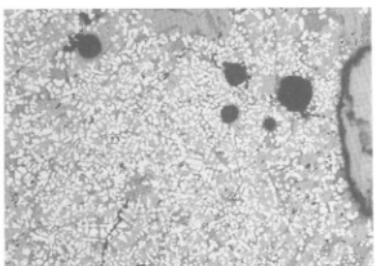
資料の外観



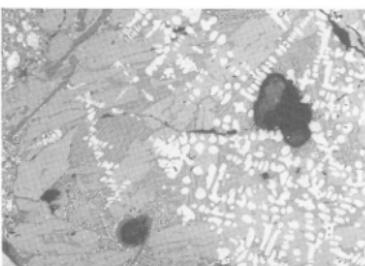
資料No.1-1

 $\times 100$ 1cm : 100μm

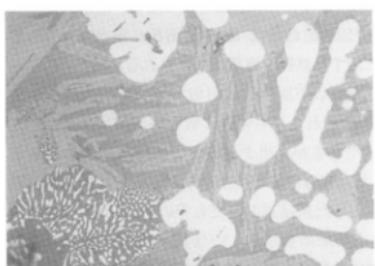
資料No.1-1

 $\times 400$ 1cm : 25μm

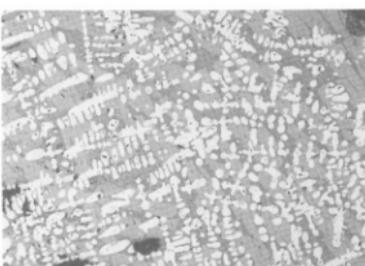
資料No.1-2

 $\times 100$ 1cm : 100μm

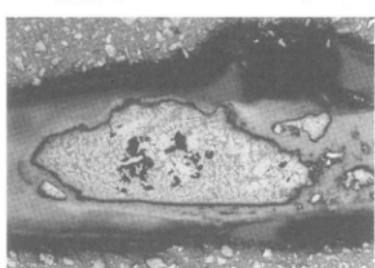
資料No.2-1

 $\times 100$ 1cm : 100μm

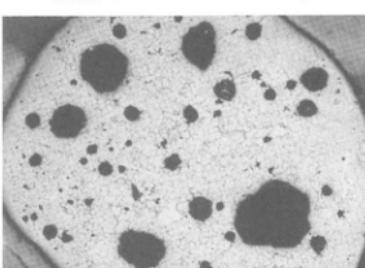
資料No.2-1

 $\times 400$ 1cm : 25μm

資料No.2-2

 $\times 100$ 1cm : 100μm

資料No.3-1

 $\times 100$ 1cm : 100μm

資料No.3-2

 $\times 100$ 1cm : 100μm

顕微鏡ミクロ組織

VII まとめ

1 近代遺構の成立と廃絶年代

遺跡地内調査地内には昭和23年頃まで2つの屋敷が所在していたという。この調査区内の屋敷と近辺の状況について、下衣川地区在住の千葉喜美雄氏（字池田西、昭和15年生れ）、千葉邦夫氏（昭和13年生れ）に聞き取りをおこなった。

2つの屋敷は隣接しており、どちらも「菅原」姓の家であった。国道4号側の家が、「菅原善吉家、西側の家が「菅原貞作家」である。「善吉」「貞作」は当時の居住者の名前である。これらの屋敷は昭和22年のカサリン台風、23年のアイオン台風による洪水で大きな被害を受け、移転したという。

移転先は首原善吉家が下衣川字瀬原（現当主善市氏、民宿おつきり荘経営）、菅原貞作家が子六日市場（現当主貞行氏）である。また、当時は現在の衣川に面する暫定堤防部分が衣川上流に向かう道路であったという。この川沿いの道路はアイオン台風後に堤防が築かれた際に廃され、現在の遺跡北側にある東西の村道はこの時に新設されたものである。また、調査区中央付近の衣川に面する部分には、「木場」があったという。「木場」は川に流した伐採した木を拾い上げ、貯木し、出荷する施設である。衣川に面して桟橋のような施設が存在していたと記憶されている。

国道側に面していた「菅原善吉宅」は、調査区内の東端の旧ドライブインの敷地から、現在の国道4号の部分までが屋敷地と推測される。この旧ドライブインの敷地部分は、第II検出面より深く攢乱が及んでおり、遺構が残存していないかった。「菅原貞作家」は、今回の調査で検出された遺構部分が屋敷の範囲と推測される。「菅原貞作家」は鍛冶を生業にしており、今回検出された鍛冶に関連する遺構群がその屋敷に関連することを物語っている。よって今回検出の近代の遺構、遺物は鍛冶屋を営んでいた「菅原貞作家」に属すると推測できる。「木場」に関する直接の遺構は検出されなかった。

上記の聞き取りから、検出した菅原家に関する近代遺構の下限年代は昭和23年と理解できる。出土遺物には昭和16～20年の「統制陶器」がみられるが、それよりも明確に新しい遺物は存在せず。昭和23年の下限年代とは矛盾しない。屋敷の開始年代であるが、出土品の中には18世紀代の皿がまとまって出土しているが、出土地点、層位等を考えると近代遺構群とつながりがあるとは思えず、直接の関係は有しないと推測できる。遺構群に伴って出土した陶磁器の中で占手のものは16、17の瀬戸産磁器碗がある。これらは近世に屬するが、いずれも幕末のもので、17は1850年代の製造と判断できるものである。この磁器碗の年代から、屋敷の開始時期の上限が1850年代と解釈できそうである。安永風土記（1777年）の下衣川の屋敷名には「押切」の名は無く、1866年の「下伊沢下衣川村高人數御改帳記」にも「押切」の名の屋敷は存在しない。これから推測すると、押切菅原家の屋敷開始年代は明治初頭頃が妥当と考える。

『近世の衣川』（佐々木元貴1995）203頁には、「享保21年押切にて、六日市場屋敷甚平の畠が木材御蔵として利用されている」とあり、遺跡近辺に所在していた「木場」が享保21年（1736年）に何かのぼることが伺える。

2 出土遺物について

12世紀のかわらけ

深堀トレンチのXII層から6片の手づくねかわらけが出土している。XII層はにぶい黄橙色の砂層

で、洪水堆積層と推測される。出土状況から、かわらけ片は洪水時に土砂とともに上流部から運ばれて来たものと推測される。本遺跡の西方（衣川上流側）約600mには12世紀のかわらけを多量に包含する接待館遺跡が所在し、かわらけの流出源の可能性がある。また、かわらけが出土した層は現地表下約4mのレベルで、遺跡周辺の地形、環境が12世紀以来大きく変化していることを物語っている。出土した6片のかわらけはいずれも大型の手づくねかわらけと推測される。II面から出土した1点も大型の手づくねかわらけである。いずれも細片で、詳細な時期区分は難しい。大きく12世紀後半のものとしておく。

近世陶磁器

2点の陶器皿と6点の1690～1780年代の磁器皿、幕末期の2点の磁器碗が出土している。陶器皿は16世紀末～17世紀初頭のものであるが、本来所属すべき層位、遺構は明確ではない。6点の磁器皿はいずれも1690～1780年代の肥前産染付皿である。出土層位を明確にできなかったが、概ね同一のレベル、地点から出土しており一括性のある遺物と推測される。近世の記録に表れる「木材御藏」に係わる遺物の可能性が想像される。2点の幕末期の磁器碗の製造年代は明治維新前であるが、近代の鍛冶屋を営んだ屋敷で使用された遺物と推測される。

近代陶磁器 94点を図示したが、他にも27.1kgの不掲載の陶磁器が出土している。近代陶磁器の製造年代については、その纏年が確立しているとは言い難い状況であるが、明治初頭頃（1870年頃）から昭和20年頃（1945年頃）の陶磁器と推測される。時期を伺い知れるものには45、100の「統制陶器」がある。これは1941～1945年の製造である。また43の子供茶碗には五輪マークが彫かれ、1936～1938年頃の製造と推測される。遺跡地内に所在した屋敷は昭和23年（1948年）のアイオン台風で被害を受け転居したとされる。このことから、出土した陶磁器群の下限年代が明らかになり、近代陶磁器の纏年作業の一助に成り得る資料である。

ガラス瓶 46点を図示したが、他に窓ガラス片なども含めて不掲載分が7.7kgある。ガラス瓶の年代も近代陶磁器と同様に明治初頭頃から昭和23年までのものと推測される。製造時期を特定できるものに138の汽車茶瓶がある。ガラス製の汽車茶瓶は大正10年（1921年）に登場したが、安全面、質感から不評で、使用期間は短かったという。よって138は1921年頃のものとすることができる。

その他の遺物 金属製品、石製品、合成樹脂製品が出土した。いずれも近代以降の製品と推測される。挽き臼の鉄臼には6分割のものと、放射状のものがあるが、平泉町内の事例からすると、放射状のものが古い傾向にあるようである。

銭貨 渡米銭（洪武通寶）1点、寛永通寶22点、近代以降の貨幣5点が出土した。洪武通寶は近代の排溝場から出土しており、近代の生活面に伴っている遺物である。同様に寛永通寶も、近代の遺構面に伴う状態での出土である。近代の貨幣は「明治10年」、「大正10年」の製造年代のものがあり、近代遺構の年代の一端を示す資料である。

鍛冶関係の遺物 羽口、鍛冶津、鍛造剥片が出土している。これらは一連の鍛冶の作業に係わるもので、明治初頭から昭和23年頃に属するものである。

3 「押切」に関する文献記録

『地名用語源辞典（楠原佑介編 1983 東京堂出版）』によると、「押切」という地名は「堤防などの決壊しやすい個所、また一般に崩壊地形を表した地名か。」とある。本遺跡は衣川に接し、河川による浸食が「押切」の地名語源になったことは明白である。

先に記した「近世の衣川」には古文書からの引用として、「享保21年押切にて、六日市場屋敷甚平の畠が木材御藏として利用されている」とあり、押切の地名が享保21年（1736年）に存在したことがわかる。管見に及ぶ限りでは、これが「押切」の地名の最古事例である。

安永6年（1776年）の下衣川村風土記書出（安永風土記）の「橋」の項目では「**、押切十橋 良三
抬閣 幢三間 当郡宿沢町より奥井郡西岩井山田町往道通路ニ候**」とあり、奥州街道（現国道4号）に架かる衣川の橋が「押切橋」と称されていたことがわかる。

天明6年（1786年）1月20日、前沢方面から平泉に向かった首江真澄は、衣川付近を通過の際の事柄として以下のように記している。（かすむ駒形）

浅からずおもひそめしとよめる衣川を橋より渡る。此水むかしは時に濁て、今は東に流ぬ。そこを押切りといふ、いにしへは兵多くうち死にし、あるいは洪水に流しといえり、其とき武藏坊ばかり上に流れしといふは、北上川も衣川も一面で流れるれど、衣川の水にしたがひ、上方、北ざまにがるるを寄手の見て、辨履のみ上に流るは、もともあやしき事といひしとなむ

「浅からずおもひそめでし」と詠んだ衣川を渡った。この水は昔は東北に向かっていたが、今は東に流れており、そこを「押切」という。昔ここで多くの兵が討死にし、あるいは洪水に流されたとのことである。その時、武藏坊介慶ばかりは、川上に流されたという伝説があるのは、北上川も衣川も洪水すべて一面に流れていたが、衣川の水流に従い、（中の瀬を渡った介慶だけが）上流の方向に北に流れるのを寄手の兵がみて、介慶ばかりが水上に流れしていくのは奇怪なことだと書いたという。（現代訳証 宮本常一編 1966『首江真澄遊記記2』東洋文庫68）

これには「押切」の地名起源説に、洪水関連とともに、多数の兵が討死した事も加えられている。多数の兵が討死したというのは、前九年、文治合戦の舞台となった衣川という地域性に加え、「押切」の「切」の字からの連想であろうか。また、押切付近から衣川の河道が北東に流路を転じていたという伝承が存在したことを探ることができる。

「近世の衣川」には、「大石ヶ沢前は宝暦年中の洪水により、欠け初め大水の度に浸食を大きくなり、天明の大洪水に大きく崩れ、五反歩ほど高畠代百七文の農地は川と変じたのである。」とある。「大石ヶ沢前」は調査区付近を指すと思われる。この河道変化で、下衣川村と中尊寺側で、地所の紛争が生じている。以下「近世の衣川」にはこの際に村方が中尊寺側に提出した文書（天明6年、1786年）が掲載されている。

当村大石ヶ沢前通衣川湧瀬先年より川欠地相之所御座候処南向先年之古川通り間に罷成候右谷起之内御竿地之川前通りに面右地相之所被渡下而發仕候様成下度願い申上候處右土地統之衆は私方より御合指支無之候ハハ御申上候様ニト御代官様より被御渡候ニ付右之段貢候様へ御普請仕右一地統之御方様衆へ御合被下御指支有無之様被御下候様仕度願を御渡仕告様へ御取合被下候様御賄仕候御指支無之由被御渡問御指支無之役共ニ申上顧指山候處於代官様より御一山御受領被成累候ハ右畠所之儀ハ御徐地統從往古御当山境内ニ前殺生禁斷之御所ニ而御百姓入合之地にも無之相粉申所聊も無之衣川よりも南方中尊寺分にて衣川村分より手人等可被及様無之所場ニ而御吟味不及由被御上候ニ付先達者方よりハ御指支無之御申上只今御一山より御指支被仰上候儀如何様之御ニ御扣可申由被御渡候如何様之儀ニ御座候哉被下候仕度如御座候以上：

下衣川村清水ノ上屋敷 千葉利惣右エ門

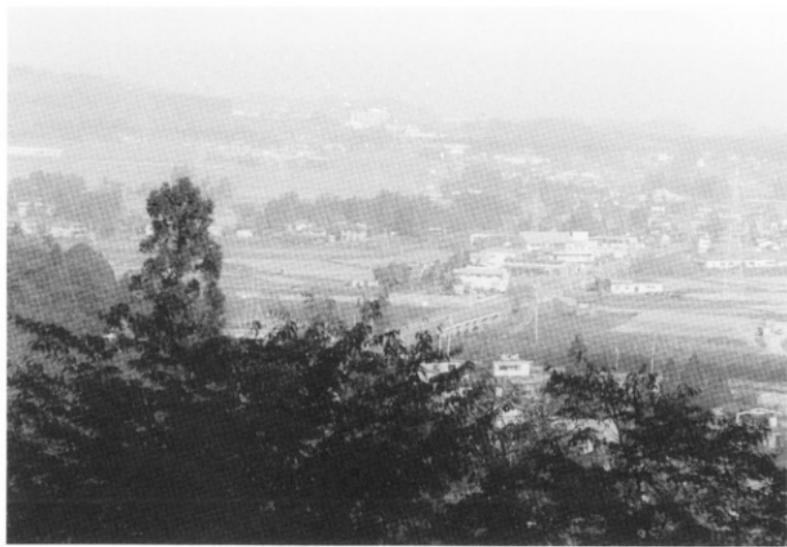
（天明六年）五月六日 中尊寺 西谷坊様

この文書の存在から、18世紀代には、遺跡付近の衣川が、徐々に北側に河道変化している様子が伺い知れる。

写 真 図 版



押切遺跡 調査前状況 (S→)



押切遺跡 調査区遠景 (S→)

写真図版 1 調査前・遠景



深掘トレンチ 図面①



深掘トレンチ 図面②

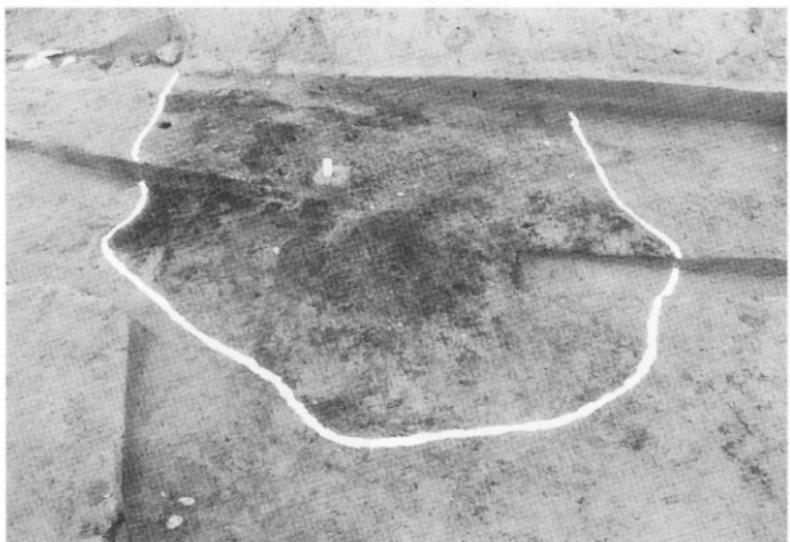


1号排溝場 平面

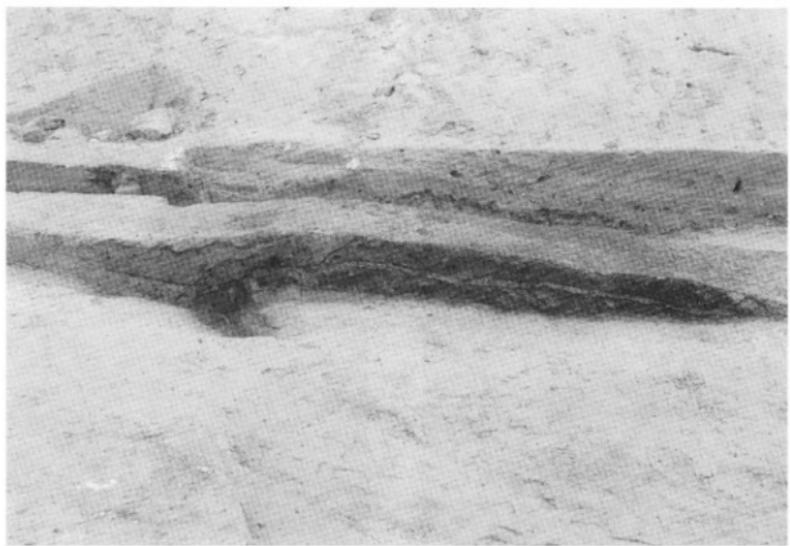


1号排溝場（A-B）断面

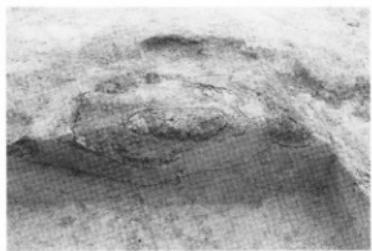
写真図版3 1号排溝場



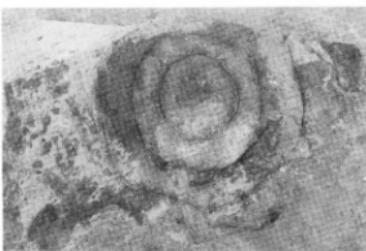
2号排泄場 平面



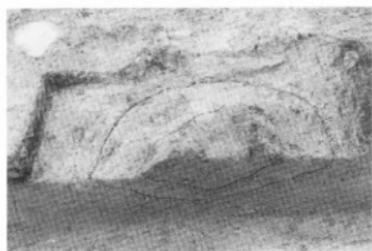
2号排泄場 (A-B) 断面



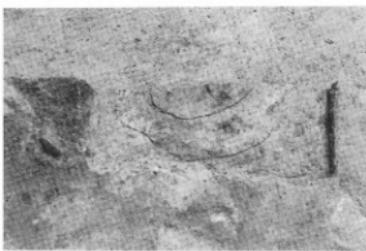
1号鍛冶炉 断面



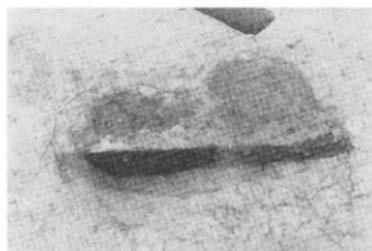
1号鍛冶炉 平面



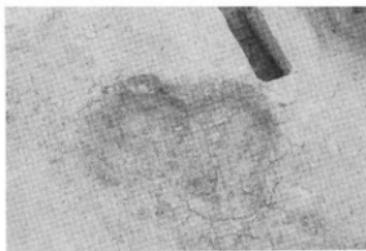
2号鍛冶炉 断面



2号鍛冶炉 平面



1号土坑 断面



1号土坑 完掘



1号溝 断面



1号溝 完掘

写真図版5 1・2号鍛冶炉、1号土坑、1号溝



1号石組み遺構 近景



1号石組み遺構 遠景



2号石組み遺構 近景



2号石組み遺構 遠景



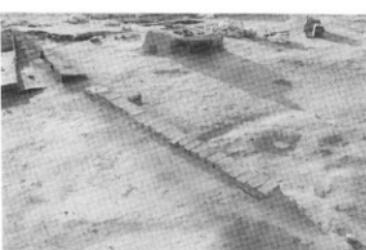
レンガ 断面① (N→)



レンガ 断面② (N→)



レンガ 平面 近景



レンガ 平面 遠景

写真図版6 1・2号石組み、第Ⅱ面レンガ組み



第I面 完掘 (E→)



第II・III面 完掘 (E→)



第II・III面 完掘 (N→)



第II・III面 完掘 (W→)



深掘トレンチ① (S→)



深掘トレンチ② (N→)

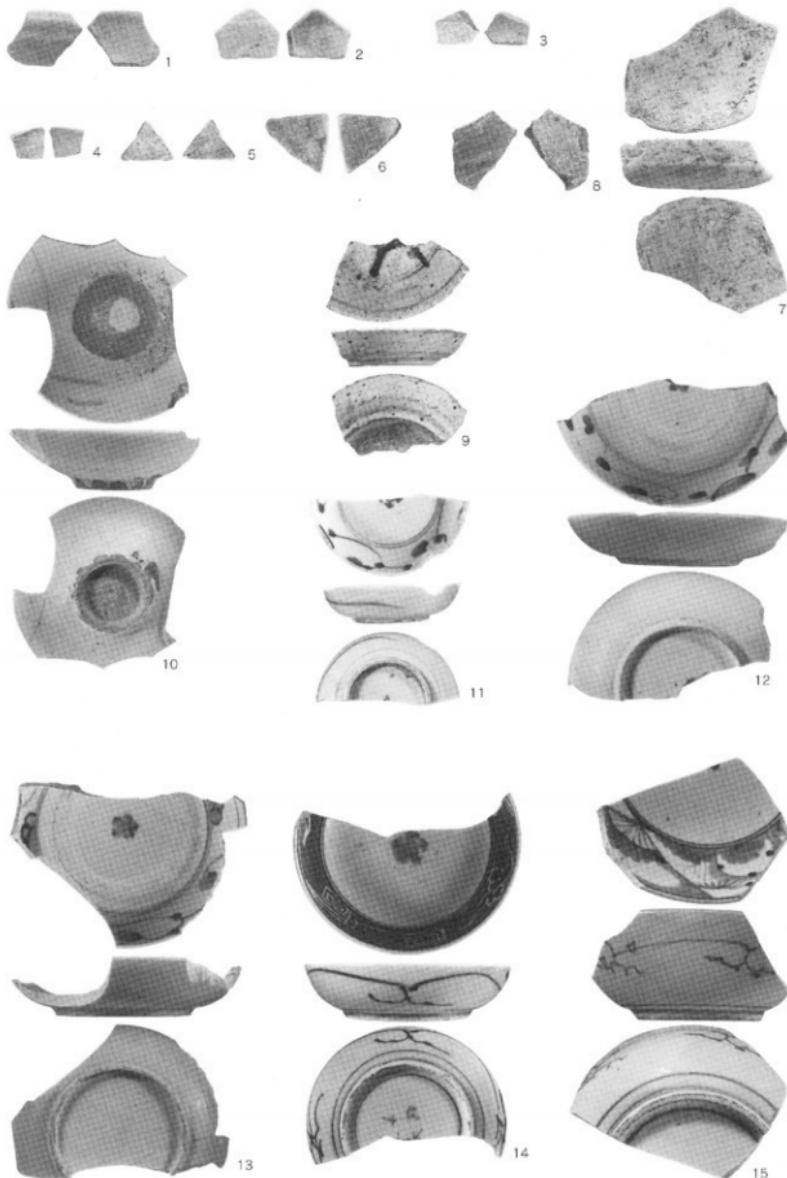


深掘トレンチ③ (N→)

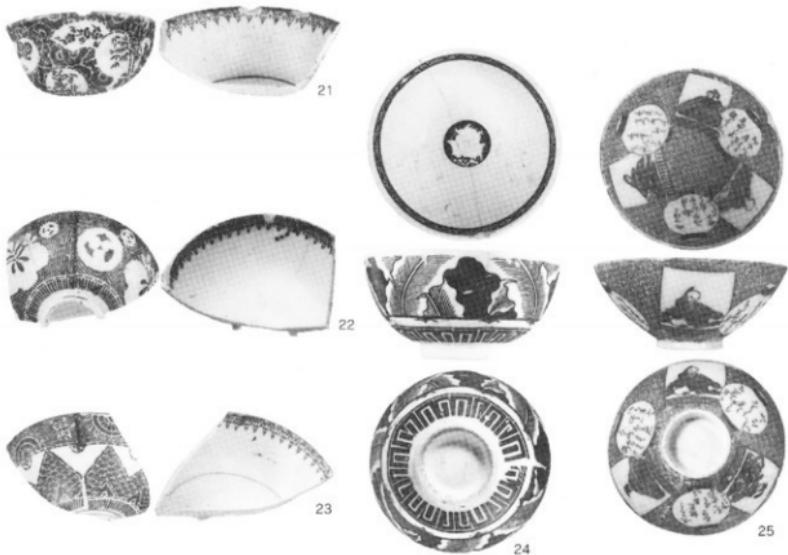
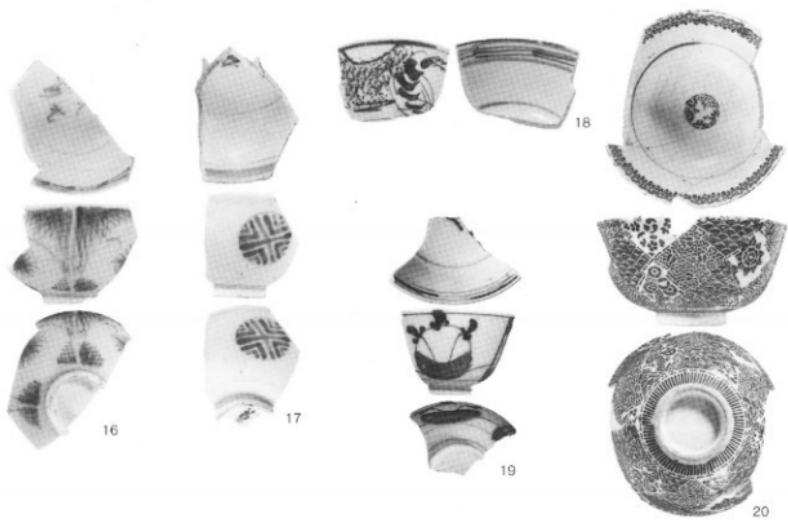


深掘トレンチ④ (N→)

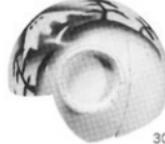
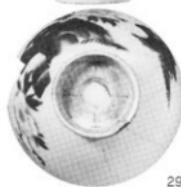
写真図版7 第I～II面、深掘トレンチ



写真図版8 かわらけ、近世陶磁器



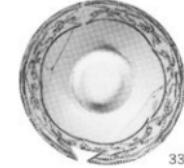
写真図版9 近代陶磁器①



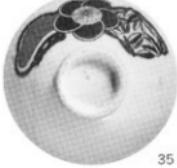
28



31

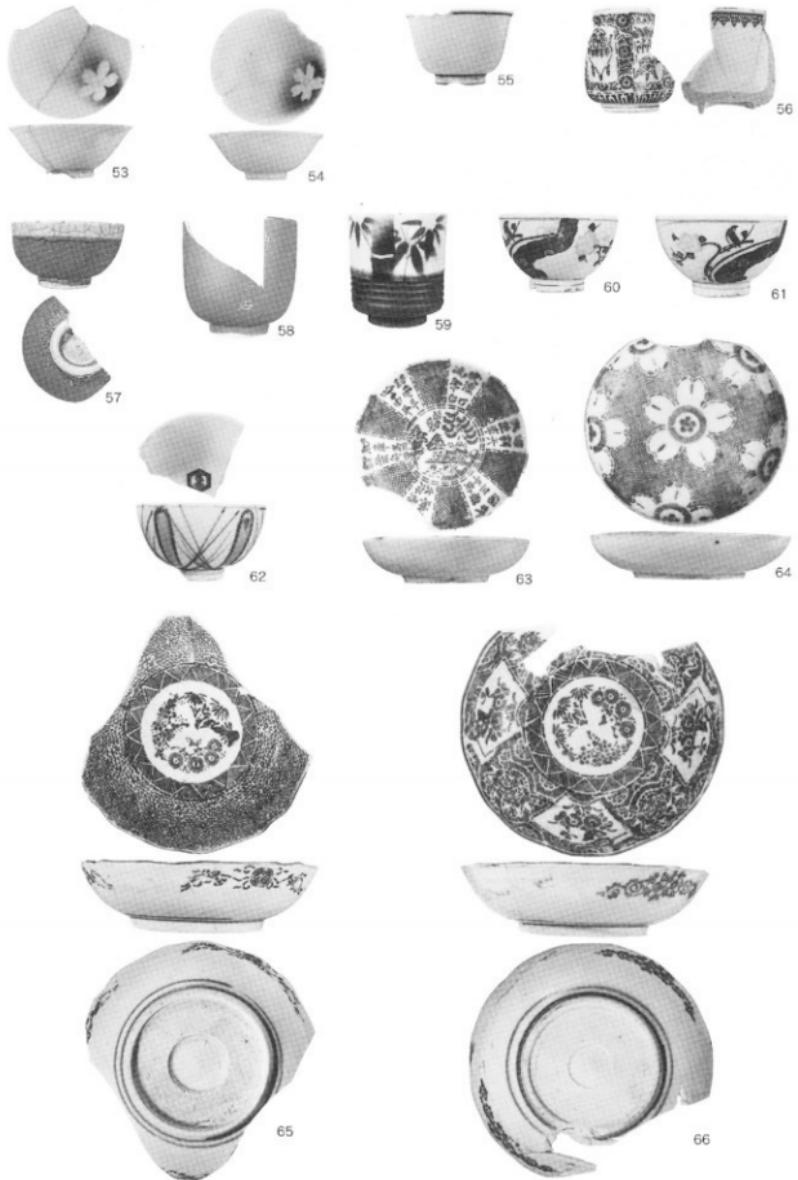


写真図版10 近代陶磁器②

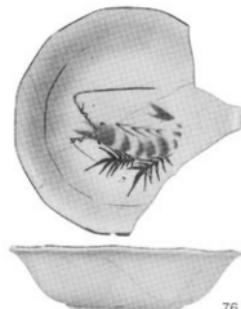
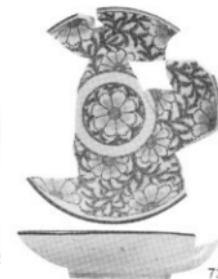
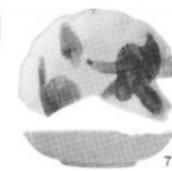
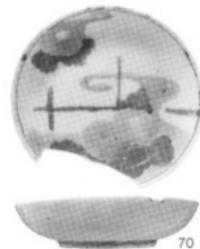
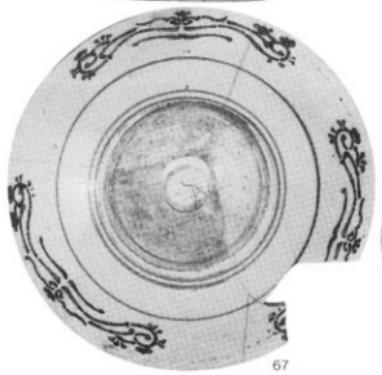
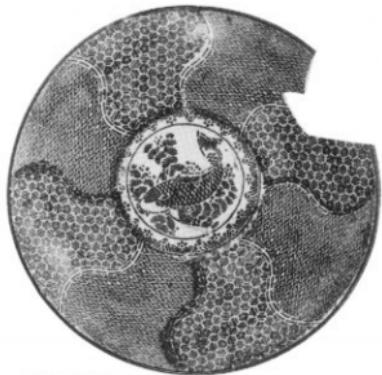




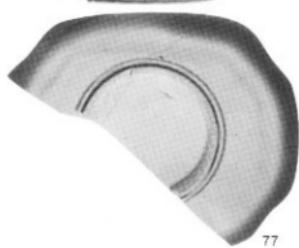
写真図版11 近代陶磁器③



写真図版12 近代陶磁器④



写真図版13 近代陶磁器⑤



77



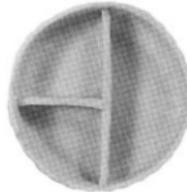
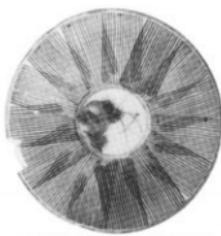
81



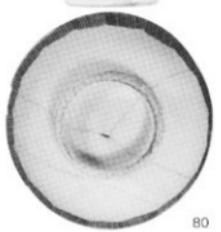
82



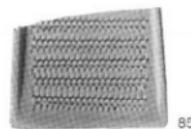
83



84



80



85



86

写真図版14 近代陶磁器⑥



87



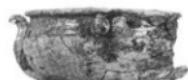
88



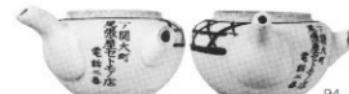
89



90



92



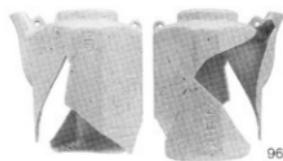
93



94



95



96



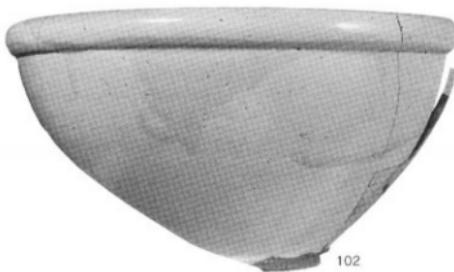
97



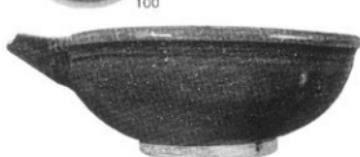
98



99

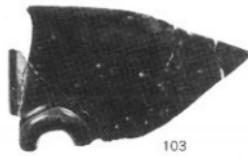


100

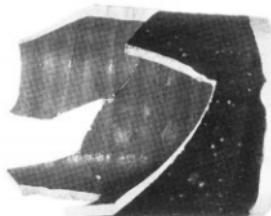


101

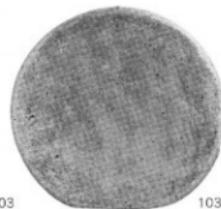
写真図版15 近代陶磁器⑦



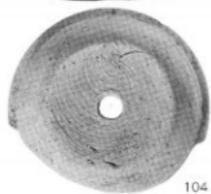
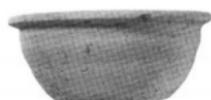
103



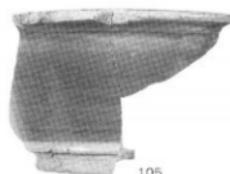
103



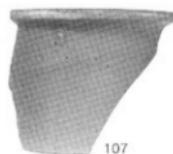
103



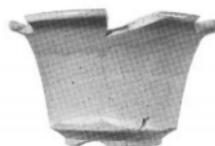
104



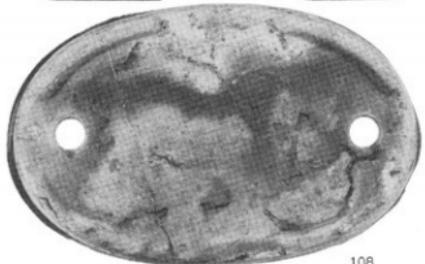
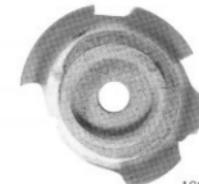
105



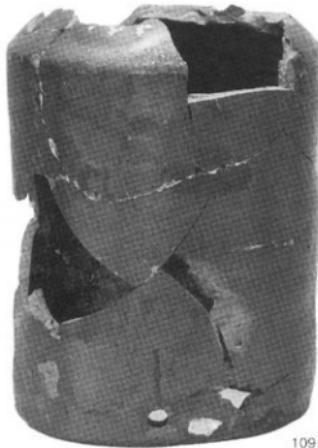
107



106



108

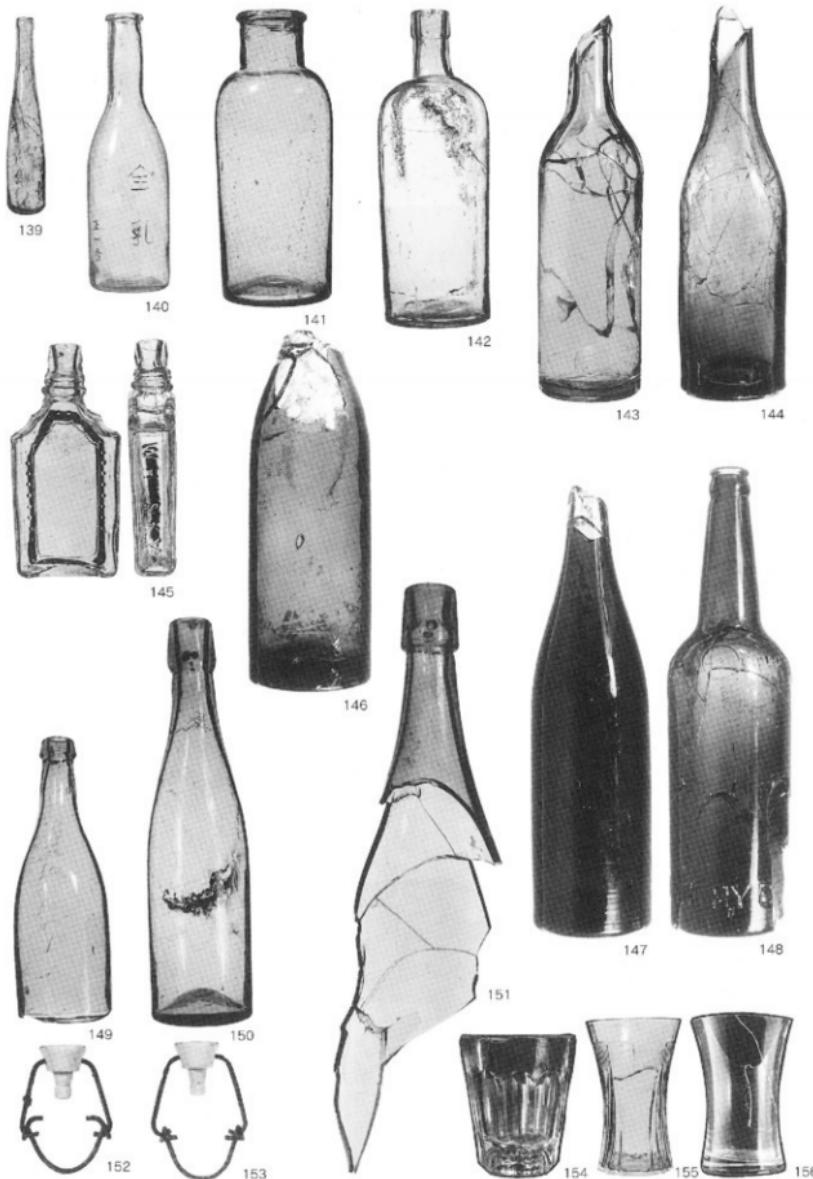


109

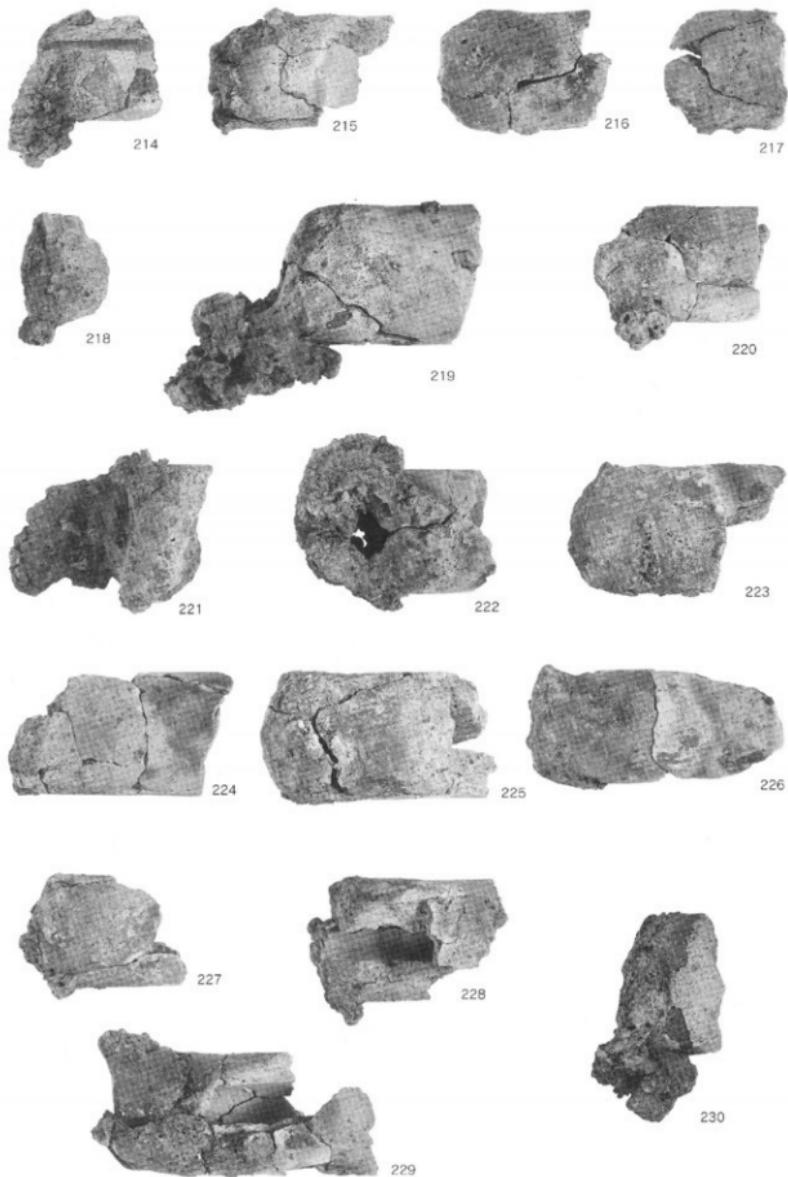
写真図版16 近代陶磁器⑧



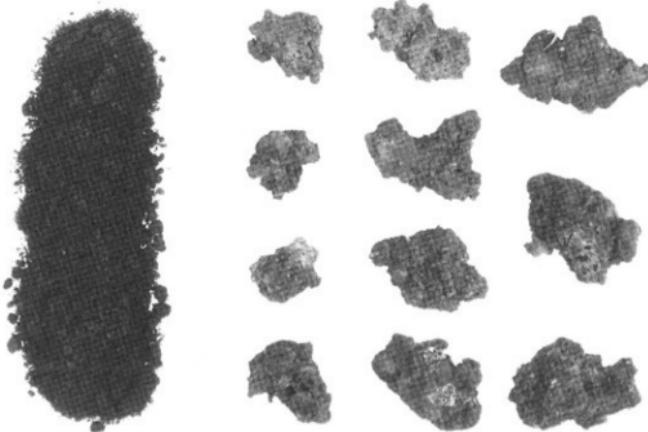
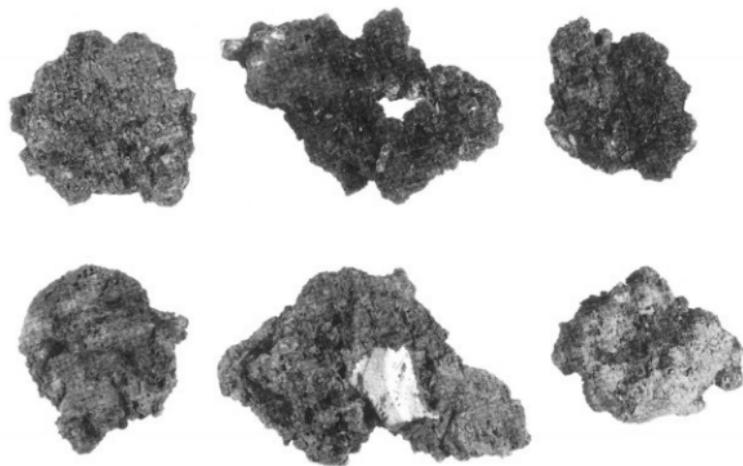
写真図版17 近代陶磁器⑨、ガラス製品①



写真図版18 ガラス製品②



写真図版19 羽口



写真図版20 銀治滓・銀造剥片

報告書抄録

ふりがな	おつきりいせきはつくつちょうきほうこくしょ							
書名	押切遺跡発掘調査報告書							
著書名	一関遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第493集							
著者名	鈴木裕明 羽柴直人							
編集機関	鈴木裕明 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2007年1月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
押切遺跡 岩手県奥州市 衣川区 大字下衣川 字大石ヶ沢1-4 ほか	岩手県奥州市 衣川区 大字下衣川 字大石ヶ沢1-4 ほか	03215 NEE65- 2359	39度 00分 22秒	141度 06分 23秒	2004.8.19 ~ 2004.9.30	3,920m ²	一関遊水地事業衣 川左岸築堤工事に 伴う緊急発掘調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
押切遺跡	集落跡 散布地	12世紀		手づくねかわらけ	現地表4mの下の洪流水層から12世紀の手づくねかわらけ出土			
		近世		陶磁器 銭貨				
		近代	鍛冶炉 耕作場 溝 石組み遺構 レンガ列 ゴミ穴	2基 2基 1条 2基 1条 1基				陶磁器 ガラス製品 鉄製品 鋼製品 合成樹脂製品 挽臼 砥石 刃口 鍛冶滓 鍛造剣片
								近代の鍛冶場遺構、屋敷跡を 検出
要約	押切遺跡は奥州市衣川区大字下衣川に所在し、衣川北岸の泥炭平野上に立地する。近代以降の鍛冶を生業としていた屋敷跡が検出され、鍛冶炉2基、耕作場2基、溝1条、石組み遺構2基、レンガ列1条、ゴミ穴1基を検出した。また陶磁器、ガラス製品など多量の近代遺物が出土している。鍛冶滓は総量で460kg、刃口は36.1kg出土している。また地表下4mの洪流水層から12世紀後半の手づくねかわらけ片が出土し、12世紀の平泉周辺の地形復元に良好な資料を提示できた。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第493集

押切遺跡発掘調査報告書

・閑遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査

印 刷 平成19年1月26日

発 行 平成19年1月31日

発 行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 内 海 印 刷

盛岡営業所 〒020-0875 岩手県盛岡市清水町8-8-106

電話 (019) 622-0288

本 社 〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4

電話 (0193) 23-5511

